
ドリームボックス～ここはヒューマンペット処理施設～

樹文緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリームボックス〜ここはヒューマンペット処理施設〜

【Nコード】

N6246S

【作者名】

樹文緒

【あらすじ】

見覚えのない部屋に押し込まれた10人の男女。

その首にはそれぞれ首輪が嵌められていた。

一切の状況が判らない中で、不意に備え付けのモニターに恐るべき光景が映し出される。それは馬のマスクを被った化け物による惨殺行為だった。身の危険を感じた男女10人は、その場からの脱出を試みる。

果たして10人の男女はこの地獄から無事に生還出来るのか……。

プロローグ(前書き)

そんなに酷くはないと思いますが、人死に描写があります。

プロローグ

男が目を覚ました時、視界に飛び込んできたのはあまりにも現実味のない光景だった。

四方を囲むのは愛想の欠片もない石造りの壁。

蛍光灯の代わりに蝋燭が光源として用いられ、不気味に揺らめいている。

辺りをしきりに見渡していた男の視線が不意に止まった。

「……………まさか……………これって……………っ……………!？」

やっとのことで絞り出した声は恐怖に歪み、乾ききっていた。その原因は壁の至る所に施されていた模様にあった。

否。それは単なる模様などではなく血痕。何らかの血液が飛び散り、乾いた跡であることに気付いたのだった。

途端、噎せ返るほどの血の臭いに強烈な吐き気と眩暈を覚え、男はその場にうずくまる。吐き気を堪えようと喉元に手を当てた瞬間、男は指先に触れた冷ややかな感触に戦慄した。

「……………なっ……………なんだ……………これ……………!？」

確認しようにも直接見る事は叶わず、仕方なく手探りで首もとをなぞっていく。

やがて男の脳裏に一つの言葉が浮かび上がる。

首輪。

そう。男の首には首輪が取り付けられていたのだった。

その姿はまるで死刑囚さながらである。

一体誰が……………何の為に？ 男の胸中でそんな疑問が湧き起こる。

半ばパニック状態に陥った男の意識に、不穏な音が滑り込んできた。何者かが重たい金属を引き摺りながら歩いて来ているような音。場の気温が一気に十度は下がった気がした男の背中に、悪寒が這いずり回った。

一步……………また一步と、金属を引き摺る音は次第に大きくなってい

く。

それは部屋の一方……三つの扉がある内、中央の扉から聞こえて来ているようだった。

男はその扉から視線を外すことは出来ず、軽い呼吸困難に見舞われながらも、必死に扉を見詰め続けた。

一秒が永久にも思えるほどに凝縮された時の中で、中央の扉は不穏な音を響かせて開いた。

「ッ……ッ!?」

現れた存在を視界に捉えた瞬間、男の全身が粟立った。血が蒸発したかのような錯覚に平衡感覚を失い、その場に尻餅をつく。

軽く二メートルは超える巨躯に、顔には馬のマスクを着用。手には大斧という、まるで悪夢を具現化したかのような存在が、男の眼前に立ちはだかっているのだった。

馬ヅラの異形は一切喋ることなく、ただ機械的な動作で大斧を頭上いっぱい振り上げた。

「や……やめ　　ッ……ッ……ッ!」

硬い何かが砕けたような鈍い音が響き、男の意識はそこで途絶えたのだった。

〈犬塚賢一〉の場合。

「ねえお母さん。僕、犬飼いたい。ねえねえ、お母さん。飼ってもいい?」

少年は母親の手を取って甘えた口調でねだる。母親としては少年の頼みを聞いてやりたいのだろうか、眉を八の字にして困り顔を浮かべた。

「賢一。もう少し我慢出来ない? 今、お父さんの会社も景気が悪いらしくてね……夏のボーナスも削られちゃたから家計が厳しいの……って、賢一にはまだ難しい話だったかしらね。とにかく今は犬を飼ってあげられる余裕なんてないわ……」

母親はそう言っつて、重たい溜息を吐いて肩を竦めた。

「……ダメなの?」

少年 賢一は瞳を潤まし、消え入りそうな声音で訴えかける。すると母親は再び溜息を吐いた。

だがそれは、先のそれとは重みが違った。あくまでも賢一の願いを叶えてあげたいという気持ちから来た溜息だった。その証拠に母親は賢一に対して柔和な微笑みを返していたのだった。

母親はそのままの表情で言葉を紡ぐ。

「どうしても飼いたいなら、お父さんに相談してみなさい。お父さんがいいって言ったら飼ってもいいわよ」

「ほんとに!?!」

それまでの泣き顔はどこへやら。賢一は大輪の笑顔を咲かせると、軽やかな口調で確認を取った。と、その時。

玄関のチャイムが高らかに鳴り響いた。

「お父さんだ!」

賢一は野生動物のごとき速度で反応を示すと、まるで、それこそ犬のような俊敏さで玄関へと駆け出して行った。

「お父さん、お帰りなさい!」

「えっ？ ……聞いてくれるの？」

てつきりお流れになってしまったと思いついていた賢一はすぐさま顔を上げ、継るような眼差しで問う。

「聞かないなんて言っただろ？ それにまだ、その頼みを叶えてやれるかも判らない。けど、物は試しだ。さあ話してごらん？」

父親の優しさに、賢一は今にも溢れ出しそうだった涙をぐっと堪えて、本題を切り出した。「ねえお父さん……僕、犬を飼いたいんだけど……やっぱりダメかな？」

尻すぼみに小さくなっていく賢一の声。

父親はそれまでの穏やかな表情を一変させ、真剣な面持ちで賢一を見据えて言った。

「いいかい、賢一。犬を始め、動物を飼うことはいいことだと思う。でもね、動物は決してオモチャなんかじゃないんだ。賢一と同じように生きているんだよ。その事は判るね？」

「うん。わかるよ」

どうにか顔を上げて返す。

いつになく厳しい父親の眼差しに気圧されながらも、賢一はじつと次の言葉を待つ。

「生きてるってことは世話をしなければいけない。いいかい？ 世話をするというのは」

「僕、ちゃんと世話する！ ちゃんと世話して……宿題だって自分の力でちゃんとやるから！」

父親の言葉を遮り、賢一は精一杯の思いを籠めて叫んだ。

純粹に……ひたむきに……。賢一は犬を飼いたいという気持ちを全身で主張した。

父親の言葉を遮ったことなんて、生まれて初めての経験だった。しかし、そうまでしてでも伝えないといけない。そんな思いが賢一の心には渦巻いていたのだった。

「賢一、顔を上げなさい」

不意に穏やかな父親の声が、賢一の耳に届いた。半ば戸惑いなが

らも、賢一は恐る恐る顔を上げた。父親と視線が合う。

「賢一の犬を飼いたいという気持ちはよく判った。だから父さんは飼うなどは言わない。ただひとつ約束して欲しいんだ」

「……約束？」

「ああ。犬を飼ったら、しっかりと世話をするという約束だ。どうだ。ちゃんと守れるか？」

その言葉を賢一が理解するまで少し時間を要した。

だが、呑み込んだ後は早かった。みるみる内に笑顔が戻り、弾むような口調で返事をする。

「うん！ 守る！ 僕、約束守るよ、お父さん！」

「そうか。それじゃあ約束だ。忘れるんじゃないぞ」

「うん！ 忘れないよ。忘れたりするもんか！」

賢一はびよんびよんと飛び跳ねて、全身で嬉しさを表現する。

「じゃあさ、じゃあさ。犬、飼ってもいいんだよね？」

「ああ、もちろんだとも。今度の日曜日にも、ペットショップへ行こうじゃないか」

「やった、やった！ お父さんありがとう！ 実はもう、首輪も用意してるんだあ！」

そう言って賢一は、いかにも子供が手作りしたような白色の首輪を取り出した。何故か？けんいち？と名前の彫られた首輪を差し出し、父親に見せる。

無邪気にはしゃぐ我が子に、父親は中腰になって目線を合わせる。と、微笑みを浮かべて最後にもう一度、頭を撫でた。

「そりゃわんこも喜ぶな。よし。夕食にしよう。父さんはもう、腹ぺこで倒れそうだよ」

「僕もおなかぺこぺこ！」

答えるや否や、リビングに駆け込もうとする賢一を、父親は制し、言葉を継いだ。

「ああ、そうだ賢一。今の話、お母さんにも話してあげなさい。賢一の口から聞いた方が、お母さんもきつと喜ぶだろうからな」

そう告げた父親のトーンは心なしか低かった。
しかし、喜びの絶頂にある賢一は、その僅かな違いに気付く事は
出来なかった。

やがて、それから十年の月日が流れる

。

10人の男女。地獄からの脱出。

《 次のニュースです。近年、飼育放棄されたペットが増加の一途を辿る問題で、政府は今後の方策を早急に纏める考えを示しました。また、x県x市の山林では、不法投棄された動物の死骸が今もなお放置されたままであり、近隣住民からの苦情が保健所や政府に寄せられています。しかし、この件に関しては未だ解決の目処が立っており、今後の動向に注目が集まっています。……それでは次の》

街頭の大型ビジョンからいつも通りの日常が垂れ流されている中、犬塚賢一は退屈そうな表情で歩いていた。高校の制服姿から学校帰りだと判る。

「酷いことするよなあ……」

誰にともなく呟いて足を止め、ニュースが流れているビジョンを見上げる。今はひとりのキャスターが、今の報道に対してコメントをしている最中だった。

「あ、あいつ……」

賢一は、そのキャスターの顔を見るや否や、眉根に皺を寄せた。嫌悪感も露わにビジョンを睨み付け、コメントに耳を傾ける。

《 一度飼うと決めたペットを飼育放棄するなんて、とても正気とは思えませんよ。今の時代、もはやペットは家族同然　つまり、この問題は実の家族を見捨てる事と同義なのです。国民の皆様にはその辺のことを今一度、よく考え直してもらいたい。私はペットがぞんざいな扱いを受けていることが遺憾でなりません。みなさんひとりひとりの力で是非、ペットの尊い命を守っていきましょうではありませんか》

取って付けたような弁舌にも関わらず、番組の客席から賛同の拍手が巻き起こる。大多数の賛同を得られたキャスターは満足気に、笑顔で応えている。

「相変わらず、嘘が服を着たようなやつだな。どうしてあんなのが支持されているんだ……まったく」

小さく舌打ちをして、拳を硬く握り締める。

番組が終わったのを見届けてから、賢一は再び歩き出した。

程なくして陽が沈み、辺りに夜の帳が降りた頃。

怒りの捌け口が見つからないまま、賢一は住宅街までやって来ていた。

先の街頭に比べると道幅が狭く、見通しが悪い。そのくせ車が頻繁に通る為、要注意区間に指定されている道である。

「うおっ……！ あぶねえ……！」

一台の乗用車が賢一の横をすれすれのところで通り過ぎていった。ともすれば接触していてもおかしくない状況だった。

「まったく……狭い道路でスピード出し過ぎだつての……」

届くワケがない愚痴を運転手に飛ばしながら、賢一は後方に注意を向けつつ歩く。

と、その時。

「ん？」

ふと、一筋向こうの道　Ｔ字路の真ん中に、一匹の犬が居るところに気付いた。街灯に照らされているその姿は、さながら月光浴でも楽しんでいるかのように映った。

(……あんなところに居て危ないなあ……平気なのか?)

賢一は漠然とそんなことを思った。数秒足を止めて、視線の先にいる犬を注視する。

だからどうするというワケでもなく、賢一は短い溜息を吐いて犬から視線を外し、再び歩き出す。その矢先。Ｔ字路の向こうから一台のトラックが重低音を響かせながら現れた。進行方向には先程の犬が、未だ地面に寝そべって暢気に自分の身体を舐めている。

(ど……どうせすぐ避けるだろ……犬だし)

自身を納得させるように自答する。賢一の視線はトラックと、その先にいる犬に釘付けとなっていた。動こうにも足が地面に縫い付

一秒でも早く気持ちを落ち着かせようとするかのように。
しばらくして賢一は目を開けた。靴を脱ぎ、上がり框に足を掛けたその時。

「……なんだ……？ 手紙？」

廊下の端にぽつんと置いてあった手紙に気付き、拾い上げる。
それは差出人の記載はなく、消印すらない奇妙な手紙だった。

表書きにたった五文字 『犬塚 賢一 様』とだけ、書かれていた。

「……」

賢一は薄気味悪い手紙を見詰めたまま、しばらくその場に佇んだ。
靴を見る限る、両親はまだ帰ってきていないようだった。今、賢一の両親は共働きに出ている。帰りが遅いことなんて日常的事である。とすると、この手紙は一体だれが受け取り、ここに置いたのかという疑問が、賢一の中で湧き起こる。

しかし、いくら考えても明確な答えは出てこなかった。賢一は取り敢えず、中身だけでも確認しておくことにして、封を切った。賢一が手紙の文面を目で追った瞬間、雷に打たれたような衝撃が、全身を駆け巡った。その奇妙な手紙には次のように記されていた。

『己の罪を認識し、悔い改めよ』

賢一は表情を引き攣らせ、冷や汗を浮かべている。

だがそれはすぐに怒りへと転じ、恐れを振り払うかのように声を張り上げて言った。

「なんだこの気味の悪い手紙は！？」

賢一は怒りに身を任せ、手紙を破り捨てた。

刹那、賢一は天地がひっくり返ったような感覚に見舞われ、咄嗟に頭を抱えた。

そこで賢一の意識は途切れることとなった。

《一階・待機室》

どこからか響いてくる砂嵐の雑音に、犬塚賢一の意識は現実へと引き戻された。

「……………ん……………ん……………」

筋肉痛と二日酔いが同時に来たように怠い身体を起こし、辺りを見渡す。

「どこだ……………ここは……………」

光源は壁際にぼつりと設置されている蠟燭の火しかないが、辛うじて部屋の様子を視認出来た。眼前にはさながら地下牢を想起させる光景が広がっていた。

部屋には窓の類は一切なく、ぱつと見た感じ、広さは三十畳ほどだろうかと、賢一は推測する。温かみがまるで感じられない無機質な石壁が部屋の四方を囲み、いたるところに赤黒いシミがこびりついていた。賢一の背中に悪寒が走り、思い出したくない光景がフラッシュバックする。

喉が渴いた。

そう思い、何気なく首もとに手を伸ばした瞬間、賢一はゾツとした。

指先に触れる金属的な質感。それを伝っていくと、首を一周していることに気付いた。

(なんだ……………これ?)

自問してはいるものの、それは単なる逃避。自分の身に起こっていることを認めたくないという、拒絶の表れ。

「く……………首輪……………なのか!? けど……………誰が何のために……………こんなものを……………」

思わず声が零れる。

何も想像したくない。

しかし、これは現実なんだと言い聞かせ、賢一は平静に努めた。ふと視線を上げるとそこには古ぼけた一台のモニターがあった。

画面には何も映っておらず、砂嵐状態だった。どうやらさっきから

聞こえていた雑音は、そのモニターから発せられているのだと判
た。

「……ん」

「！？」

突然聞こえた人の声に、賢一は心臓が飛び出るほどに驚き、即座
に視線を振った。

蝋燭の火が届かない暗闇にジッと目を凝らす。やがて目が暗闇に
慣れ始めた頃、それまでまったく感知出来なかった存在に、賢一は
気付いた。

部屋の片隅に、年齢も性別も様々な九人もの男女が、床に倒れて
いたのだった。

かすかに聞こえる呼吸音から彼らの生存を確信した賢一は、僅か
ながら安堵した。

「一体……どうなってるんだ……？」

眼前に広がる異様な光景に慄き、賢一は生唾を呑み込んだ。

「ん……ここは……どこ？ キミは……だれ？」

不意に九人の内のひとりの少女が目を覚ました。

背が高くスレンダーな体型。髪型はショートボブでどこか活発な
印象を醸し出している。服装はキャミソールにボレロ、キュロット
スカートという、ワイルドさと可愛さを併せ持ったコーディネート
だ。賢一は少女のスカートから伸びる白磁の美脚に視線を誘惑され
ながらも、辛うじて理性を保ったまま質問に答えた。

「え……つと、ここがどこなのかは僕にも判らないんだ。ごめんね。

僕の名前は犬塚賢一。市内の高校に通う、一年生。　キミは
？」

こんな状況下である。賢一は少しでも人間らしい行為によって平
常心を保とうとしているのだろうか。しかしその微笑みの下に隠さ
れた恐怖が、今にも滲み出して来そうな程だった。

賢一の笑顔に安心したのか、少女は穏やかな表情を返して、おも
むろに立ち上がった。

スカート汚れを払いながら、少女は自己紹介を始めた。

「わたしは猫矢鞠子^{ねこやまりこ}。同じく市内の高校に通う一年生よ。ちなみに陸上部ね」

「そうなんだ。でもキミの　猫矢さんの顔は見たことないな。違う高校なのかな？」

「わたしは××高校だよ？」

「やっぱり違うね。僕は　高校だから」

「なんだ。残念。同じ学校だったら楽しい高校生活が送れると思っただのに」

そういつて少女　猫矢鞠子はおどけて微笑んだ。太陽のように明るい笑顔に、賢一の心は安心感に満たされた。

しかし彼女の顔は蒼白気味で、唇は震えている。こんな状況下に晒され、精神的に参っているのだと容易に判った。気の利いた事など何一つ言えない賢一は、代わりにただ一言、己の心に誓う。

絶対この子を護る……と。

その感情は恋心なのか……単にこの異常とも思える状況下で湧いた義侠心なのかは、この時の賢一には判然としなかった。

ただ、彼女の笑顔を守りたいという気持ちだけは賢一の心に、確かに存在していた。

それから数分　賢一たちの体感時間にして半時間ほど　が経過した頃。

気絶していた残り八人の男女が、次々と目覚め始めたのだった。

「おい！　ここはどこだ！？　この首輪は何なんだ！？　一体どういう状況だよ？　ああ？」

迷彩服に身を包んだ、見るからに自衛隊然とした青年が、高圧的な口調で賢一に詰め寄っていた。どうやらこの状況の説明を求めているらしい。ドスの利いた声が、薄暗い部屋に反響する。青年の首にも賢一と同じ首輪が掛けられていた。

否。それは青年だけではなかった。その場にいる全員の首に不気味な首輪は掛けられていたのだった。自分の置かれている状況を説

明して欲しい気持ちは賢一も同じである。それなのに一方的に詰問され、賢一は苛立ちを募らせていた。

「僕にも何が起こってるのか、さっぱり判らないんです……！……！……！つていうか、名乗りもせず身勝手に騒ぎ立てないでください……！……！」
青年の気迫に気圧されることなく、賢一は毅然とした態度で反論した。

「てめツ……！」

瞬く間に青年のコメカミに青筋が浮き出る。拳を振り上げ、一歩前に身を乗り出した。

殴られる！

そう思つて賢一は咄嗟に目を瞑った。が、一向に衝撃は襲つて来なかつた。

恐る恐る目を開けると、青年の手をひとりの老爺が押さえ込んでいた。

「暴力はいかな、青年。少しは頭を冷やしたらどうだね？」

「離しやがれ、じじい！ くそっ……！……！ 誰だよてめえ！？」

「やれやれ。困った餓鬼もいたもんじやの。相手に名を尋ねる時はまず己からということも知らんのかね？ …… まあよい。状況が状況じゃ。ほかの者への挨拶も兼ねて、儂から名乗ろつではないか」

大人の貫禄をまざまざとみせつけながら、老爺はゆっくりと口を開いた。

「儂は鼠入忠治そいりただはちという者じゃ。歳は七十六。今は現役を退いているが、昔はちよつと名の通つた科学者をしておつたものじやよ」

淀みなく紡がれる自己紹介を、賢一たち九名は神妙な面持ちで聴いていた。

（ ん？ ）

不意に賢一は、鼠入忠治と名乗つた老爺の首筋に、注射痕のような赤い膨らみを認めた。

しかし、誰だつて注射くらいするものだと、賢一はさして気にも留めなかつた。

次はキミの番じゃな、と、鼠入忠治が青年に自己紹介を促したことで、全員の注目を集めてしまった青年は、そこでようやく観念したのか、バツが悪そうに喋り始めた。

「……羽鳥翔吾^{はとりしょうご}……三十六歳。元自衛隊員。今はワケあってフリーターをしている。以上、終わりだ。くそがつ！ いつまでも人の事、ジロジロ見てんじゃねえッ！」

脅しつけるように怒鳴り散らした羽鳥翔吾は、不機嫌だと言わんばかりの面持ちのまま壁に凭り掛かって座り込んだ。

「ちよつと五月蠅いわよ、あんた」

場に降りた重苦しい沈黙を破つたのは、？近所のおばさん？という呼び名が当てはまりそうな、ひとりの中年女性だった。指もとに光る無数のリングが、いかにも成金そうな印象を周囲に与えていた。「これが今時の？キレやすい若者？ってやつでして？ 噂通り過ぎて笑えないわ。仕事はフリーターだそうで、キレやすいあんたにびつたりじゃない。……と、ちよつと言い過ぎたかしら。おほほ。これは失礼」

他人の視線などまったく意に介することなく、中年女性は声も高らかに思いの内をぶちまけた。今にも殴りかかりそうな羽鳥翔吾を横目に、中年女性は悠々と自己紹介を口にする。

「おほほ。申し遅れましたわ。わたくし、虫賀奏^{むしがかなで}といますの。みなさん、お見知りおきを。年齢は伏せさせて頂きますけど、今の仕事は卸売り業ですよ」

どこか嫌味を含んだ微笑と共に一礼をして、虫賀奏はその場に腰を下ろした。

「てめえこのクソババア！ いっぺん殴らねえと気が済まねえ。ちよつとツラ貸せやッ！」

今し方擲掄されたばかりだというのに、羽鳥翔吾は獣さながらの勢いで突っかかるうとする。そんな彼の行動に鼠入忠治が、半ば呆れた表情で制止に入ろうとした瞬間。

「おかさあああああん……おかあさあああああん……おかあさん

どこにいるの……………?」

今、この場に居る中で最年少と思しき、ワンピース姿の少女が、突然泣き出し始めたのだった。刹那、ほぼ全員の視線が、一斉に羽鳥翔吾へと注がれる。皆、彼の怒号が原因だと考えたようである。これにはさすがの羽鳥翔吾も黙らざるを得なかった。握り締めた拳を収め、行き場のない怒りを石壁にぶつけた。

一向に泣き止まない少女を気遣い、猫矢鞠子が少女に近付き、そつと手を取った。

「こんにちは。初めましてだね。わたしは鞠子っていうの。マリちゃんとか、鞠子お姉ちゃんとか、好きに呼んでくれていいからね」
「……………まりこ……………おねえちゃん?」

鞠子の言葉に少女はようやく泣くのをやめ、嗚咽を堪えながらその名を呟いた。

「はい。鞠子お姉ちゃんだよ。よく出来ました。じゃあ今度はあなたのお名前を聞かせてくれるかな?」

「……………うん」

少女は両手で不器用に涙を拭い、小さく頷いてから、その小さな口で自分の名前を告げた。

「……………かめおか 亀岡……………まや 万夜……………七歳……………小学校二年生」

もじもじと、且つ、途切れ途切れではあるが、少女 亀岡万夜はしっかりと自己紹介を済ませた。短めの髪を軽く結うキラクタ―もののヘアバンドが印象的である。

「万夜ちゃんっていうんだ。自己紹介、しっかり出来たね。偉いぞ、万夜ちゃん」

猫矢鞠子は心から亀岡万夜の頑張りを称賛した。そして少女の頭を撫でながら、諭すように語りかける。

「ねえ万夜ちゃん。落ち着いて聞いてね。……………今、ここにいるのはお姉ちゃんたちだけで、万夜ちゃんのお母さんは残念ながないようなの。でも泣いてちゃダメ。お姉ちゃんたちも今の状況を把握しきれしていない。一秒でも早くここから出て、お家に帰るために色

々と考えなきやいけないの。だから万夜ちゃんも一緒に考えてくれるかな？」

「……うん。万夜、泣かない。おねえちゃんと一緒に考えるの」
七歳の少女とは思えない、どこか達観した雰囲気、賢一は少なからず驚きを覚えていた。

「よくこの状況で、他人の事なんか気に気を回していられるわねエ。そんな子供、どのみち足手まといになるんだからア、放っておけばいいのよオ」

殺伐とした状況下に訪れた和やかなムードを、ひとりの少女が無遠慮に打ち砕いた。

ルージユが映える化粧をばっちり施し、前髪にはヘアピン。ブラウスにタイトスカートという装いに白衣を羽織っている。見た目も若く、大学生といった感じの印象である。

「なによ、あなた。そんな言い方ってないんじゃない!？」

女性の言葉に鞠子が食って掛かる。

「よく言うわア……アンタだって心の中では面倒臭いと思ってるんじゃないアい?」

「なんですって?」

「ほらア。ムキになるあたり、凶星なんでしょう?」

「この……っ!」

互いに一步も譲らず、一瞬にして険悪なムードが場を支配する。

二人の睨み合いに、亀岡万夜が怯えているのを見て、賢一は慌てて仲裁に入った。

「まあまあ二人とも落ち着いて……まずは自己紹介をしよう。お互いをよく知るためにもね」

「ふん。……まあいいわ」

女性が矛を収めたことで、張り詰めていた空気が僅かに弛緩する。

「じゃあ先にあんたが名乗るべきよねエ? そのじいさんがさっき言ってたわよオ?」

「僕はもう……」

そこまで言いかけて賢一はハツとした。なぜなら自分が自己紹介をした相手は鞠子だけだった事に気付いたから。その思いは鞠子も同じだったらしく、バツが悪そうに顔を逸らしていた。すぐに賢一と鞠子が続けて自己紹介を済ませ、改めて白衣の女性の番となった。「アタシは兔沢朱音^{うさぎさわあかね}。医大生よオ。よろしくねエ」

一触即発にして最悪の事態は回避され、賢一はホツと胸を撫で下ろした。

「あ どうしたの、万夜ちゃん？」

突然、亀岡万夜が猫矢鞠子の腕をすり抜け、小走りに駆け出した。何事かと見守っていると、賢一たちからやや離れた場所で座り込んでいた、ひとりの少年の傍で立ち止まった。

「こんにちは！ 万夜は、亀岡万夜ってゆーの。あなたのお名前はなあに？」

場違いなほどに愛らしい声音と笑顔で、亀岡万夜は少年に尋ねた。無造作に伸びた髪は長く、目元が半分近く隠れている。そこから覗く切れ長の目は、見る者に恐怖を与えかねないほどに暗く鋭い。

口元は真一文字に結ばれ、愛想の欠片すら窺えない。服装は黒の短パンに黒のＴシャツと、無愛想に拍車を掛けているような出で立ちだった。

少年は、その鋭い眼差しで万夜を見据え、驚くべき言葉を吐いた。「……オレに構うな。殺すぞ」

少年の迫力は極道者のそれと、勝るとも劣らないものだった。とても中学生程度の少年が口にするような言葉ではない。その場にいる誰もが、固唾を呑んでただただ立ち尽くす。

そんな中で唯一、亀岡万夜だけが、微塵の恐怖も表情に出さず、何事もなかったかのような微笑みを少年に向けていた。

「お名前は？ なんてゆーの？」

屈託のない笑顔で、同じ質問を重ねる。

「……ッ！」

亀岡万夜の予想外の反応に、少年は小さく舌打ちをして、齒を軋

ませた。そこにはさつきまでの勢いはなく、完全に毒気を抜かれた面持ちを浮かべている。

「どーしたの？ おなか、痛いのか？」

亀岡万夜は我が事のように、少年を気遣う。

今の一言がトドメだったのか、少年は観念したように溜息を吐き、静かに口を開いた。

「……鰐淵牙楼わにぶちがろう……中二だ。……これで気が済んだら。とっととオレから離れ」

少年 鰐淵牙楼が突っぱねるより早く、亀岡万夜は彼の手を握り締めていた。

「！？」

咄嗟の事に、鰐淵牙楼は戸惑いを露わにする。そんな彼の動揺など知る由もない亀岡万夜は、純粹にありのままの気持ち告げた。

「今日からお友達！ 万夜たち、今日からお友達だよ、がろーくん！ よろしくね」

「と……ともだち……だと？」

「うん。お友達！」

思いがけない宣言に、鰐淵牙楼はただただ困惑するばかり。対する亀岡万夜は、彼の目を覗き込むようにして、笑顔で見詰めている。思い通りにいかないことの連続で、鰐淵牙楼は返す言葉を失っていた。

「……勝手にしやがれ……！」

それつきり、恥ずかしさを隠すように俯いたまま、一切喋らなくなっただった。

「万夜ちゃん。お友達が出来てよかったね！」

やりとりが終わったのを見計らい、猫矢鞠子が亀岡万夜に声を掛ける。

「うん！」

元氣いっぱいの返事が、殺風景な部屋に明るくこだました。

「おい。あと残ってんの誰だよ？ さっさと終わらせちまえ」

先刻の鬱憤を晴らすかのように、羽鳥翔吾が声を荒げて促した。すると、それまで手帳にメモ取りをしていた、スーツ姿の中年男性が、軽やかな反応を示した。

「あ、はい。私の番ですね」

男性の声が響いた瞬間、大半の人間が何かに気付いたような表情を浮かべ、視線を向けた。

その事に真つ先に気付いたのは賢一だった。

（あいつは……！？ 間違いない。嘘が服を着たあのキャスターだ……！）

目を覚ましてからそのキャスターの顔は何度か視界に入っていたにも関わらず、賢一は今の今まで気付けずにいた。あれほど毛嫌いしていた者の存在に気付けなかった様子からも、賢一のパニック状態が窺い知れる。

「あんた……ひよつとしてニュースキャスターで動物愛護コミュニケーション会長の……？」

いかにもお昼のニュースやバラエティ番組を欠かさず観ている主婦らしく、虫賀奏が他の者の言葉を代弁した。

すると男性はスーツの歪みを正しながら、持ち前の職業スマイルを作った。

「どうやら私の自己紹介は不要のようですが、せっかくですので名乗らせて頂きますよ」

嫌味なほど丁寧な口調で、男性は言葉を続けた。

「善養寺良彦、五十一歳。今もまだ現役で活躍中のニュースキャスターです。よろしく」

「まあ。人格者で名の通っている善養寺さんのような方までいらっしやるなんて。ほんと、ここで一体なにが始まるのかしら？ あ！もしかしてこれも、TV番組の収録だったりするんじゃないか？」

主婦層の大半は善養寺良彦のファンだという御多分に漏れず、虫賀奏はひとりで盛り上がっていた。善養寺良彦も歳が歳なだけに、おばさんに好かれて悪い気がしないのか、職業スマイルを崩すこと

なく虫賀奏の質問に答えを返す。

「残念ながら私も聞かされていないんですよ。気が付いたらここにいたものでしてね。ですが恐らく、私にも内緒で進めるドッキリ番組が何かの類でしょう。心配はいりませんよ」

何を根拠に！ と、賢一は内心で毒突いた。しかし、そんな事でいちいち腹を立てていては精神的に保たないと判断した賢一は、必死に苛立ちを抑え込んだ。

少しでも気分を紛らわそうと、自己紹介をした者の人数を数えることにした。

「あれ？」

数え終えてすぐに、賢一は疑問の声を上げた。何かを小声で呟きながら、改めて数え直す。

ところが。

「あれ？ やっぱりだ」

今度は確信を籠めて呟いた。

「どうしたの？」

怪訝な様子の賢一に猫矢鞠子が相槌を打つ。

「さつき数えたときは、確か全員で十人いたはずなんだけど……今は九人しかいないんだ」

賢一の言葉を受け、猫矢鞠子も人数を数え、すぐに小首をかしげた。

「ほんと。九人しかいないわね」

「最初から九人だったんじゃないのか？」

二人の会話に痺れを切らせた羽鳥翔吾が、苛立ち気味に口を挟んできた。賢一は不測の事態にも対応出来るように構えながら、ハッキリと返す。

「いや、確かに十人いましたよ。間違いありません」

「じゃあどこにいったよ？ テキトーなこと言っつと、ぶつとばすぞ」

「……」

嫌悪感を露わにする羽鳥翔吾を見据えながら、賢一はもう一度視線を巡らせた。しかし、何度見ても十人目の姿は見当たらない。

本当に見間違いだったのかという疑念が、心の中で湧き起こり始めたその時。

「しっ！ みんな静かに」

それまで自身の爪に施されたネイルアートを眺めていた兎沢朱音が、突然神妙な面持ちを浮かべて、注意を喚起した。

「……。どうしたんじゃ？」

数拍の間を置き、鼠入忠治が尋ねた。対して兎沢朱音は神経を集中させて、じつと耳を澄ませるような体勢のまま、静かに返す。

「何か聞こえない？ その……怨念めいた呻き声が……」

「……！」

瞬間、その場にいた者の驚きに満ちた気配が重なった。

ほぼ全員が耳を澄ませる中、賢一も同じように意識を集中させた。すると。

「……ほんとだ……聞こえる」

賢一たちはそれぞれが互いに顔を見合わせ、やや緊張した面持ちで頷き合う。

蠟燭の光が届かない暗闇の先から聞こえてくる怨嗟にも似た呻き声に、冷や汗が浮かぶ。

「いよいよ収録開始のようですね」

善養寺良彦が、場違いとも思える楽天的な発言を口にする。その言葉に興味を示したのは虫賀奏ただひとりだった。

「それじゃあ……わたくしたちの身の安全は保証されているんですのね!？」

どこか縋るように問う。それはこの異常的状况で、少しでも心の拠り所を求めようとする行為に他ならない。

「え……ええ。安心してください。……大丈夫ですよ」

「よかつたわあ〜」

一際大きな声で、露骨に安堵する虫賀奏に職業スマイルを向けな

がら、善養寺良彦は「恐らくですが」と、誰にも聞こえないほどの声で呟いていた。

「あら？」

不意に、虫賀奏が何かに気付いたのか、怪訝な声を上げた。

「どうかしましたか？ 虫賀さん」

「いえ……。善養寺さんの首輪のランプが……。その……。点いていないようですから……。少々気になった次第ですよ」

「え？」

咄嗟の言葉に、装うことを忘れた素の声が漏れた。虫賀奏は他の者の首輪に視線を向けてから「……。ほら」と指差しながら確認を促した。

実際、善養寺良彦の首輪だけランプが消えていて、虫賀奏を始めとする残りの者達全員的首輪には、四つのランプが点っていたのだ。その事実善養寺良彦の笑顔が僅かに曇る。

「はは……。恐らく単なる接触不良などの故障でしょう。気にすることはありません」

そう答えた彼の笑い声は乾いていた。

「おい。首輪の話なんざどうだっていい。番組の収録だろうと何だろうと、俺は一刻も早くこんな辛気臭せえ場所とは、おさらばしてえんだよ。……。てめえ、ホントに何も知らねえのか？ 何なら洗剤い吐き出させてやるうか？」

羽鳥翔吾の獰猛な眼差しが、善養寺良彦に注がれる。一向に自重する気配のない彼の態度に、鼠入忠治は深い溜息を吐くだけだった。「ま……。まさか。私は何も知らされていません。その事に関しては天地神明に誓いますよ」

「……。チツ。……。まあいい。雲行きが怪しくなったら問い詰めてやんよ」

あくまでも敵愾心を露わにする羽鳥翔吾に対し、善養寺良彦は黙したまま微笑を返すだけだった。

「とにかく……。確認しましょうよ。話はそれからよ」

亀岡万夜としつかり手を繋いだ、猫矢鞠子が皆の行動を促す。

「ああ……そうだな」

賢一も同意を示し、全員の顔を見渡してから、声のする方へと歩き始める。

「……犬塚くん……これ」

先んじて歩き出した賢一に、猫矢鞠子が燭台を手渡す。

「さんきゅ」

礼を言っ受取り、改めて歩き始める。一歩……また一歩と近づくにつれて、不気味な声は大きく、はっきりと聞こえるようになっていく。

やがて、部屋の片隅が照らし出された瞬間。

「う……ッ……！」

賢一は驚きの声を囁み殺し、一歩たじろいだ。後に続く者達も一様に、一歩下がって立ち止まる。そこには頭を抱えて蹲り、がたがたと震えるひとりの男がいた。首回りに嵌められた例の器具から、賢一はその男が十人目だと判断した。

「やっぱり十人目はいたんじゃないか」

どこか安心した口調で賢一は呟いた。それは単に確認の意味で言った言葉だったのだが、思いがけない反応が背後で上がった。

「当てつけてんじゃないぞ、この野郎」

「え……？ 別にそんなつもりで言ったんじゃないんです。気に障ったなら謝りますよ」

「……チツ。くそが」

突っかかってはみたものの、賢一に素直に謝られてしまい、羽鳥翔吾は失った感情のやり場を、舌打ちで紛らわしているようだった。

「ひ……ひい……！ たす……たす……たす……助け……！」

部屋の片隅に蹲って震えていたのは、作業着姿の痩せ型の男だった。頭はほとんど白髪だが、毛染めをしている所為か黒と白が入り交じった感じになっている。

「あの……大丈夫ですか？ ちょっと落ち着いて……よかつたら自

己紹介でもしてもらえませんか？」

賢一は努めて穏やかに話し掛けた。しかし男は、人間が嫌いな小動物さながら、震え続けている。不意に賢一は、誰かの血管が切れる音を聞いたような錯覚を覚えた。その刹那。

「いつまでもがたがた震えてンじゃねえ！ いい加減顔を上げやがれ、このクソ野郎」

埒があかない男の態度に痺れを切らした羽鳥翔吾が、男の胸倉を掴んで引き起こしたのだった。衝撃で男のメガネが外れ、床に転がった。

「ひ……ひい……メガネ………メガネ……！」

絞り出すような悲鳴を上げ、男は恐怖に顔を歪めた。

「黙れ！」

「い………ッ！」

羽鳥翔吾の一喝で、男はようやく静かになり、メガネを拾って力なく立ち上がった。

「大丈夫ですか？ 僕は犬塚賢一っていいいます」

そして賢一は、ひとりひとりの名前を男に告げた。

「あなたの名前は？」

賢一は精神力ウンセラーのような口調で、男に名前を尋ねた。

しばしの沈黙後、男は高めの声で自身の名前を呟いた。

「ボボ……ボクは……魚成……海斗……。六十……。プログラム……」

……関係の………仕事」

男 魚成海斗の自己紹介を受け、賢一は一呼吸置いて口を開いた。

「魚成さん。現状で一体何が起きているのか、ここにいる全員が把握していません。とりあえずここを出ようと思います。一緒に行きましょう」

「あ……ああ………一緒に……連れて行って……くれ………助けて……くれ………」

魚成海斗はこの状況にあてられてしまい、すっかり衰弱しきって

いるようだった。決して他人事ではない状態を目の当たりにして、賢一は気を引き締め直した。

「じゃあ」

まずはこの部屋を出しましょう、と言うより先に、砂嵐が流れ続けていたモニターが突然切り替わった。

「……！」

砂嵐の音が止んだことで、全員の注意がモニターに注がれる。

「なんだ……この部屋は……!?」

モニターに映し出された異常とも思える光景に、誰もが固唾を呑んで見詰めている。その部屋には血の痕らしき黒ずみが至るところに付着していた。画面の中央にはひとりの男が映し出されていた。

その首には賢一たちと同じ首輪が見て取れる。ランプは点いていないようだった。男は部屋の異様な光景を前にパニックに陥っていた。「誰だこいつ………何が始まるっていうんだ!？」

羽鳥翔吾はモニターを凝視しながら、怒りとも苛立ちともつかぬ声を上げる。

やがて不穏な音が滑り込んできた。何者かが重たい金属を引き摺りながら歩いて来ているような音。一步………また一步と、金属を引き摺る音は次第に大きくなっていく。

男がある一方に視線を向けたまま硬直した。それは部屋に唯一ある扉の方向だった。

一秒が永久にも思えるほどに凝縮された時の中で、中央の扉は無情な音を響かせて開いた。『 ツ………ツ!？』

期せずして、男と賢一たちの戦慄が重なる。

モニターの中に現れた存在を視界に捉えた瞬間、賢一たちの全身が栗立った。

軽く二メートルは超える巨軀に、顔には馬のマスクを着用。手には大斧という、まるで悪夢を具現化したかのような存在が、男の眼前に立ちはだかっているのだった。

馬ヅラの異形は一切喋ることなく、ただ機械的に大斧を頭上いつ

「羽鳥サン。事態の真相を知りたいのはみんな同じなんです。ひとりで勝手に騒ぐのはやめて、ちょっとは自分で考えたらどうなんですか？」

「何だとしてめえ……。こんな状況で妙に落ち着き払いやがって……！ さてはてめえが組んでんじゃねえのか！」

図らずもふたりの争いが緩衝材の役割を果たし、他の者達は落ち着きを取り戻しつつあった。悲鳴は止み、不意に静寂が訪れた。

「それは言い掛かりです。僕は何も知りません。僕が落ち着いてるように見えるのは……。こんな状況で、無闇に取り乱すのは得策じゃない……。そう思ったからです。羽鳥サン……。あんたは僕より年上なんでしょう？ だったらもつと冷静になってくださいよ。……。でない」と

羽鳥翔吾が引き攣った笑みを零すのをよそに、賢一は数拍の間を置いて、ぽつりと呟いた。

「 全員殺される……ッ！」

「 !? 」

刹那。九人の息を呑む気配が重なる。

的確且つ、全員の心境を代弁したかのような一言に、場の空気が凍り付いた。賢一の言葉は、モニターに映っていた男と同じ道を辿るということに他ならなかった。現実離れた凄惨な光景が、この場に居る誰の脳裏にも深く焼き付いているようだった。

年下に諷められた羽鳥翔吾は悔しさに齒噛みこそすれど、反論はしなかった。それはひとえに賢一の言葉の正しさを証明していた。

「ああ……。判ったよ。……。取り乱して悪かったナ。……。オオツカくんだっただか？」

「点を忘れないでくれませんか？ 僕の名前はイヌツカです。……。わざとですか？」

「そっだと言ったら……。どうするんだ？」

「別にどうもしませんよ。ただ、どうして僕を目の敵にするのかが、疑問なだけです」

「ちよつと……！ ふたりともいい加減にしなさいよね。今はそんなことを言い争ってる場合じゃないでしょ……！」

ようやく折り合いがつきそうだったやりとりに、再び火が点きそうな様子に、堪らず猫矢鞠子が口を挟んだ。

「チツ……！」

露骨に放たれた舌打ちを境に、ふたりの口論は一旦の終結を見たのだった。

場に重たい沈黙が降りる。

「ねえ」

猫矢鞠子がそう切り出したのほぼ同時。

ドゴオン ドゴオン ドゴオン

と、何かが激しく衝突しているような音が空間に響き渡った。

「……き……来やがった……！」

忘れていた現実の再来に、一瞬にして全員に緊張が駆け抜けた。精神が束縛され、いくらか行動の自由が奪われる。

「鞠子おねえちゃん……怖い……よう」

泣きこそしないが、今にも泣き出しそうな声で、亀岡万夜は猫矢鞠子に縋り付く。猫矢鞠子はその様子に複雑な表情を浮かべ、少女をしつかりと抱き締めた。

「幸いながら、扉には鍵が掛けられていたようじゃな。今のうちに出口を探すんじゃない……！」

最年長の貫禄を發揮して、鼠入忠治が号令を掛ける。彼の声に賢一はある引っ掛かりを覚えていた。

（……扉………鍵………？ ……そうか！）

「みんな！ こつちだ！ 早く！」

突然、賢一は皆を先導し始めた。まるでその先に出口があると確信しているように、力強く駆ける。賢一の予測はどんぴしゃだった。目指した先に扉があったのである。

もしかしたら鍵が掛かっているかもしれないという考えが脳裏をよぎったが、その可能性は低い。賢一はそう読んでいた。

ドアノブに手が掛かる。

身に迫る危機に心臓が早鐘を撞く。

そして賢一はおもむろにドアノブを回した。

「あ……開いた……！」

そのまま一気に扉の先へと雪崩れ込む。賢一を始め、ほとんどの者達の表情に安堵の色が見て取れた。全員が入ったのを確認して、賢一は扉を勢いよく閉め、鍵を掛けた。

ガチャという少し濁った音が響いた。賢一は何かを確かめるように、一度鍵を開けてみると、カチャンという甲高い音が響いた。

（やっぱりだ。……施錠時と解錠時でわずかだけ音の質が違う……！ さっきのは誰かが鍵を開けた音だったんだ……！）

自身の直観が功を奏したという事実、賢一は僅かながら心強い何かを感じていた。

眼前に広がるのはコンクリート造りの寒々しい廊下だった。光源が蝋燭から蛍光灯に変わっているものの、依然として刑務所のような空気感は拭いきれない。

何かの施設を思わせる内部構造に、賢一はただならぬ予感をその身にかけていた。

一秒でも早くここから脱出しなければ……！

そんな思いばかりが、賢一の胸中で渦巻くのだった。

〈猫矢鞠子〉の場合。

十二年前の春。入学式に向かう道の途中で、少女は道端に置かれたひとつのダンボールを見つけた。

「おかあさん！ねこちゃん！ねこちゃんだよ！」

嬉々とした口調で、寄り添い歩く母親に話し掛ける。

母親は穏やかな笑顔を湛え、少女に視線を合わせるよう、その場にしゃがみ込んだ。

「ほんとね。捨て猫かしら。こんなにかわいいのに、捨てるなんて酷いわね」

少女は母親の言葉に耳を傾けながら、ダンボール箱の中で寂しげに鳴く子猫を撫でる。

みゃー、と子猫が鳴いた。少女にはその鳴き声が、子猫が喜んでいるように聞こえた。

やがて子猫に対して愛着が湧いてきたのか、少女は子猫を持ち上げ、胸に抱えた。

そこで少女は初めて子猫の異変に気付いた。

片眼を瞑ったまま、開く気配がない。さらに後ろ足は片方だけ短く、見るからに歩きにくそうだった。片眼片足の子猫。それがその子猫を表すに解り易い呼び方だった。

「おかあさん……この子……とてもさびしそう」

慈しみを持って子猫を抱き締める少女の姿に、母親は何かを悟ったような表情で、娘に語り掛けた。

「そうね。きつとその子は、自分を護ってくれるお友達を求めているのだと思うわ」

「おともだち？」

「そう。お友達よ」

母親の言葉に少女は少し考え、すぐに口を開いた。

「おかあさん、まりがこの子のおともだちになる！まりがこの子

をまもるの！」

それは確固たる決意を孕んだ言葉。揺るぎない想いの証であった。少女の決意に母親は柔和な笑顔で答えた。

「その想い、忘れちゃダメよ。いい？」

「うん！ まり、わすれないよ」

「よし。じゃあその子は今日から私たちの家族よ。よく、かわいがってあげなさいね」

「うん！ ありがとう、おかあさん」

それが猫矢鞠子にとって、小学校生活において初めてとなる友達との出会いだった。

「そうだ。名前をつけてあげなきゃだね。何がいいかしらね。鞠子、考えてあげてね」

「うん！ まり、この子のなまえつけるの！」

「……願わくばこの子が……私たちの幸せを照らし出してくれる光になれば……いいわね」

「うん！ この子、きつとまりたちの光になってくれるの！」

その瞬間から、少女の日常は幸せに彩られるかに思えた。

しかし、現実とは時として残酷なものである。幸せのにおいを嗅ぎつけるハイエナのごとく、その牙を剥き出しにして襲い来る。それは少女とて、例外ではなかった。

猫を飼い始めて半年と経たない内に悲劇は起こった。猫を飼うことに賛成してくれた母親が突然、此の世を去ってしまったのだった。弱冠六歳の少女には、その現実を理解するにはまだ早かった。

だが、大好きな母親にもう会えないんだということだけは判るのか、熱い涙が少女の頬を伝い落ちた。

以降、少女にとって子猫だけが、唯一、心の拠り所となった。

この子をお母さんだと思って、大事に見守っていこう。

そう決意したのも束の間、さらなる不幸が少女の身に降りかかる。

母親が他界したことで、親権の問題が出て来た。もともと少女の両親は不仲により別居中だった。そのことは少女も理解しており、

少女自身も父親のことはあまり好ましく思っていなかった。しかし実親が存命な以上、少女が父親に引き取られることに、異論を挟む者はいなかった。父親も表面上は穏やかに、娘を受け入れるという態度を取ったことで、少女は父親のもとで暮らさざるを得なくなった。望まざる環境で暮らす羽目になった少女にとって、ますます子猫が精神の拠り所になっていった。

そんなある日、三度目の不幸が起こってしまう。

「おい！ にゃーにゃーうるせえんだよ、その猫！ お前、勝手に冷蔵庫のもの喰わせてンだろ！？ 食費もばかになんねえんだよ！ 邪魔くせえから山にでも捨てて来やがれや！」

ついに父親の癩に障ってしまい、猫の処分を言い渡されたのだった。

最初こそ少女は父親の命令を拒んだ。

しかし、拒めば拒むほど、父親は暴力に訴えてきた。近所の目を気にしてか、見た目には判らない箇所ばかりを狙ったの暴力。

それでも少女は母親との約束を支えに、堪え忍んでいた。

この子は……まりが守る。

心の中で何度も何度もそう呟く。

だがそれも決して長くはもたなかった。

ロクにお金を稼げない身である以上、親に頼るほか生きる術がない。そのことを少女は幼いながらにして理解していた。

まだ他人を頼ることも知らない少女に残された選択肢はたったひとつだけだった。

ごめんね……。守るって……。やくそく……。したのに……。

どんな謝罪の言葉よりも深い念を籠めて、少女は子猫の名前を胸中で囁いた。

少女はかつてその子猫を拾った場所に再び、子猫を捨てに来たのだった。

寂しそうな鳴き声を上げる子猫に背を向け、少女は涙を隠すように走り去った。

その先の現実を、少女は記憶の奥底に、幾重にも鎖錠を施して
封印した。

異形との遭遇。

《一階・L字型廊下》

「どうやら諦めたみてえだな」

今入ってきた扉に耳を当てながら、羽鳥翔吾は誰にともなく呟いた。

「まだ安心はできませんよ。……先を急ぎましょう」

「そんなこと判つてらァ！ いちいち指図してンじゃねえよ」

「なによあなた。そっちこそいちいち犬塚くんに突つかかることないじゃない」

「この女ァ……！」

猫矢鞠子と羽鳥翔吾は互いに睨み合い、一步も退く様子はない。

険悪なムードが漂う中、他の者達は我関せずといった態度を決め込んでいる。ただひとりを除いて。

「やめんか、君たち。この状況で睨み合うのは愚行もいとこじゃ。少しは頭を冷やさるか」

ふたりを注意したのはやはりこの男 鼠入忠治だった。

羽鳥翔吾は鼠入忠治の顔を一瞥すると、しぶしぶといった様子で矛を収めた。

「へいへい……判りましたよ」

大人しく引き下がる羽鳥翔吾の様子に、賢一は思った。彼は鼠入忠治に対して苦手意識があるのではないかと。

「なァんだ。つまんなあい」

からかうような言葉を上げたのは、壁際でタバコを啜って妖しく微笑んでいる兔沢朱音だった。どこか嗜虐的な眼差しを猫矢鞠子と羽鳥翔吾へと注いでいる。

「……君も、場を煽るような発言は控えてもらえるかのお？」

「はァい」

どこまでも人を食ったような言動に、鼠入忠治もそれ以上言葉を

紡ぐことはなかった。

「……………とにかく、先へ進みましょ」

これ以上の面倒は願い下げだという風に、猫矢鞠子が行動を促す。しかしその言葉は、意外な人物によって否定された。

「それは無理だよ、鞠子おねえちゃん。この先にある扉……………全部閉まつてるもん」

「あ、万夜ちゃんいつの間に……………つてそれ本当なの？」

「うん。がろーくと一緒に見てきたんだよ。ね、がろーくん」

亀岡万夜の隣で複雑な表情を浮かべる鰐淵牙楼は、そっぽを向いたまま「ああ」と、投げやりな返事をした。最初、あれほど他人を威嚇していたのに、早くも亀岡万夜に対しては注意を緩めている。

猫矢鞠子はその態度の変化が微笑ましく思ったのか、こんな状況にも関わらずふたりに笑顔を向けていた。

鰐淵牙楼が不意に漏らした「……………ただ」という声に、賢一が咄嗟に反応を示した。

「ただ？ 何か気になることでもあったの？ 牙楼くん」

「……………ただ、鍵の構造が一番複雑そうなのは突き当たりの扉とその角を曲がってふたつめの扉だ……………。他はちょっとした道具と技術さえあれば開けられるかもしれない」

「ホントかい？」

「……………少なくともオレには無理だけどな」

「そっか……………」

「開始そうそう行き止まり……………。随分と出演者に優しい番組だこと。うふふ……………アタシたち、一体どうなっちゃうのかしら。ねえ、人格者で人気者のニュースキヤスターさん？」

今し方、鼠入忠治に注意されたばかりにも関わらず、兎沢朱音は場の不安を煽るような言葉を零す。彼女の視線は善養寺良彦を見据えている。

「な……………何を言って……………。こんなもの……………番組の収録に決まってる……………！」

冷静に努めようとする善養寺良彦の表情に動揺が走る。

「うふふ。どうかしらア。もし、さっきの映像が本物だったとしたら？ アタシたちをこんな建物に押し込めて、誘導するように泳がせていることに意味があるとしたら？ うふふ。果たしてこの先、どうなるのかしらア？ うふふ……うふふ」

誰の目からも、兎沢朱音の言動は常軌を逸していた。この異常的な状況下を愉しんですらいる……そんな所感を誰しもが抱かずにはいられなかった。これには流石の鼠入忠治ですら、注意するには気が引けたらしく、神妙な面持ちで低く唸るだけだった。

兎沢朱音が作り出した不気味な沈黙を破ったのは虫賀奏だった。

「バカ言ってんじゃないわよ。そりゃさっきは突然のことで驚きはしたけどねえ、冷静に考えればだよ？ あんな、人を人とも思わない非人道的な惨殺行為が許されるわけがないのよ。そう考えればこれは、善養寺さんの言う通り、ドッキリ系の番組だと推測できるのだわよ」

「ふ〜ん。……だといいけどオ？」

兎沢朱音はにべもなくそう呟き、啜えたままのタバコを弄ぶ。

「誰か火イ持ってない？ライター持ってたんだけど、見当たんないのよオ」

兎沢朱音の注文に、唯一、羽鳥翔吾だけが応えた。

「俺のライターも無え。たぶん気絶している間に没収されたんだろうよ。……銃も無えしな」

最後の呟きは無意識に口に出たものだったのか。一拍の間を置いて羽鳥翔吾は己の失言に気付いたようにハツとした。これを兎沢朱音は見逃さなかった。

「銃？ 随分と物騒な単語が出たものねエ。さすがは元自衛隊員とあったところかしらア？」 皮肉混じりに喋りながら、兎沢朱音は妖しい笑みを湛え、言葉を継いだ。

「……もしかしてあなた、猟奇殺人者だったりするのかしらア？」 殺人者という直接的な単語に、場がざわついた。

「な……何をバカなことを……！ 人なんて殺すわけねえだろうが」
視線を外したまま早口に捲くし立てる羽鳥翔吾の反応に、兎沢朱音はその鋭い眼差しを妖しく光らせた。

「人なんて？ じゃあ」

彼女が次に紡いだ言葉は、全員の意識にするりと滑り込む。

「人じゃなかったら殺すんだ？」

「……ッ！？」

羽鳥翔吾はまるで、幽霊でもみたかのような表情を浮かべて身を硬直させた。だがそれはほんの束の間。すぐに我を取り戻すと兎沢朱音の言葉を一笑に付した。

「くだらねえこと言ってるじゃねえぞ。俺に言わせればお前のほうがよっぽど危なそうだぜ」

「うふふ。案外そうかも知れないし、そうでないかもしれないわね」

「エ」

「ほざいてる！ 火が欲しいなら、隣の部屋へ戻ればいいじゃねえか！ 蝋燭があつただろうがよオ！」

「隣の部屋ア？ やアよオ……さっきの化け物がいるかもしれないじゃない」

「化け物？ という言葉に全員が息を呑む、殺伐とした空気が辺りを包み込んだ。

たとえ外に繋がる脱出通路があつたとしても、隣の部屋へは戻りたくない。

それほどの恐怖心がある場には溢れかえっていた。

誰もが口を噤んだまま数分が経過した頃。

「ちよつと医大生サン。そのヘアピンを貸してくれませんかこと？」

「どこことなく自信をに漂わせた口調で、虫賀奏がそう切り出した。
「なアに、おばさん。アタシのヘアピンで何しようって言うわけエ？」

「あたしゃ、こう見えても昔は細工師をしてたのよ。ご納得？」

得意顔で説明した虫賀奏は、兎沢朱音の眼前に、ずいっと手を差し出す。それを見て、兎沢朱音は少しだけ思考を巡らし、不意に表情を緩めて答えた。

「このままいても埒があきそうもないものねエ。いいわア。貸してあげる」

「どうも、ありがとうね。それにしても意外と素直じゃないかい。もっと勿体ぶられるかと思ってたよ、あたしゃ」

「うふふ。心外だわア。アタシは素直な子よオ？ おばさん、一言余計なのよオ」

「そのようだわね。堪忍しておくれよ、医大生サン」

「まアいいわア……許してあげる。……どうでもいいけどさアおばさん、最初に被った仮面が剥がれかかっているんじゃない？」

「あらやだ。気を抜いたらいつもこうなのよ。やあねえ、根っからのおばさんで。でもまあ、ここで体裁を取り繕っても肩が凝るだけ無駄だわね。悪いけどここからはすっぴんでいかせてもらうよ」

「うふふ。好きにすればア？」

虫賀奏の宣言をあっさりと受け流しながら、兎沢朱音はヘアピンを外し、彼女に手渡した。「さて……どっちから開けてみようかねえ？」

ちようどL字型をした廊下の角に佇み、虫賀奏が呟く。入ってきた扉を背に、右手壁側にひとつ、左手壁側にひとつの扉がある。賢一はしばし黙考した後、おもむろに口を開いた。

「虫賀さん。こっちの扉から試してみてくださいませんか？」

「はいよ、こっちな」

賢一の指示に、虫賀奏は異論なく作業に取り掛かった。その時、背後で零された羽鳥翔吾の独言を賢一はしっかりと耳にしていた。

チツ……勝手に仕切りやがって。

だったらお前が仕切れればいいだろ、という言葉を寸でのところで呑み込み、賢一は内に起こる衝動を懸命に堪えたのだった。

沸点ぎりぎりまで熱された賢一の頭は、ひとつの音によって冷ま

されることとなる。

カタ　ン。

「ごらんよ。開いたわよ、ほら」

開く扉に連動するように、感嘆に近いどよめきが湧き起こった。

「よし……中を調べよう。何か手掛かりがあるかもしれない……」

賢一は自らを鼓舞するように呟くと率先して室内へと足を踏み入れた。他の者も後に続く。

《一階・実験室》

「……真つ暗だな……明かりはどこだ……」

賢一は壁面に手を這わせ、明かりのスイッチを探る。気持ちを落ち着けようと深呼吸した瞬間、部屋の空気に賢一は思わず噎せた。

「っ……なんだこの空気は……酷い臭いだな。……それよりスイッチは……あ、これか？」

スイッチが切り替えられ、天井に設置されている蛍光灯が幾度か明滅を繰り返した後、室内をぼんやりと照らし出した。

瞬間、室内の光景を目の当たりにしたほぼ全員が、同時に息を呑んだ。

「　なっ……なんだこの部屋は……!？」

賢一が皆の気持ちを代弁する。眼前に広がるのはまさに地獄のような光景だった。

部屋の中央に設置されている作業台の上には、原形を留めないほどに切り刻まれた肉の塊があり、周囲に並ぶ物置棚には一面薬品の類や、眼球・臓器などといったパーツがガラスの容器に詰められ、得体の知れない溶液に浸されていた。そのすぐ傍にあるホワイトボードには理解不能な数式や専門用語が入り乱れて板書されている。その様子からこの部屋ではどうやら何らかの？実験？が行われているのだろうと、賢一は混乱を極める思考で推測した。

あまりにも現実離れした光景に誰もが固まったまま魅入っていると、不意に嗚咽が零れた。

「ううっ……ひっ……く……お……ねえちゃん……ひっ……こわい

……よう……ひっ……く」

「万夜ちゃん!？」

亀岡万夜が恐怖を露わに泣き崩れる様子を目にするや否や、猫矢鞠子は弾かれたように駆け寄り、精一杯の優しさで少女を抱き締めた。猫矢鞠子は、この凄惨な光景を前に、少女の目を塞がなければいけないことを、すっかり失念していたのであった。

「ごめんね万夜ちゃん……怖いモノ見せちゃったね……怖かったよね……もう大丈夫だよ」

「おねえ……ちゃん……おねえちゃん……あああ……あああ……あああ……っ!」

猫矢鞠子の胸に顔を埋め、亀岡万夜は感情のままに泣き叫んだ。その様子を黙して見守る賢一もまた、心の中では泣きたい気持ちでいっぱいだった。賢一にとって少女の哭泣はとも他人事だとは思えなかった。けれど、ここで自分まで泣き出すワケにはいけない。賢一は泣きたい気持ちを亀岡万夜に託し、一刻も早くこの建物から脱出する手段を見つけようと認識し直すのだった。

「ふむ……これは……なるほど……これもそうじゃ……ふむう……」

思案に耽っていた意識を引き戻した時、賢一の耳に奇妙な音が聞こえてきた。誰の声だと思い、視線を振ると、薬品棚の前で何やら物色行為に精を出す、鼠入忠治の姿があった。

「鼠入さん……なにをやってるんですか?」

賢一は遠慮がちに尋ねると、鼠入忠治は穏やかな表情で賢一の質問に答えた。

「ああ、使えそうな薬品を選別してるんじゃないよ。この先になにかあるか判らんし。備えあれば憂いなしじゃ……ガッ……ハア……

……ハア……」

「!?!? どうしたんですか……だ……大丈夫ですか!? 鼠入さん……!?!?」

急に咳き込み、息切れを起こした鼠入忠治に賢一は心配そうに声を掛けた。何か持病でも患っているのだろうか……そんな考えが賢

一の脳裏に過ぎった。

「……………大丈夫じゃ……………ちょっとばかり……………不整脈が起こっただけじゃよ……………」

そう答える鼠入忠治だが、どういうワケだが目を合わせようとしていない。何かを隠しているような態度に、しかし賢一は深く追及することはなかった。

「……………そう……………ですか。無理しないでくださいね」

「気を遣わせてしまってますまん。その言葉、ありがたく戴いておくでしょう」

「いえ。これくらい当たり前のことですから」

「ふむ。今時珍しい人情の厚い少年じゃな」

手放して称賛する鼠入忠治の言葉に、賢一はただただ困惑するばかり。

「……………そんな……………買いかぶりすぎですよ」

「ほっほ。こりゃ謙虚なことじゃな。ところで賢一くんや。体調は良好かね？」

「え？ ええ……………まあ……………特に不調ではありませんけど……………」

今し方、不整脈で苦しんでいたとは思えない言葉に、賢一は妙な引つ掛かりを覚えた。

賢一がたじたじになってる姿を横目に、鰐淵牙楼は皆の目を盗み、独り作業台周辺を物色していた。

「がろーくん、なにやってるの？」

気配を消そうとしていた彼の思惑を察したのか、すっかり泣き止んだ鰐岡万夜が囁き声で話しかけて来た。

存在をすっかり失念していた相手に機先を制され、鰐淵牙楼は悔しさとも驚きともつかない表情を露わにした。

「何もしてねえよ……………つーか、オレに構うなって言ってるだろうがよ」

「いいでしょ、別に。がろーくんの邪魔はしないから。ね？」

「……………その言葉忘れるなよ？ 男に二言は無えよな？」

「うん！ 万夜、女の子だけだね！」

「そんなことはどーでもいいんだよ」

「うん。りょーかいだよ、がろーくん」

そうして亀岡万夜を手懐けた鰐淵牙楼は、大人達の目を盗んで、作業台に置かれていた一振りのナイフを懐に忍ばせた。もちろんその様子を、亀岡万夜はしつかりと目撃している。

「がろーくん、それなあに？ ほうちよう……？」

「違いよ。ナイフだよ、ナイフ」

「ないふ……？ 切れるの？」

「当たり前だろ。ナイフだからな」

鰐淵牙楼が忍ばせたナイフは、刃渡りが二〇センチ程と、サバイバルナイフに匹敵する代物である。だが彼はそれほどの凶器を平然と隠し持つのだった。

「そんなの持ってたらあぶないよ、がろーくん」

心配する亀岡万夜の言葉をまったく意にも介さず、彼はにべもなり返す。

「うるせー。オレの邪魔はしないんじゃないやなかったのか？」

「……うう」

今し方取られた言質を振り翳され、亀岡万夜はぷうと頬を膨らませた。

すると間もなくして、何かを思いついたのか、無邪気な笑顔を弾かせると、髪を結っていたキャラクター物のヘアバンドを外し、鰐淵牙楼が手にするナイフの柄に止めたのだった。

少女の不可解とも言える行動に、鰐淵牙楼は怪訝な表情を向ける。

「……なにやってんだ？」

「これはね、お守りなの！ がろーくんがケガしないようにって、万夜、お祈りをこめたの」

「……バカかお前。そんなことされなくても、こんなもんでケガなんてしねえよ」

そこまで素っ気なく言って区切り、数拍の間を置いて気恥ずかし

そつに言葉を継いだ。

「……でもまあ……たまにはこういうのも……悪くねえな」

素直になりきれない鰐淵牙楼の言葉。けれど亀岡万夜は満足気に笑顔を湛え、「うん。どういたしまして」と無邪気に返したのだった。

「もう万夜ちゃん。またいつの間にかいなくなってるし。ダメじゃない、勝手に離れちゃ……もう！」

話に一段落ついた矢先、猫矢鞠子が母親のごとく現れ、ぷんすかと怒りを口にした。

「ごめんなさい……鞠子おねえちゃん」

「いいのよ、万夜ちゃん。判ってくればそれでいいの」

「……うん」

猫矢鞠子は少女の頬にそつと両手を添えると、そのまま我が子のように抱き締めた。

「粗方調べ終わったか。ここにはめぼしい情報はないようだな。

……先へ進もう」

すつかり統率を執っている賢一が、全員の行動を促す。

「そつぱりぱりしなくてもいいと思いますけどね。所詮ドツキリ番組なのでから」

「うふふ。……いいわアこの部屋……嗚呼……素敵。うふふ……」

「くそつ！ どうしてこんな狂った状況ばっか、立て続けに起こるんだ！？」

「次は隣の部屋を開けるんだろ？ ……あいよ。任しときな」

「……ひい……ひいっ……ひいひいひい……っ……」

……！！」

各々が思い思いに喋る。中には背筋が凍りそうな科白も含まれていたが、賢一は極力意識しないように努めた。

「……じゃあここはもう出ましよう。あまり長居したい場所でもないでしょう」

それを合図に、皆が部屋を後にする最中、すぐ傍でげんなりした

声が上がった。

「ほんとよ。……臭いが服に染み付いたみたいで気持ち悪い……。今すぐシャワーでも浴びたい気分だわ……」

「シャワー……」

何気なく零された平穩な言葉に、賢一は思わず猫矢鞠子の肢体に視線を向けた。

おぞましい部屋の光景とは対照的に、キュロットスカートから伸びる白磁の美脚がとても輝いて見えた。そこから少し視線を上げれば、ふたつの控えめな丘陵が、その存在を主張している。賢一はそんな彼女の魔力に魅了され、あらぬ妄想に耽っていたのだった。

「……犬塚くん？ どうしたの？ 大丈夫？」

「え……！？ あ……ああ。……大丈夫だよ。ちよつと考え事を……」

言葉こそ濁しているが、嘘はついていない。賢一は変なところで真面目な性格だった。

「考え事もいいけど、顔が真っ赤よ？ 熱でもあるんじゃない？」

「いえあ……！？」

下手なラッパのような呟きを零している内に、猫矢鞠子はおもむろに自分の額を近付け、賢一の額に当てた。

「ちよ……ちよつと……猫矢さん……！？ いきなり……な……なにを……して!？」

「何って、熱を計ってるんじゃない。じつとしてなさいよね」

「~~~~!？」

賢一は為す術なく、猫矢鞠子にされるがまま熱を計られた。

「うん。大丈夫。熱はないみたいね」

「……どうも」

そりゃ、猫矢さんのことを考えて妄想してただけだからね、とは口が裂けても言えず、賢一はバツが悪そうにお礼を述べることにしか出来なかった。

「さ、いきましよう。あ 次の部屋、開いたみたいよ」

「ああ……うん。そうだね、行こう」

猫矢鞠子に促され、賢一は皆が集まる部屋へと入った。今の部屋と似たような光景を覚悟していた賢一だが、最初に漏れた言葉は感嘆だった。

《一階・薬品室》

「うわぁ……す……っ」

入った瞬間、目に飛び込んできたのは所狭しと置かれた薬品の数々だった。物置棚が幾列に渡って設置され、そのすべてに数え切れないほどの薬品が並べられている。他にも包帯やピンセットなどの医療用品までもが完備されていた。

殆どの者達が退屈そうに棚を見渡す中、賢一は鼠入忠治の姿を見つけ、声を掛けた。

「鼠入さん。これも全部薬品ですか？　すごい数ですね……」

「うむ。……じゃが、この建物が病院の類とは到底思えん……。一体何を目的に建てられたものなんじゃろうか……」

大人らしく、道筋を立てて思索する様子に、賢一は言い知れぬ心強さを覚えていた。

「ここの薬品も何かに使えそうなんですか？」

「うむ。使えるには使えるじゃろうが、あいにく儂には専門外

これは医療用じゃよ」

「そうなんですか……。僕もこういう分野はさっぱりです」

賢一の言葉に相槌を打ちながら鼠入忠治は、ゆったりとした動作で背後へと視線を向けた。

「これに関しては、儂よりむしろあの娘の方が詳しいはずじゃて」

「兎沢さんが？」

呟いてすぐに、賢一は「あ！」と閃きの声を上げた。

「そうだ。確か彼女は医大生って……！」
したり顔を浮かべる賢一に、鼠入忠治は柔和な微笑みで応え、ゆつくりと頷いた。

「じゃあちよつと話し聞いてきます」

そう断りを入れてその場を離れると、賢一は兎沢朱音の姿を捜した。

歩き出してすぐ、薬品棚を注視しながら、何やらメモを取っている善養寺良彦の姿が視界に入ったが、今は関わらないことにした。そのまま薬品棚を三列ほど移動した先にある作業スペースに、彼女の姿はあった。後ろ姿のため判然としないが、どうやら何かの作業をしている最中のようなだった。数秒逡巡した後、賢一はおずおずと声を掛けた。

「あの……兎沢さん。ちょっといいですか？」

「なアに？ 今忙しいんですけどオ？」

「……すみません……。えっと……それは何をやってるんですか？ 状況が状況だけに、あまり弱気なところを他人に見せたくないと言賢一は思う。だが、兎沢朱音と相對すると、どうしても気持ちが悪くなる縮してしまうのだった。ともすれば、本物の魔女かと疑いたくなるほどの薄ら寒さを感じさせるほどに……。」

「見てわかんないのオ？ 薬の調合してるのよオ」

「調合？」

「そうよ。これから先、誰かが怪我しないと限らないでしょう？ その時のための薬を調合くってるのオ。判くったかしらア？ 坊や」

「は……はい。よかつたらその内、僕にも調合のやり方を教えてくれませんか？ ……僕も皆さんの役に立つようなことをしたいので……。」

賢一は建前でも偽善心からでもなく、本心からそう思っていた。だがそんな思いは得てして相手に届かず、そればかりが余計に事態を悪化させてしまう場合もある。

特にこんな状況下では……。

「善人ぶってんじゃねえぞ、てめえ！ そんなこと言って、どうせ自分のことしか考えてねえんだろがよオッ！」

「ちょ……誰もそんなこと言ってないでしょ……！ 僕は本当に……。」

「どうだかな。会って間もないやつ言葉なんて信用出来ねえよ！」
「……どうしてあんたは、そんな言い方しか出来ないんですか……！」

「教えてやるのか？　これが俺だからだ」
傲慢な態度を改めようとしてもしない羽鳥翔吾に対し、賢一は苛立たしげに睨み据える。

まったくもってふたりの相性は最悪としか言いようがない。誰もが一様にそんな表情を浮かべていた。

緊張した睨み合いが十数秒ほど続いたのち、兎沢朱音が場違いな程に弛緩した声を上げた。

「これで完成ねエ。とりあえずこんなものかしらア？」

瓶詰めした調合薬を白衣のポケットに収めた彼女はゆったりと歩き出し、賢一と羽鳥翔吾の間に割って入ると、そこで足を止めた。

そして、どちらにもとなく微笑むと、背筋が凍るほどに妖しい声音で歌うように囁いた。

「……いい加減にしないと解剖すわよオ？」

「~~~~~ッ!?」

嗜虐に蕩けた言葉に、賢一と羽鳥翔吾は完全に気圧されていた。形容し難い魔力を前に、呻き声を零すことすら叶わなかった。

戦慄するふたりを横目に、彼女は悠々と歩みを始めた。視界の端に翻る白衣を映しながら、しかし賢一はそちらへ視線を向ける気には到底なれなかった。

「どうしたの？　犬塚くん」

丁度入れ替わる形で賢一の傍にやってきた猫矢鞠子が、心配そうな声を掛けてくる。その横で羽鳥翔吾が露骨に舌打ちをして、立ち去っていった。

「あ……あ……」

「羽鳥って人にまた難癖付けられたのね？　あーゆー人のことは気にするだけ無駄よ。好きに言わせておけばいいわ。わたしは犬塚くんが正しいって信じてるから。　ね？」

「……………」
「これは実に緊迫感のある演出ですね。鬼が出るか蛇が出るか……
というところですか」

「ちよつと善養寺さん!? これ、ほんとうに番組の収録なんですよ
うね!? もしものことがあつたらただじゃおかないよツ……!」

「へっ……! 化け物でも出てくるってのか!? 上等だぜ、叩きの
めしてやらアよツ!」

「うふふ……うふふ。いいわア……ゾクゾクしちゃう」

「皆の者、冷静になるんじゃ……! 取り乱してはならん!」

「ひ……っ……ひいひいひいっ……! たす……タス……助け
……………」

誰もが口々に喋りだしたことで、一気に場の收拾がつかなくなつた。
鼠入忠治の忠告も虚しく雑音に溶けて消える。

混乱を極める薬品室で、賢一は現状における最善の一手に思考を
巡らした。だが、導き出された結論は? 廊下に出て状況を確認する
?という平凡なものだった。ロクな行動策が出てこないことに歯痒
さを覚えながら、賢一は扉を開け放ち、勢いのまま廊下へと飛び出
した。

賢一の後には鼠入忠治と羽鳥翔吾が続き、残りの七人は様子を窺う
形に留まっている。

「……………ッ!」

三人は特殊部隊の突入さながら、しきりに左右に視線を巡らし、
安全確認を行う。誰からともなく息を呑む空気が、廊下を支配した。

「……………何もなさそう……ですね」

「ああ……そのようじゃな……」

賢一が鼠入忠治とアイコンタクトをとって言葉を交わしたのとは
ば同時、羽鳥翔吾が驚きに満ちた声を張り上げた。

「お……おいっ! あれを見る!」

「なにを……!?!」

羽鳥翔吾が指さす先　鰐淵牙楼が複雑な鍵が掛かっていると
言っていた扉　に視線をやった瞬間、賢一は場の空気が三　ほど下
がったような錯覚を覚えた。

「……扉が……開いてる」

賢一の口から漏れた言葉は恐怖に塗り潰されていた。彼の脳裏は
今、扉が開いたという事実から来る喜びより先に、誰が扉を開けた
のかという疑問が鎌首をもたげているのである。

得体の知れない恐ろしさに、全身がぞわりと粟立った。

（なんだ……！？）

賢一は普段から別段勘が鋭いわけでもなんでもない。ただ、この
時だけは確信にも似た予感があった。

何か居る。と本能が叫んでいた。その存在に気付いているの
は賢一だけのようだった。

どうして賢一だけがその存在を察することが出来たのか……その
疑問が解消されるのは、当分先のこととなる。

「……くそっ！　気味が悪いつたらないぜ……。差し詰めネクスト
ステージってどこか……いいぜ、やってやるよ！」

闘志を滾らせ、羽鳥翔吾が一步、また一步と扉へと近付いていく。
彼の後ろ姿を見詰める賢一の鼓動が早鐘を打つ。時が刻まれる度、
賢一の中でよりはつきりと？何か？の存在感が増していくのが判っ
た。細心の注意を払いながら扉へと近付く羽鳥翔吾。固唾を呑んで
成り行きを見守る賢一たち。そして……悪夢という名の現実は、賢
一たちを嘲笑うかのごとく、無情にもその姿を露わにしたのだった。

「羽鳥サン　上だ　ッ！」

「な……ッ！？」

賢一の注意に、羽鳥翔吾は咄嗟に身を振って回避行動を取った。
次の瞬間、羽鳥翔吾と賢一の間、大人三人分は優にあるうかとい
う存在が轟音を響かせて着地。桁外れの巨軀を誇示するかのよう
に悠然と屹立し、辺りを睥睨しているようだった。

「……な……ッ！？　……なんだこの化け物は……！！？」

腰が抜けたのか、羽鳥翔吾は扉を目前にしてくずおれた。

「こいつは……まるでさっきの………！」

賢一の口から戦慄の音が漏れる。

現れた異形は、先刻モニターの中で男を惨殺してのけた馬ヅラと酷似していた。一見しただけで違うと判るのは頭のパーツのみ。向こうは馬だったがおちらはどうやら犬のように見えた。鼻にまで届く長い舌を出したまま、リズムを刻むように呼吸を繰り返している。賢一たちが何より恐怖を感じたのは異形の巨軀でも犬の頭でもなかった。それは異形が両手で握り締めている巨大な斧。一振りで大木をも切り倒してしまいそうなほどの破壊力がありありと感じさせる、原始的にして害意の塊たる得物に他ならなかった。

「うそ………だろ………!?!」

羽鳥翔吾は眼前に立ちはだかる異形を見上げたまま、立ち上がる事すらままならず、擦れた声を零している。

そんな彼の恐怖心を煽るかのように、異形はおもむろに斧を振り回し、コンクリートの床を容易く穿ってみせた。理解の範疇を超えた殺意が羽鳥翔吾に突き刺さる。

「~~~~~ツ!?!」

声にならない悲鳴を上げる中で、しかし羽鳥翔吾の瞳には未だ抗いの炎は煌々と燃え盛っているようだった。隙あらば噛みついてやる、と言わんばかりの勢いである。

だが、異形は彼のことなど全く意に介さず、賢一を見据え続けている。

一同に緊張が走る。死刑執行時の秒読みにも似た無情なる時の中で、賢一は異形が動き出す様を鮮明に認識していた。

「うっ………!」

いくら頭で認識しようとも、身体が動かなければ意味がない。今、賢一はまさしくその状態にあった。金縛りのごとく、手足がぴくりとも動かない。

刹那、賢一の脳裏に惨殺された男の死に様が鮮烈に蘇った。そし

て悟る。

ああ……僕は今日ここで死ぬんだ　と考えた瞬間、賢一の視界が滲み、頬に二筋の熱い露が伝った。期せずしてそれが、賢一の中にある生への執着心を呼び醒ました。

（まだ……こんなところで……）

死ぬわけには

いけないんだッ！）

カツと両の眼を見開き、異形を視界に捉える。

「鼠入さん！　ここは僕が奴を引きつけますから……先にみんなを奥へ誘導してください！」

「賢一くん……！？　それはあまりにも無茶というものじゃ……！」

戸惑い、異を唱える鼠入忠治の言葉を聞き流し、賢一は同じ科白を繰り返した。刻々と異形が迫る中、賢一の気迫と危険を顧みない覚悟を前に、鼠入忠治には従うほか術はなかった。

「鼠入さん。後ろの部屋に隠れていて下さい。僕が合図をしたら手筈通りをお願いします！」

「わ……判った」

応じるが早く、鼠入忠治はじりじりと後ずさり、機敏な動作で《実験室》に身を隠した。扉が閉まるのを見届けてから賢一は、廊下の端までその身を後退させた。《待機室》に続く扉に背を預け、賢一は吼えた。

「来い……化け物……！」

AAAAAAAAAZOOOOOOOOBBOOOOOO
OOOOOOOOO！

獣の咆哮とも慟哭ともとれぬ声が廊下に反響し、賢一は酩酊にも似た眩暈を覚えた。それでも倒れるわけにはいかないと己を鼓舞し、合図のタイミングを見計らう。

異形が一步、廊下の角を曲がったことで、背後に空間が出来た。

賢一はすばやく判断し、合図を出した。

「　鼠入さん！　今です！」

合図とともに、《実験室》の扉が開け放たれ、鼠入忠治が異形の

背後を通り過ぎた。年齢の割に俊敏な動きで《薬品室》の皆を奥の扉へと誘導していく。

思い通りに事が運んでいると喜ぶ反面、賢一は妙な違和感を感じずにはいられなかった。

（こいつ……今……鼠入さんにまったく注意を払っていなかったんじゃないか……？）

相手の動きに細心の注意を払いながら、賢一はさらに思考する。

（そういえばさつきもそうだ。明らかに羽鳥さんの方が近いのに、こいつは僕の方をずっとみていたんだ……！ どうして……どうして僕なんだ……！？）

賢一の疑問は堂々巡りするばかり。明確な答えを出すには手掛かりが少なすぎるのだ。そんなことより今は、いかにしてこの状況を切り抜けるかという問題に思考が切り替わっていた。

異形が動く。手に持った大斧を軽々しく振り回し、賢一との距離を詰めてくる。

「くそ……っ！」

何か対抗手段はないかと自問自答を繰り返すばかり。こんなことなら日頃から格闘技でもやっていたればよかったと、普段、間違っても考えないだろう事を後悔した。

「オラアツ！ てめえばっか、かつこつけさせるかよ！」

いつの間にか恐怖の牢獄から抜け出していた羽鳥翔吾が、異形相手に勇猛果敢にも徒手空拳で殴り飛ばした。驚く間もなく、次の声が響く。

「若者は生きねばならぬ！ こんなところで見殺しにしたりはせぬぞ、賢一くん！」

「羽鳥さん！？ それに……鼠入さんまで………！？」

鼠入忠治は何やら懐から取り出した小瓶を、異形に向かって投げつけた。瓶が割れ、中の液体が異形の腕にかかるや否や、肉の焼ける独特のにおいが廊下に充満した。謎の液体を浴びせられた異形は身を抜ってのたうち回り、苦悶の声を漏らし続けている。その驚く

べき効果に、賢一はただただ生唾を呑み込んで見詰めることしかできなかった。

「これで終わりじゃねえぞ！」

すっかり強気になった羽鳥翔吾が、追い打ちをかけようと異形へと肉薄する。

刹那、賢一の視界に鈍く光る大斧が視界に映った。嫌な予感が脳裏を過ぎり、羽鳥翔吾を制止しようと叫ぶより早く、鈍い銀光が廊下を一閃した。

「……ッッ!? ぐあああああああああ！」

羽鳥翔吾の絶叫が響き渡り、全員の鼓膜を揺さぶった。

「は　　羽鳥さん!?」「む……いかん……!　羽鳥くん、大丈夫か……ッ!?!」

異形が苦し紛れに投擲した大斧が、羽鳥翔吾の左腕の肉を抉り取っていったのだった。血飛沫が舞い、廊下が赤に染まる。早く傷を手当てしなきゃと賢一が思考を巡らす中、異形は突然、狂ったように走り出した。思いがけない行動に賢一の背筋が凍り付く。

「みんな

どっかに隠れるおおおお

おおおおおおお！」

気付けば賢一は、腹の底から絶叫を迸らせて、危機的警告を発していた。その咆哮に扉の先に待避したほぼ全員が震え上がり、動揺を禁じ得なかった。

ほどなくして、台風のごとき異形が去つたのを見届けてから、賢一は恐る恐る呼び掛けた。

「猫矢さん……みんな……無事か………!?!」

数拍の沈黙の後、最初に応答したのは猫矢鞠子だった。

「うん……こっちはみんな無事……!　犬塚くんが叫んでくれたお陰だね。ありがとう」

「そっか……よかった……!」

安堵したのも束の間、賢一は重大なことを思い出し、再び声を張り上げた。

「 兔沢さん！ 今すぐ羽鳥サンを手当てしてあげて！ 異形の斧にやられたんだ……！」

これほどの状況に陥ってもなお、妖艶な笑みを湛えたままにいる兔沢朱音は、賢一の要望をすんなりと承諾すると、決して慌てることなく《薬品室》へと舞い戻ったのだった。

これが賢一たちの……異形とのファーストコンタクト。狂気と混乱……その序曲であった。

〈亀岡万夜〉の場合。

一年前まで、少女は大の動物好きだった。

「え？ なつちゃん、家でペット飼えるようになったの？」

朝の登校時間。何気なく出た話題に亀岡万夜は瞳を輝かせて食いついた。

「うん。お父さんに相談したら、いいよって言ってもらえたんだよ」「うわあ〜いいなあ〜。なつちゃんがうらやましいよ」

「万夜ちゃんのお家はやっぱり今でもダメな感じ？」

「うん……。お母さんもお父さんも動物が嫌いみたいで……。当分無理そう」

「……そっか」

せつかくの明るい話題を盛り下げってしまったことに気付いた亀岡万夜は、ハツとして言葉を継いだ。

「あ、そうだ。今度の日曜日になつちゃんの家遊びに行ってもいい？」

「うん。もちろんいいよ！」

「ありがとう、なつちゃん。どんなペットなんだろう。今からたのしみ！」

明るい雰囲気のまま、二人は揃って学校に到着した。

その昼休み。

「はい、みんなー。今日はクラスの係りを決めましょうねー」

『はーーーーーい！』

「うん。元気があって気持ちのいい返事ですね。今日も一日、元気に行きましょうね」

担任の先生が進行役となり、亀岡万夜が所属する一年A組の授業が始まった。

「黒板係をやってくれる人、いるかなー？」

『はー！はー！はー！』

「返事は素晴らしいけど、そんな大勢が同じ係りにはなれません。じゃんけんです」

すると教室の中央で黒板係りを希望する児童が輪を作り、威勢のよい掛け声と共にじゃんけんが繰り広げられた。ややあつて、歓喜と落胆の声が同時にわき上がった。

担任の先生は調子よく、次々と係りを決めていく。

そんな中、亀岡万夜は隣の席の少女に話し掛ける。

「ねえ、なつちゃんはどの係りにする？」

「うんとね………生き物係………かな？」

「あ！万夜もそれにしようって思ってたの！」

亀岡万夜は瞳を爛々と輝かせて、言葉を継ぐ。

「ねえ、なつちゃん。ふたりで生き物係にならない？」

「うん。いいよ」

二人が約束を交わす中、残る係りは遂に最後となった。

「じゃあ最後ね。生き物係をやってくれる人？」

「はい！」

二人は息もピッタリに返事をして立ち上がった。

「じゃあ決まりですね」

担任の先生が黒板に二人の名前を書き込み、亀岡万夜は諸手を挙げて喜んだ。

担任の先生と相談した結果、一年A組で飼う生き物は小亀ということになった。

「わあ、亀さんだあ！かわいいね！」

「そうだね、万夜ちゃん」

その日からというもの、二人はありったけの愛情をもって、小亀の世話を続けた。

朝は誰よりも早く登校し、放課後も空が暗くなる寸前まで小亀の傍にいた。

動物の世話ができる。亀岡万夜はそれだけで幸せだった。

季節が変わり、小学一年生の夏休み。

生き物係の二人は相変わらず小亀の世話に明け暮れていた。

「毎日暑いね、なっちゃん」

「そうだね」

教室の水槽の中をのんびり歩く小亀を眺めながら、二人は談笑に興じていた。

不意に何かを思いついたのか、亀岡万夜が「そうだ！」と明るい声を上げた。少女が「どうしたの？」と問うと、亀岡万夜は意気揚々と言葉を継いだ。

「かーくんをお外に連れて行って、水浴びさせてあげようよ！」

亀岡万夜の提案に少女は二つ返事で同意した。

二人は早速水槽を外へと運び、やや大きな足洗い場に水を張った。その中に小亀かめを放った。すると小亀はのびのびと、気持ちよさそうに泳ぎ始め、二人は顔を見合わせて笑い合った。

そんな二人の幸せに満ちた時間は長くは続かなかった。

水を交換しようと、小亀を持ち上げ、足洗い場の栓を抜いた直後、亀岡万夜が誤って手を滑らせ、小亀を落としてしまったのだった。

「あ……………」

亀岡万夜の手を離れた小亀は、一瞬にして二人の視界から消えてしまう。慌てて小亀を捜す二人。だがそうこうしている内にも小亀は水の流れのままに、排水穴へと吸い寄せられていく。パニック状態の二人の頭に、再び栓をするという考えはなかった。

二人の必死の救出の虚しく、小亀は流されてしまったのだった。あとに残ったのはまだ新しい水槽だけ。自分が小亀を殺してしまったという罪悪感から亀岡万夜は、この日を境に動物恐怖症になった。

首輪の異変。

兎沢朱音が羽鳥翔吾を手当てした後、賢一たちは扉の奥へと踏み込んだ。

《一階・足跡のある廊下》

「チツ……三つとも鍵が掛かってやがる。……おい、おばさん。開けられねえのか？」

「まったく口が減らない若造だねえ」

呆れ顔で返しながら、虫賀奏は入ってきた扉の近くにある、三つの扉を調べて回った。

「……これはあたしにや開けられないね」

言うや否や、場に落胆の空気が立ち籠める。賢一は鍵を開けるのを諦め、廊下の先へと視線を向ける。廊下は相変わらず薄暗く、明滅を繰り返す蛍光灯が一本あるだけだった。

「ん？ なんだ……これ……？」

廊下の半ばまで歩いた時、賢一は足下にある模様に気付き、その場に屈み込む。よく見るとそれは足跡のようだった。

「……足跡……みたいね」

遅れてやって来た猫矢鞠子が、隣で賢一の疑問に答える。

「足跡か……。でもこれって動物の……だよな？」

「うん……そうみたいだね。どうして動物の足跡なんかが……？」

「……。判らない。とにかく先へ進もう」

不気味な足跡を一旦保留とし、賢一は廊下をさらに奥へと進んだ。「やけに長い廊下があるぞ。廊下の先が見えない」

歩き出してすぐ、賢一は左手側にもう一本の廊下を認めた。幅は人ひとりがやっと通れるくらいで、廊下の先が暗闇に閉ざされている。行き止まりかもしれないし、何かあるかも知れない……そんな雰囲気。

「調べて……みるべきかな？」

緊張した面持ちで誰にともなく問う。それに答えたのは猫矢鞠子だった。

「危険だわ。この幅じゃ、もしさっきの化け物が出て来た時に避けようがない……。こんなの、自分から落とし穴に落ちにいこうな自殺行為よ……！」

猫矢鞠子は冷静に正論を述べた。少し考えて、賢一も同意する。「……そうだな。調べるところは他にありそうだし、今じゃなくてもいいか」「うん」

僅かに安堵した眼差しを浮かべ、猫矢鞠子は賢一と顔を見合わせた。

「あれ……？」

「ん？ どうかした？ 猫矢さん」

「ううん……。大したことじゃないと思うんだけど、犬塚くんの首輪のランプが……ひとつ消えてるから……。……いつ消えたのかなあ……って……。思って……」

「え？ 本当？」

「うん。今は三つしか点いてないよ」

賢一は思考を巡らした。猫矢鞠子のランプはまだ四つある。どうして自分だけ消えたのかと、首輪を握り締めたまま黙考した。そしてすぐに目を開くと落ち着いた口調で告げた。

「……とにかく進もう。今の僕たちに出るのはそれしかない」

「……うん、そうだね……！」

具体的な言葉はなくとも、賢一と猫矢鞠子は互いに互いを励まし合っていた。

さらに歩を進めると、右手に階段、左手に大きな扉が見えてきた。大きな扉側にある三つの扉には鍵が掛かっておらず、難なく開けることが出来た。部屋は手前から順に《物置》《給湯室》、廊下を挟んで《便所》だった。賢一は先に、左手側にある大きな扉に手を掛けることにした。重厚な音を響かせて、大きな扉は意外にもあっさ

りと開いた。

《一階・中央ホール》

「うわっ……なんだここ……すげえ広いじゃねえか」

賢一たちが足を踏み入れた部屋はただっ広い洋間だった。部屋の中央にはソファとテーブルが設置され、観葉植物がインテリアとして並べられている。天井には豪華なシャンデリアが吊されており、今までで一番明るい場所となっている。入り口に近い壁際に設置されている小机には、幾つかのノート類が見て取れた。その反対側の壁際にはぼつんと《水槽》が置いてあった。どういうわけか《水槽》は目を覆いたくなるほどに汚れていた。

反対側の壁には大きな鉄扉があったが、それはまるで堅牢な砦のようで、今までのどの扉よりも開けられる気がしなかった。羽鳥翔吾が、扉を蹴破ろうと試みてみたが、結局その行為は徒労に終わった。入って来た扉と同じ壁側にもうひとつ扉があるが、それには複雑な鍵が掛かっていた。部屋を粗方調べ終えた一行は、三々五々ソファへと腰を下ろし始めた。その行動から、各人の疲れの色がありありと見て取れるようだった。

そんな中で賢一だけが未だに部屋を調べ回っていた。入り口に近い小机に置かれた一冊のノートに着目する。取り上げたノートの表紙には《れんらくにつし》と表記されていた。子供の殴り書きのよな文字が、不気味な気配を漂わせていた。

賢一が《れんらくにつし》のページを開こうとした直後、背後で怒鳴り声が上がった。何事かと振り返れば、明らかに動揺をした善養寺良彦が、羽鳥翔吾と口論している最中だった。

「あと一步間違っていれば、危うく命を落とすところだったんですよ!？」

「知るか莫迦! 物陰でメモばっか取ってた奴に言われる筋合いはねえんだよ! 第一、お前は何もやってねえだろツ! 偉そうに意見してんじゃねえよ」

「私はキャスターとして、真実をありのままに記録する義務がある

のですよ！　そもそも、あの化け物を取り逃がしたのはあなたたちに責任がある。その事は自覚しているのですか！？」

「どうしてそうなるんだ！？　ちよつとは考えて喋りやがれ！」

「善養寺さん、まずは落ち着きませんか？　それにあなた、言っただじやない　これは番組の収録だから、あたしたちの身の安全は保証されているって……！」

恐る恐る口を開いた虫賀奏だが、その言葉には隠しきれない不安が滲んでいた。縋るような面持ちで見詰める彼女に、善養寺良彦の態度が豹変する。

「黙れ！　……実際に負傷者が出たこの状況で、まだ番組の収録などという戯言に縋っているとは、愚かにも程がありますよ」

「なっ……！！？　……善養寺……さん……？」

驚きのあまり絶句する虫賀奏をよそに、善養寺良彦は言葉を継ぐ。「みなさんも見たでしょう！？　これは一方的な殺戮　いわば狩りですよ！　あの化け物による人間狩り……それがこの施設の正体です……ッ！　私たちはこのおぞましき施設に集められた生け贄にすぎないので……ッ！」

善養寺良彦の滔々とした語りに、賢一たちは息を呑んで目を見張った。それは誰もが一度は脳裏に過ぎらせ、しかし決して口には出さなかつた可能性。だが今、善養寺良彦が明言したことで一気に現実味が帯び始める。

重苦しい雰囲気の中、賢一たちは善養寺良彦の言動に注目する。

「私は死にたくないッ……！　こうなったら自分の身は自分で守ってみせます……！」

「莫迦だろ、お前。十人居てこのザマなのに、たったひとりで何が出来るってんだ。そんなに死にたけりゃ好きにしゃがれ！」

「くくっ……！　貴方の減らず口もこれで聞き納めですね。……私が真っ先に脱出経路を見つけ出し、この地獄のような施設から抜け出してみせますよ……そうすればどっちが愚か者が一目瞭然となるでしょう……！」

「ほう、そいつはすげえな。是非とも脱出して頂きたいものだぜ」
羽鳥翔吾は目一杯の皮肉を籠めて吐き捨てた。対して善養寺良彦は彼の皮肉など意にも介さず、半ば狂ったように言葉を紡ぐ。

「ふ……ふふ。貴方たちの死に様が目に浮かぶようです。それではみなさん、ごきげんよう」

不敵な笑みと共に、善養寺良彦は入ってきた扉を開けて、廊下へと飛び出して行った。彼を引き留める声は、遂に上がることはなかった。

善養寺良彦が出て行ったのを見届けた後、賢一は《れんらくにつき》を開いて内容に視線を走らせる。一行読み終える度に賢一は顔面蒼白になっていった。《れんらくにつき》には次のような文章が記されていた。

月×日【ペット搬入報告】

今日も処分される？ペット？が十余体運ばれてきた。《待機室》にぶち込んである。

まず第一のお楽しみは？ペット？が足掻く姿だ。

いかに生き延びようとするか。その過程がこの上ない愉しみなのだ。

この世に？ペット？など、掃いて捨てるほど存在している。

故にいくら？ペット？が処分されようと、我らの胸は一寸も痛まない。

もっと、我らを愉ませてほしいものだ。

「なんだこれは……！？ ?ペット？ってどういう意味なんだ……
！？ ?我ら？って誰だ！？」

全員が中央のテーブルに集まり《れんらくにつし》に目を通す。内容を黙読するや否や、羽鳥翔吾は未だ見ぬ脅威に対して憤りを露わにした。他の八人もその内容に、何やら得体の知れない恐怖を感じ取っているようだった。

賢一は気を取り直して、何か手掛かりはないかと《れんらくにつし》をさらに捲り進めた。

すると、賢一が認識している今日の日付に近いページに、期待していた一文が記されていた。内容は次の通りである。

月×日【鍵の保管場所変更通達】

今後《中央ホール》西側の鍵は《見張室》に保管すること。係員は徹底されたし。以上。

一体、この日誌は誰が書いているのか……。

係員とは誰で、彼らの姿が見えないのはなぜか……。

賢一は不可解且つ薄ら恐ろしい疑問よりも先に、鍵のアテを掴めた事が精神的救いとなったところが大きかった。賢一は意を決して皆に意見を伺った。

「僕は《見張室》を探そうと思います。……気が進まない方はここで待っていて下さい」

「わたしは犬塚さんと一緒に行くよ」

「万夜もいく〜！ がろーくんも一緒だよ〜！」

「勝手に決めんな」

「がろーくん、一緒に来てくれないの？」

「……判った。行くからそんな顔すんな」

「うん！ ありがとう、がろーくん」

「……つたく……調子狂うなあ……」

一息に三人の同行が決まった。三人に続いて羽鳥翔吾と鼠入忠治が名乗りを上げ、やや遅れて虫賀奏が同意を示した。これで七人。残る二人の内、賢一は兔沢朱音に声を掛けた。

「僕たちはこれから二階へ行きますが、……兔沢さんはどうしますか？」

「ん〜？」

兔沢朱音は相変わらずの調子で微笑むばかりで、その内意は窺い知れない。《薬品室》で調合した薬瓶を弄びながらおもむろに口を開いた。

「アタシは遠慮しておくわア。ここで待ってるから、行ってらっしゃいなア」

「判りました。もし身の危険を感じたら大声で叫んで下さいね。魚成さんはどうしますか？」

「お……おお……大勢のほう……い……いつ………一緒に……いく……」

先刻の化け物騒ぎが魚成海斗の恐怖心に拍車を掛けたらしく、未だまともな会話すらままならないでいる。相当神経が疲弊しているのか、彼の顔色はすぐれない。弱り果てる彼の様子に、しかし賢一は特別何をしてやれるわけでもなく、一時の気休めにも似た言葉を返すより他なかった。

「判りました。一緒に行きましょう」

こうして賢一たち八人は、《中央ホール》の鍵を探すべく、行動を開始したのだった。《中央ホール》を後にする賢一たちの背中を、兔沢朱音は妖艶たる眼差しで見詰め続けていた。

《一階・足跡のある廊下》

「くそっ……まんまと踊らされてる気分だぜ。一体何だつてんだよ、この施設は！」

先頭をゆく羽鳥翔吾の苛立ちを聞きながら、賢一たちは《給湯室》に面した廊下を進む。すでに正面には二階へと続く階段が見えて

おり、不穏な気配はない。

「……………ここだな。……………上るぞ」

自身を奮い立たせるように呟き、羽鳥翔吾は階段に一步足を掛けた。と、ほぼ同時。

ガチャ……………ボタン！

心底不穏な音が賢一の耳朶を叩いた。反射的に右方へ視線を向けた瞬間、賢一の全身に電流が走った。蛍光灯が明滅する狭間に、異形の姿を見たのだった。

「……………!? ば……………化け物だ……………ツツ！ 逃げる……………早く

逃げるおおおおおッ！」

「……………ツ!?!?」「……………」

瞬く間に戦慄は全員へと波及する。

場が一気に混沌と化し、まとまりが利かなくなる。各々の叫び声が入り乱れてこたまし、逃走を促す賢一の声は思うように届かない。それでも賢一は必死に叫んで呼び掛ける。自身がしんがりとなり、時間を稼ぐ手段をとったのだった。

「羽鳥サン……………！ 早く上へ……………！ 先導してください……………ッ！」

「判つてらあッ！ いちいち指図してんじゃねえ！ オラア！ てめえらこつちだ！ 死ぬ気で走りやがれ！」

腹の底から絞り出した彼の号令が合図だった。

心なしか全員の金縛りが解け、動きがスムーズになったかのように、賢一には感じられた。さすがは元自衛隊員だなど、賢一は心の中で感心していた。

《二階・血糊のある回廊》

羽鳥翔吾を先導に、八人は避難場所を求めて二階へと駆け上った。階段を上がるとすぐ、廊下が左右に分かれていた。廊下は一階よりも薄暗く、非常灯程度の明かりしかなかった。

「くそっ……………どつちだ!？」

一刻の猶予も許されない状況で、羽鳥翔吾は必死に進むべき方向を思案する。自衛隊員だった頃から、彼は考えて行動するような夕

イブではなかった。肝心な時ほど、いつも頼ってきたのは自身の直感だった。故に今回も、彼は、手遅れになる前に、この二者択一を選ぶことが出来たのだった。

「こっちだ！」

ハッキリとした声を張り上げ、後続を左の通路へと導く。賢一は階下に注意を向けながら、皆の後に続いた。誰もが無我夢中で走る走らなければ異形に捕まり、モニターの男と同じ最期を辿ることになるから。

だから走る。

生き延びて元の平穏な日常に帰りたい。

ただ、その思いだけを胸に……ひた走った。

「扉だ……！　ひとまずここに隠れてやり過ぎすぞ……ッ！」

羽鳥翔吾の指示に異論はなかった。しかしその反面で、賢一の脳裏に不安がよぎる。

もし扉に鍵が掛かっていたら……？

もし扉の先にも化け物がいたら……？

それらに共通するのは最悪の結末に他ならない。かと言って他に選択肢はなく、賢一は祈るような思いで羽鳥翔吾の反応を待った。

「開いたぞ……ッ！　急げ……全員この部屋に入るんだ……ッ

！」

扉が開いた時、賢一は柄にもなく神に感謝した。たとえそれが運命の気紛れだったとしても、今はただ、命があれば何でもよかった。生き延びたい。

いつしか賢一の胸中で、本能的な願いが膨れあがっていたのだった。

全員が避難するまで、賢一は背後に注意を注ぎ、羽鳥翔吾の合図で部屋に飛び込んだ。

「……全員いるな。なるべく気配を消せ……ここであの化け物をやり過ぎすんだ……！」

入ってすぐの壁に身を預け、全員が息を止めて気配を消そうとす

る中、賢一は部屋の奥に視線を巡らしていた。しかし、明かりがま
ったくない為、部屋の様子は判然としなかった。

耳を澄ませば機械の駆動音とわずかに水の音を拾うことが出来た。
だが、それもそこまで。賢一の意識は否応なく、異形の動向に縛
られてしまう。

息を押し殺すこの状況が、いつ終わるやも知れぬ時の中で賢一は、
頼むから悪い夢であってくれと願い続けるのだった。そしてまたひ
とっ……。

賢一的首輪のランプが、人知れず沈黙したのだった……。

《鰐淵牙楼》の場合。

少年は同年代の子供と比べると劣悪な家庭環境に生まれ育った。会社の奴隷となり、出世なんて到底望むべくもない、弱く情けない父親の姿を見ながら育った。そのくせ父親は、家では傲慢な態度をとって母親を困らせていた。「俺が成功しないのはお前の所為だ！」と、自分勝手な理屈を振り翳す毎日。いつしか少年は弱者に対して嫌悪の念を抱くようになっていた。弱いことはそれだけで罪だと言わんばかりに……。

その頃を境に、少年の夢は歪んでしまった。弱きものを救う立場から、弱きものを蹂躪する立場へ。

弱者の味方なんて莫迦をみるだけだ。

少年は間も無くしてネットのコミュニティで知り合った人物から、寧猛なワニを譲り受けた。そしてその力を誇示するかのようになり、それまで面倒をみていた小動物を、ワニの餌としたのだった。

無論、その行為に対して罪悪感などなく、命の重みなど感じるべくもなかった。

少年はただ単純に強者であることの愉悦に陶醉したかったのである。

何を考えているか判らない。

単純に気味が悪い。

そんな理由で周りから相手にもされず、誰にも愛された事のない少年の、それは歪んだ自己主張だったのかもしれない。

少年の奇行は次第にエスカレートしていき、やがて周辺地域で動物の失踪が問題になった。秘密裏に飼っていたワニを隠し切れないと判断した少年は、最後の仕上げを実行に移した。

弱者を思う存分貪り食ったワニを自らの手で惨殺することで、まるで自分自身が絶対的強者になったと思いついたのだった。

しかし、それでも少年の渇きは満たされなかった。むしろ、望む

べき答えが余計に遠ざかったような気さえした。

少年は心の中で叫んだ。

弱者は罪なのか？

強者こそ正しいのか？

自分はどつするべきなのか？

無論、少年の渴いた叫びに答える者はいなかった。

その日から二カ月後。

少年は自身の渴きを満たしてくれる人物と、運命的な出会いを果たすことになるのだった。

次なる犠牲者への忠告。

《二階・貯水制御室》

「……プールか？ ……何だこれは」

あれからずつと息を潜め続けた賢一たちは、一旦の安全を察して部屋の搜索を始めたところだった。壁伝いに手探りで歩くと、照明のスイッチは案外あっさり見つかった。部屋の設備が照らし出された瞬間、先刻の言葉を羽鳥翔吾が呟いたところである。

「おそらく貯水槽じゃ。実態は何であれ、実験を伴う施設には欠かせないものじゃ」

直接尋ねられたワケでもなく、鼠入忠治は答えた。

普段温厚な老爺の横顔に、賢一は酷く残忍な気配を感じたような気がして、思わず背筋に悪寒が走る。

（鼠入さん……？）

何かの見間違いだと、一度視線を外し、改めて見る。何の変哲もない温厚な老爺がそこにはいた。

「どうかしたのかね？ 賢一くん」

「あ……いえ。なんでもありません」

「ふむ……ならいいのじゃが……。具合が悪くなったらすぐに言うんじゃよ？」

「あ……はい。……ありがとうございます」

やっぱり見間違いだったんだ。

老爺の優しい心配りに、賢一はホッと胸を撫で下ろし、相槌を打った。

「……それにしてもこの設備……何だか嫌な感じがしますね……」

「まったくじゃ。これが何を目的とした装置なのが判れば、手掛かりにもなりそうなものじゃが……」

半ば独り言に近い呟きを漏らしながら、鼠入忠治はコントロールパネルに近付き、おもむろに操作を試み始めた。賢一も彼の後に続

く。

「動かせるんですか？」

「……いや、ダメじゃな。僕の知識ではどうにもならんわい」

「じゃあ……あれならどうですか？」

賢一は部屋の片隅に備えられていた一台のパソコンを指差して示した。

「そうじゃな。あれの方がまださわれそうじゃわ」

二人はすぐさま移動し、パソコンを立ち上げる。見慣れないOSのロゴが表示され、間も無くデスクトップ画面になった。が、しかし。

「やはりパスワードが必要のようじゃの……」

画面に表示された『password?』の文字に、鼠入忠治は忌々しげな声を漏らした。

「……。これもダメそうですね」

「ああ……残念じゃが……」

二人がパソコンからの情報収集を諦めようとした矢先、背後で呪にも似た声が上がった。

「……あ……あの……」

「うわあああつ!？」

賢一は驚いて叫び、慌てて振り返った。

「……って、魚成さんじゃないですか……驚かさないで下さいよ」
いつの間にか賢一たちの背後に佇んでいたのは、ずっと怯えつつ放しだった魚成海斗だった。今でもその顔は蒼褪め、弱り切っている。とても良好とはいえない状態にも関わらずに話し掛けて来た彼の意図を、賢一は量り兼ねていた。そんな賢一の胸中を見透したように、魚成海斗は恐る恐る口を開く。

「……パ……パスワードなら……ぼ……僕……解ける……かも」

どもりながらも紡がれたその言葉に、賢一は瞠目した。

「本当ですか……!？」

不意に賢一はあることを思い出す。

「あ……そういえば魚成さんはプログラム関係の仕事をしているんですけど？ 確かにそれなら何とかかなりそうですね！」

喜々として捲し立てる賢一に、魚成海斗は黙したまま首を縦に振る。閉ざされようとしていた希望に、一条の光が差し込んだ瞬間だった。

「じゃあ魚成さん！ 早速お願いします」

賢一が魚成海斗を促し、鼠入忠治は席を譲る。

机に座った魚成海斗は、慣れた手付きで操作し、パソコンを再起動した。起動してすぐの画面でキーを叩くと、真っ暗な画面が現れた。

どうやらプログラム画面のようである。

そこからどうするのかと賢一が考える間もなく、魚成海斗は華麗なブラインドタッチでキーボードを叩き始めたのだった。賢一には理解不能な文字の羅列が、凄まじい勢いで打ち込まれてゆく。

最後にエンターキーを一際大きく叩き込んだところで、魚成海斗の手が止まった。

「……どうですか？」

声を掛けるのも憚られる思いながら、賢一は状況を伺った。しばらくの沈黙を挟んで魚成海斗は質問に答えた。

「……パ……パスワード……と……解けた……」

賢一たちの行動が気になっていたのか、周りを既に猫矢鞠子たちが囲んでいた。パスワードが解けたと判ると、弾むような歓声が上がった。

「すごいじゃないですか、魚成さん！」

「ほんと、びっくりしたわ。傍で見ていたけど、まるで魔法使いみたいだったよ！」

「なかなかの技量じゃな。見直したぞい」

「おじちゃんすごい！」

「……まあまあだな」

「へっ。怯えるしか能のねえやつかと思ってたが。なんだ、結構や

を食い入るように見詰めた。画面には確かに、テキストファイルがひとつ表示されていた。

「なっ……!?!?」

ファイル名を認めた瞬間、賢一はゾツとした。

《次なる犠牲者への忠告》

テキストファイルにはそう記されていた。

「なんだよ……犠牲者って……!?!? 次なるって……前にも同じ事があったのか……!?!?」

同じタイピングで画面を覗いていた羽鳥翔吾が、憤りとも恐怖ともつかない呟きを漏らした。まるで皆の胸中を代弁するかのような呟きに、場の空気が凍り付く。

「とにかく中を見てみましょう……話しはそれからです……!?!?」

冷静な賢一の一言に、羽鳥翔吾は素直に頷いた。

「じゃ……じゃあ……ひ……開く……」

震えた声で呟きながら、魚成海斗は問題のテキストファイルを開いた。ほどなくして表示されたのは、日記ともレポートとも取れそうな体裁の文章だった。

皆一様に、パソコン画面に表示された文章を黙読していく。

取り分け読むのが早いのか、一番最初に顔を顰めたのは賢一だった。

テキストファイル《次なる犠牲者への忠告》に記された内容は次の通りである。

月×日

まず最初にこのファイルの日付を 月×日と記したが、それは定かではない。単に私が認識している年月日が、西暦二〇××年 月×日だったというだけだ。

まあ日付が判らないことなんて、ここでは大した問題ではない。これを読んでいるということは、君たちのメンバーにもパソコン

に精通した人物がいたということだろう。それは何者かによる意図的なものなのか、はたまた偶然なのかは私たちにとつて知る由もないが、君たちの幸運を喜びたい。これはあくまで不幸中の幸いという意味でだ。勘違いしないでもらいたい。無駄話がすぎた……そろそろ本題に入ろう。

率直にいつて、この施設は普通じゃない。明らかに異常だ。完全に狂ってやがる。

恐らく君たちも既に目撃していることだろう……運が悪ければもう犠牲者が出てしまった後だろうか……。

そう、この施設を徘徊している神出鬼没にして最悪の存在 異形の化け物のことだ。

私たちのメンバーも、二人がその化け物に為す術無く殺された。為す術なくだ。

残り八人の内、五人が施設のあちこちで変死体となって見つかった……もう最悪だ！

私達三人は化け物から逃れつつ、なんとか脱出口を探し出そうとした。だが、施設内のほとんどの鍵を開けた現状ですら、脱出口は見つかっていない。ただ、一箇所だけ不可解な場所がある。それは三階だ。未だに入り口を突き止められていない為、これは推測の域を出ないが、もし脱出口があるとすれば三階だろうと、私は踏んでいる。

なんとかしてでも脱出口を見つけ、私たちは生き延びたい。今まで通りの日常に帰りたい。

そのためにはまず、あの化け物を始末する必要がある。

そして私は今、奴らを葬ることの出来る可能性を手に行っている。

今まで固く閉ざされてきた二箇所の武器庫。そのうち二階の西側に位置する武器庫の鍵を見つけ出したのだ。これで戦える。この惨劇が繰り返されているのかは判然としないが、後に続く君たちのためにも、一匹でも多く化け物を始末しておくでしょう。感謝したまえ。

最後にひとつ忠告しよう。首輪には充分注意することだ。私たちもその実態は掴めていないが、嫌な予感がしてならないんだ。……そういえば変死した五人の首輪はいずれも……。

「な……なんだこの内容は……！？ 首輪がどうしたっていうんだ……！？」

「それも気になりますけど、最大の手掛かりはここですよ……！」
動揺をきたす羽鳥翔吾に、賢一が落ち着いて返事をする。「画面の一文を指差して皆の注意を集める。賢一が指し示したのは脱出口に関する記述だった。」

三階に扉がある。もしかしたらそこから脱出出来るかもしれない。そう考えるだけで、皆に精神的余裕が生まれたようである。僅かに表情が和らいだ。

「……それにしても……儂らと同じようなことが、過去にもあったんじゃない……。一体ここは何なんじゃ……！」

「……落ち着いてください、鼠入さん。……現時点の情報量ではまだ確定できませんが……《中央ホール》の日誌を信じるなら……ここは処理施設なのでしょう……？ ペット？の」

「なによ、？ ペット？ って……！？ ここにいるのはあのふざけたマスクを被った化け物しかいないじゃないの！ 動物なんて一匹も見かけてないわよ……！？」

軽度のヒステリーを起こして、虫賀奏が喚いた。放っておけば纏まりが利かなくなることを恐れ、賢一はずつと言わずにおこうと思っていた推測を口にした。

「……何を言ってるんですか？ 虫賀さん。……僕たちはここに来るまでに見かけていますよ……？ 動物？を……！ もう真実から目を背けるのはやめにしましょう」

「え……？ あんた……一体何を言ってるんだい……！？」
目に見えて狼狽える虫賀奏を横目に、賢一は言葉を継いだ。

「……どこでいう？ペット？とはつまり……僕たち人間のことですよ……！」

『~~~~~ツ！？』

場に動揺が駆け巡り、息を呑む気配が重なった。全員、賢一が言った言葉の意味を理解出来ないといった表情で、視線を彷徨わせている。

否。理解出来ないのではない………理解したくないのだ。

それは思考の放棄。ある種の自己防衛本能であった。

誰もが喉のおくに押し留めていた可能性に触れた事で、場の不安感は一気に膨れあがった。

重たい空気が場に立ち籠める。

誰もが浮き足立つ中、沈黙を破ったのは猫矢鞠子だった。全員の視線が彼女に注がれる。

「……わたし……前にどこかで聞いたことがある……。飼育放棄されたペットを集めて処理する施設があるって……。その施設の名前は確か………」

一拍の間を空け、どこか確かめるような口調で言葉を紡いだ。

「……ドリームボックス……！」

直訳すると『夢の箱』……。

賢一は内心、言い得て妙だなと呟き、皮肉げな微笑を浮かべた。

あくまで憶測とはいえ、施設の全貌が明らかになったことで、あやふやだった恐怖が現実味を帯び始める。

次に殺されるのは自分かも知れないという心理 ヒドゥンホラー
隠された恐怖
が賢一たちの精神を弄ぶように削っていく。

そんな状況下において、羽鳥翔吾だけが活気に溢れているようだった。

「てめえらビビってんじゃねえぞ！ 見ろ！ 二階に武器庫があるって書かれているじゃねえか！ 早いところそれを手にすりゃあ、あの化け物なんて目じゃねえよ！」

「………」

羽鳥翔吾の言い分に、しかし、賢一は返す言葉が思いつかず口を噤むしかなかった。

「そうと決まればさっさと動こうぜ。とりあえずは例の鍵だな。…
…《見張室》ってのはどこにあるんだ？」

主導権は握ったとばかりに息巻く彼の姿は、恐怖心を誤魔化そうとしているようにしか、賢一は思えてならなかった。無論、そんな態度はおくびにも出さない。

「そうですね……。見取り図でもあればいいんですけど」

「犬塚くん……。あれは？」

「え？」

猫矢鞠子が指差した先……。入り口から一番遠い壁面に、連絡板らしきものが設置されていた。遠目には判然としないが、もしかすればという期待のもと、賢一たちは連絡板へと近付いていった。実験レポートや報告書などが乱雑に貼られた中に、賢一は一枚の紙片を見つけた。それは随分と時間が経っている所為か、インクが擦れてほとんど役に立たない施設案内図のようだった。目を凝らせば辛うじて《見張室》の文字が読み取れた。

「ここから近いみたい。……。部屋を出て右へ。……。階段を左手に真っ直ぐ進み、左折した先の右側の部屋が《見張室》のようです」

「よし！ じゃあ行くか。こんなところ、一秒でも早くおさらばしてやろうぜ」

「ええ……。そうですね」

案内図を握り締めたまま、賢一は無難な相槌を打つ。ふと視線を振ると、猫矢鞠子が不安そうな面持ちで歩み寄ってきていた。傍らには亀岡万夜の姿がある。

「犬塚くん……。わたしたち一体どうなっちゃうの？ ……助かるのかな？」

亀岡万夜の手前、弱音は吐きたくないという彼女の気持ちを察し、賢一は努めて穏やかな口調で答えた。

「大丈夫。きつとみんな無事に脱出できるから……。きつと……。守

「つてみせる」

力強い決意を示す賢一という言葉に、猫矢鞠子は小さく「……うん」と返したのだった。

〈兔沢赤音〉の場合。

約二十年前。

少女は大の動物好きだった。

将来は動物のお医者さんになるのだと、信じて疑わないほどに。

「あかねは、おっきくなったら動物のお医者さんになるの！ それでね、たくさんいのちを救ってあげるの！」

それが少女の口癖だった。

夢に満ち溢れた希望を叶えるために、少女は人一倍努力し、人一倍勉強に励んだ。

努力の甲斐あって、やがて少女は某有名医科大学に入学を果たした。

もうすぐ夢にまで見た獣医になれる。

毎日その事を考えるだけで幸せな気分になれた。

少女の幸せの形はそれだけに留まらなかった。

「あ、朱音。聞いたよ。先週からウサギを飼い始めたんだって？」

「うん、そうなのよ。これがもう可愛くって！」

「や〜ん。羨ましいなあ。私の家はペット禁止でさあ、ウサギは愚か、犬猫すら飼えないのよ〜。可愛そうだよな？ 慰めてくれてもいいよ？」

「あーはいはい。今度遊びに来てもいいよ。アタシのラビちゃん、見せてあげるから」

「ほんと！ やったあ。持つべきものは友達ね！ ありがとう、朱音。楽しみにしてるわ」

「うん。それじゃあ、またね」

大学生活にも慣れたこともあり、少女は念願だったウサギを飼うことにしたのだった。大学に行けば夢を叶えるための勉強があり、家に帰れば可愛いウサギが待っている。

それは少女にとって、この上ない幸福に充ち満ちた生活だった。

だが、そんな幸せな日々も、そう長くは続かなかった。
大学に入学して、半年ほどが経った頃。

「痛っ！」

いつも通り自室でウサギと戯れていた少女は、突然指先に鋭い痛みを覚えた。溢れ出た鮮血がフローリングに滴る。

「え……………？」

少女は自分の身に何が起きたのか理解出来なかった。

無惨に抉られた指先。

滴る鮮血。

眼前に佇むは、口元を赤く染めた一匹のウサギ……………。

心臓が脈打つ度に、指先の痛覚が刺激され、激しい痛みが引き起される。

徐々に熱を帯びていく指先を少女は呆然と見詰めていた。

「え……………？」

混乱ぶりを表すように、少女は同じ言葉を零す。

それでもなお、思考は纏まらず、意識は混濁を極めた。

噛まれた。

少女がそれを理解するまで要した時間は、およそ五分。

自身の身に起きたことを理解した瞬間……………。

「……………アハ」

少女の中で何かが壊れた。

数十年積み上げた信用を失うのは三秒とかからないという。

理屈はそれとやら変わらない。

大好きだったペットが、一瞬にして憎しみの対象となる。……………た

だ、それだけの話。

少女は生まれて今まで、動物に傷を負わされたことはなかった。

だからこそショックが大きかった。

むしろ、動物が人間を傷つけるなんて考えてもみなかった。

だからこそ、少女の中で何かが壊れた。

いままでひたむきに注いできた愛情を憎しみに変えて……

少女はほぼ無意識に、実習用のジュラルミンケースから解剖に使う刃物を取り出し……

怒りと憎しみの赴くままに……

目の前の獲物を解剖してのけたのだった。

「うふっ……………うふふ」

瞬く間に室内は噎せ返るほどの血と臓物の臭いに満たされた。

少女の部屋は手狭なワンルーム。

フローリングはもとより、家具や家電……純白が自慢だったベッドまでもが、真っ赤に染め上げられた。

真っ赤になった部屋で少女は薄ら笑いを浮かべ、ただ佇むばかり。少女の部屋に残されたのは、目を背けたくなるような凄惨な光景だけだった……。

後日。大学では少女の噂で持ちきりだった。

昨日の夜中、ゴミ捨て場に佇む血まみれの少女を見かけた……とか。

まるで人が変わったようだ……などと。

そんな薄気味悪い雰囲気を感じてか、学友たちは一切、少女に近付こうとはしなくなった。

昨日、遊ぶ約束をしたあの友人ですら、少女を避けるようになってた。

そして少女はますます、歪んだ道へと迷い込んでいくのだった。

地獄に渦巻く猜疑心。

「あつた。これだ」

案内図通りに廊下を進んだ賢一たちは、無事《見張室》から《中央ホール》の鍵を見つける事が出来た。《見張室》というからには誰かいるかと警戒に警戒を重ねたものの、結果的にはまったくの徒労に終わったのだった。

あまりにもあつさり入手出来たことで、賢一は何度手の中の鍵を確かめてみても、どこか実感が感じられずにいた。

「案外あつさり見つかったな」

賢一の心境を、羽鳥翔吾が的確に代弁する。

「……ええ、そうですね。それでもこれが目当ての鍵であることに変わりはありません……。戻って……先へ進みましょう」

「うむ。賢一さんの言う通りじゃ。僕らには立ち止まるという選択肢は……っ!? ……かはっ……ごほっ……!!」

「鼠入さん!？」

突然苦しそくに咳き込む鼠入忠治に、賢一は即座に注意を向けた。同時に思い出す。確かさつきも同じように苦しんでいたことを。

脳裏をよぎるのは今し方見た忠告文。その中に変死したメンバーも居たと記されていた。言い知れぬ不安が鎌首をもたげる。

「鼠入さん!？ 大丈夫ですか!？ ……そうだ、兔沢さんに何か薬を調合してもらえば……!!」

賢一の動揺は誰の目にも明らかだった。それも無理からぬこと。

賢一はいつしか、鼠入忠治を心の拠り所にしてきたのだ。不安と恐怖に押し潰されそうな状況下において、毅然とした態度で振る舞う彼の姿は、賢一に多大な勇気を与えて居た。そんな彼の身に何かあればと考えるだけで、そこら中に蔓延る闇に呑み込まれそうな錯覚すら覚えるのだった。

賢一の不安を察してか、鼠入忠治は穏やかな表情を浮かべ、ゆっ

くりと口を開いた。

「心配無用じゃ、賢一くん。ちいとばかり、急な状況の変化に適應出来なかつただけじゃ。直に良くなるうて。その気持ちだけ貰っておくわい」

「……そうですか。……でも、無理はしないでくださいね。辛くなつたら遠慮なく言つて下さい」

「うむ。その時はお言葉に甘えて、そうさせてもらおうかのう。…

…賢一くんこそ……体調は大丈夫かの？」

「ええ……僕は平気です。それより今は、鼠入さん自身のことを心配してください……！」

「ほつほ……それはもつともじゃ」

束の間の静寂が降りる。

思索に耽る間も無く、次の声が上がった。

「話は済んだか？ もたもたしてる暇はねえ……さつさと動くぜ」

羽鳥翔吾の号令に、誰もが神妙な面持ちで頷く。

《見張室》の向かいには三畳ほどの倉庫があつた。何か武器になるような物はないかと期待したが、そう都合よくはいかなかつた。手に入ったのはメートル半ほどの角材のみ。化け物と戦うにはあまりにも心許無い得物である。だが文句も言つていられない。角材があつただけでも喜ぶべき状況なのだ。

賢一は頼りない角材を見詰めながら、まるでそれが自分たちの置かれている状況を語っているように思えた。覆しようのない戦力差をまざまざと見せつけられたような気がして、やり場のない虚しさにうちひしがれるのだった。

《倉庫》を後にした賢一たちは、元来た道を戻る事にした。階段横の曲がり角を左折しようとした、次の瞬間。

「待て！ 音を立てるな」

「！」

不意に、鋭く抑えた声が飛んだ。賢一たちは咄嗟に身構え、羽鳥翔吾の言葉を待つ。

「……居る……奴だ」

特殊部隊さながらの格好で壁に張り付き、曲がり角の先を窺いつつ呟いた。

場に緊張が走る。

「……どうするんですか？ 何か作戦でも？」

「んなもんねえよ。……何とか気付かれずに一階まで下りるしかないだろ。俺らに与えられた得物は角材これしかねんだからよオ」

「……ですよね」

言いながら、物音を立てないように細心の注意を払い、賢一は廊下の角から様子を窺った。入れ替わる形で羽鳥翔吾が後退する。

すると暗がりの先に、何やら巨大な影がのそのそと動いているのが確かに見えた。あんな遠くの気配を、これほどの距離から察知するなんてと、内心で羽鳥翔吾の能力を評していた、まさにその時。

「~~~~~ツツ!？」

賢一は声にならない悲鳴を上げて、反射的に首を引っ込めた。

「どうした？」

羽鳥翔吾の問い掛けに、賢一は蒼褪めた顔で答えた。

「……見つけた」

「……………え？」

羽鳥翔吾はその意味を理解するまで数秒要した。冗談じゃねえという面持ちで、代わりに様子を窺うと。

「!? やべえ、マジだ! こっちに歩いて来てるぞ……………!

逃げろ!

「逃げるって…………どこへ!？」

「俺に聞くな…………時間を稼げりやどこだっついていい……………!」

言いながら辺りに視線を巡らして、羽鳥翔吾は逃走経路を黙考する。同じように逃げ道を探していた賢一は、不意にあることに気が付き素早く口を開いた。

「階段! 確かこの下は足跡のあった廊下…………そこに扉があったはず…………! それが開けば…………《中央ホール》へ回れるかも知れ

ない……！」

賢一の描いた絵図に、七人全員が固唾を呑む。それは、賢一の絵図が一種の賭けだと理解している明白な証拠。もし下りた先が行き止まりだったら……まさに袋のネズミだ。抵抗する余地もなく殺されてしまうだろう。しかし、そうこうしている内にも異形は近付いて来ている。躊躇っている余裕などありはしなかった。

「くそっ……！ 鍵が外せなきゃ蹴破るまでだ！ ……ここにいる方がやべえ……！ 逃げるぞ！ 階段まで走れ！」

それを合図に全員が一斉に駆け出す。背中に異形の咆哮を聞きながら、絶る思いで走った。

階段を下りる間際、賢一は懐しい声を聞いたような気がした。

遊ぼう。

「……え？」

思わず振り返ってみても、視線の先には大斧を持って迫ってくる異形の姿のみ。声の主の姿など、どこにも見当たらなかった。

「犬塚くん……早く……こっちよ！」

「賢一お兄ちゃん……はやく……はやく……！」

猫矢鞠子と亀岡万夜の切羽詰まった声に、ようやく賢一は我に返り再び走り出す。そしてその声の真意に気付くこともなく賢一は階段を駆け下りるのだった。

「なにしてんだ、犬塚！ 早く来い！」

「ああ……悪い」

前方から羽鳥翔吾の叫びが反響する中、八人は一階へと下り立った。

《一階・叫喚の間》

「なんだよ……こっち」

「不気味な声がある……まるで亡者の怨念みたいなの……」

「やだ……怖い」

賢一たちが足を踏み入れた部屋は、四方を石壁に囲まれた空間だった。光源にも乏しく、裸電球がひとつあるだけである。心なしか

肌寒さすら感じる空間。

だが、それだけなら今までとなんら大差はない。賢一たちの心に恐怖を植え付けているのはもっと別の要因にほかならなかった。

すなわち、耳に纏わり付く程に不気味な声と壁に浮き出た染みだった。それは単なる染みではない……人が泣き喚いている顔に見えるような、なんとも不気味な染み。亀岡万夜を始めとする女性陣はもとより、いつも気丈に振る舞っている羽鳥翔吾ですら、怖れを隠せないといった様子である。こんな空間にいたら、五分と経たずに精神が崩壊しかねない……そう思わせるほどの狂気に満ちた部屋。

「扉がふたつあるな……どっちだ？」

長居はしたくない気持ちも露わに、羽鳥翔吾が問うた。

「方角からいつてこっちですね」

「そうか」

聞くや否や、羽鳥翔吾は扉に手を掛けた。が、運の悪いことに扉はビクともしなかった。扉は完全鍵式で、どちら側からも鍵なしでは解錠出来ない仕組みになっていた。予想通りの事態に重苦しい沈黙が降りる。

「……だせえ」

不意に聞き慣れない声が上がった。

羽鳥翔吾は声の主 鰐淵牙楼に対し突っかかる。

「てめえ……今なんか言ったか？」

「お前らの言う通り着いて来たらこのザマだ。責任取ってよ」

今までほぼだんまりを決め込んでいた鰐淵牙楼は、不信感も露わに、周りに 主に賢一や羽鳥翔吾 を責める。

「責任つてお前……この状況で責任もへったくれもねえだろうが！俺たちの判断が気に食わねえってんなら、てめえ独りで動きゃいいだけの話だろ！勝手に他人の所為にしてんじゃねえ！」

思い通りにならないもどかさから苛立ちが募っていたのか、羽鳥翔吾は声を荒げて反論した。狂気に吞まれない為に攻撃的にならざるを得ない。それを受けて相手もさらに攻撃的になる。異常な環

境が生み出した悪循環に羽鳥翔吾はすっかり嵌まり込んでいた。

二人のやりとりを傍観しながら、賢一は既視感を覚えていた。

(ああ……そうか。これは……)

あのキヤスターの時と同じなんだ。

どこか諦観にも似た眼差しを浮かべ、賢一は小さくかぶりを振った。

(ダメだ……止めないと……。もうこれ以上、唾み合っでの分裂は避けなきゃ……)

たとえひとりひとりの力が無力に等しくとも、力を合わせれば切り抜けられる可能性もある。賢一はこの絶望的な状況下で、その希望に縋ることで精神を保っていた。

「羽鳥サン……いいでしょう……もうそのくらいで。相手は子供ですよ？ それに牙楼くんの言い分も判らなくはない……僕たちにも責任はある」

「子供だからなんだってんだ！？ こんな状況で助かりたかったら何より自分を優先するしかねえんだ！ 子供だからって何でもしてもらえらると思っただら大間違いだぞ！？」

大人気なく激昂する羽鳥翔吾をみて、賢一は痛感した。この人は根本的などころで価値観が食い違っている……と。

そう考えるともう、羽鳥翔吾を説得しようとする気は跡形もなく消え失せていた。

自分が何とかするしかない。

その思いが今後の賢一を突き動かすこととなるのだった。

「判りました。……とにかく今は《中央ホール》へ戻る方法を考えましょう。……幸い、あの化け物はもう追って来ていないようですし……」

「ああ……そうだな。……くそっ！ 開けよ、クソが！」

諦め悪く扉を蹴りつけながら返事をする。相当苛立っている様子である。

「ねえ……犬塚くん。……奥にも扉があるよ？」

「あ……そうだった。よし……先に奥の部屋を調べよう」

猫矢鞠子の提案に、二つ返事をした途端、冷やかな声が賢一の
耳朵を叩いた。

「また独断か……もう好きにすればいい」

それはわざと賢一に聞こえる声量で発した、鰐淵牙楼の独白。

「がろーくん……賢一お兄ちゃんはみんなのためにがんばってくれ
てるんだよ……そんな言い方しちゃだめだよ……」

亀岡万夜が今にも泣きそうな顔で精一杯、鰐淵牙楼を諫める。そ
んな健気な姿に、賢一は少し気持ちが軽くなったような気がした。

……この子の為にも、と。

だが、鰐淵牙楼はにべもなく返す。

「オレはあんたに命を預けた覚えはない……利用価値がないと判っ
たらそこまでオレは独りで脱出してみせる」

数拍の間を開けて、鰐淵牙楼は言葉を継ぐ。

「オレは……弱者ばかりで群れ合う気は毛頭ない」

「……」

取り付く島もない言い草に、賢一は返す言葉もなかった。

ただ、鰐淵牙楼が吐いた？弱者？という言葉に、深い闇を垣間見
たような気がしてならなかったのだった。

沈黙が支配する中、賢一はもう一方の扉へと近付き、皆の顔をぐ
るりと見渡して言った。

「……開けるよ」

「うん……！ 気をつけてね、犬塚くん」

全員が見詰める中、賢一は扉に手を掛け、一気に開いた。

「……っ！」

瞬間、賢一は目を見張り息を呑んだ。

《一階・談話室》

「……ふう……取り敢えず化け物はいないみたいだな」

大きく溜息をつき、安堵に胸を撫で下ろした。そこは四畳ほどの
手狭な部屋だった。

「そうね……。それにしてもここは何なのかしら……？」

猫矢鞠子が怪訝な表情をするのも無理はなかった。部屋の内装があまりにも異質だったのだ。見るからに上質そうな机と椅子、さらにはグラスシエルフまで完備されていた。それはまるで、豪華な屋敷の一室のような内装だった。

明らかに他の部屋とは趣の違う光景に、賢一たちはただただ戸惑うばかり。

「……戻るしかなさそうね」

特にこれといって手掛かりがなさそうな雰囲気に、猫矢鞠子が踵を返した。賢一もそれに倣って部屋の扉を閉めようとした時。

「待って！ ……机の上にノートがある……！」

誰の反応も待たないうちに、賢一はノートを手に取り、ページに視線を走らせた。思わず内容に顔を顰める。ノートには手掛かりどころか、予想通りの文章が綴られていたのだった。

月×日【談話記録 第三七五六四号】

やった！ キリ番だ！ 今度、施設長にキリ番賞をもらわないとな！

ほんと、この部屋は特等席だぜ。壁の向こうで処理される奴らの断末魔こえの声を余すことなく堪能できるんだからよオ！ 奴らの断末魔を聴きながら飲む一杯は格別だぜ。

ひひひ。もっと泣け喚け！ イイ声ですよ！ くひひひ。

「おい、犬塚。何か手掛かりはあったか？」

背後から問い掛けてくる羽鳥翔吾の声に、賢一はかぶりを振って、おおよその内容を説明した。

「くそっ……！　なんだよ、それ……！　つまり俺たちは完全に……！！」

羽鳥翔吾は、その先に続く言葉を呑み込んだ。口に出せばそれがまた、無用な恐怖を煽ることになると考えた結果なのだろう。唇を噛んで壁に拳を打ち付ける。

賢一の説明を耳にしてかどうかは定かではないが、隣の部屋から誰かの泣き声が聞こえて来た。様子を確かめようと、賢一が部屋を出た……まさにその時。

「あー五月蠅いったらないねえ、この子は！　いつまでも泣いてんじゃないよ！」

パシン！　と、渴いた音が賢一たちの耳朵を叩いた。虫賀奏が亀岡万夜を引っ叩いた音だ。はたかれたことでより一層泣きじゃくる亀岡万夜は、まるで呪文のように「怖い」を繰り返すばかり。その態度に逆上した虫賀奏が、再び右手を振り上げる。

「この……っ！」
だが、平手打ちが放たれるよりわずかに早く、猫矢鞠子が間に割って入った。

「なにしてるんですか……！？　やめてください……！　こんな小さい子に手をあげるなんて酷いです……！」

「なんだいあんた……邪魔しないでおくれよ。……見りゃわかるでしょう。この子が泣いて五月蠅いから叱ってやってるんじゃないかい。お陰で耳鳴りがするさね」

「なっ……！？」

虫賀奏の冷酷な一言に、猫矢鞠子は絶句した。

「あ……当たり前じゃない！　この子はまだ小学二年生なのよ！？　こんな状況じゃ泣いて当然だわ！　どうしてそれを責めるの？」

「……その子が弱いからよ」

「……確かにこの子は弱いわ。だって子供だもの。それでも泣いたっていいじゃない。この子だって弱いなりに頑張ってるの！　弱いことは決して恥ずべき事ではないわ！　気持ちの持ち方ひとつでな

んともなるのよ!」

「なによ、あんた。このあたしに説教する気!？」

「そんな気はないわ。ただ、子供に八つ当たりするのは大人のすることじゃないって言うてるだけよ」

「あゝ五月蠅い五月蠅い……やだよお、これだから小娘は……」

虫賀奏は自分のことを棚にあげて、猫矢鞠子を露骨に疎んじた。

「いい加減にせんか!」

鼠入忠治の一喝で虫賀奏はバツが悪そうに口を噤んだ。

猫矢鞠子と虫賀奏……両者の間に明白な隔たりが生じてしまったのを、賢一は沈痛な面持ちで見詰めていた。争い合う二人の横でもうひとり。何かを訴え掛けるような眼差しで見詰める人影があった。鰐淵牙楼である。

だがこの時、少年の様子を気にする者はただのひとりもいなかった。

やがて亀岡万夜が泣き止んだ頃、タイミングを計っていたかのように羽鳥翔吾が話の口火を切った。

「……先へ進むには二階を迂回しなきゃなんねえのか……」

二階という単語にざわめきが広がった。

またあの化け物がいる廊下を通らないといけないのか……。誰も明言は避けたが、引つ掛かるところは同じという様子である。先の方景を思い出したのか、亀岡万夜が再び噉り泣き出した。虫賀奏は憎たらしそうに睨み付けるだけで、口を開こうとはしない。賢一は胸を撫で下ろした。誰もが二の足を踏む中、行動を促したのは賢一だった。

「……動こう。いつまでもここにどまっているワケにはいかない……皆で無事脱出するためにも、脱出口を見つけ出さなきゃ!」

「そうね……犬塚くんの言う通りよ。……動きましょ」

猫矢鞠子の同意を得て、賢一は救われた気持ちになった。

毅然と振る舞ってみたものの、今の決意は半ば暗示。自分自身を鼓舞するための言葉だった部分が強い。賢一の奮起は功を奏し、徐

々に共感を呼び起こしていった。

猫矢鞠子を皮切りに、鼠入忠治、亀岡万夜、魚成海斗と続く。羽鳥翔吾は舌打ちをしながらも頷いたが、虫賀奏は一切の反応を示さなかった。鰐淵牙楼もまた無言だったが、彼は何かを考えている風だった。

「……なるべく周りに注意しながら進もう……！」

心許無い作戦を頼りに、賢一たちは再び二階へと進入した。

《二階・血糊のある回廊》

「……どうですか？」

「大丈夫……今は気配を感じない。……恐らく移動したんだろうよ」

「……進みましょう。……左へ」

感覚が鋭い羽鳥翔吾を先頭に、賢一たちは恐る恐る廊下を進んで行く。

「おい……本当にこつちでいいのかよ？ さつき通った道を戻る方がよくないか？」

「……案内図を見る限り、この廊下は回廊のようです。最悪、元の階段に辿り着けます」

「そうは言ってもよオ……。第一その案内図……百パー信用出来る代物なのかよ……」

「……それは判りません。でも、もしかしたら新しい手掛かりがあるかも知れませんか……」

「……どうだかな。リスクの方がデカそうに思えるぜ」

賢一たちは今、往路と逆側の廊下を歩いている。というのも、賢一から借りた案内図を眺めていた猫矢鞠子が「この先から階繋がりで移動出来るかも」と言ったから。その言葉に賢一が、回廊である以上、どちらから行っても大差ないと判断した結果であった。

「見えたぜ……扉。……それも二つだ」

異形に遭遇することなく、賢一たちは目当ての扉まで辿り着いた。一縷の期待を寄せて扉に手を掛けてみるが……。

「……ダメだ。鍵が掛かってやがる」

「……仕方ないですね。このまま階段を下りて、一階へ向かいましよう」

皆を誘導しようと振り返った瞬間、賢一は凍り付いた。

「なっ……………!?!」

AAAAAAAAAZOOOOOOOOOOBOOOOOOOO
OOOOOOOO!

『……………ツ!?!』

一体どこに潜んでいたというのか……まるで犬のようによだれを溢れさせた異形が賢一たちの背後に佇んでいたのだった。賢一の異変に気付いた面々も背後を確認するや否や、声にならない悲鳴を上げた。

気を付ける!

賢一がそう叫ぶより早く、動く影があった。

「あんた! 鍵をよこしな!」

「マジ勘弁だぜ……………!」

「ひ……………ひいいいい……………!」

それは虫賀奏、羽鳥翔吾、魚成海斗の三名。どう切り抜けるか思考を巡らす賢一たちを押しつけた拳げ句、か弱い女の子 亀岡万夜と猫矢鞠子を突き飛ばしながら、我先にと階段を目指して走り去ってしまった。それもちゃっかりと賢一から鍵を奪った上で。

「痛いじゃないのよ、もう! 万夜ちゃん大丈夫?」

「……………うん。ちょっと……………びっくりした……………だけだから」

泣くまいと気丈に振る舞う亀岡万夜だが、その表情は蒼白に染まっている。尋常じゃない怯え振りに、賢一は言い知れない胸騒ぎを覚えた。

残されたのは賢一と猫矢鞠子、亀岡万夜、鰐淵牙楼、鼠入忠治の五名となった。

「あいつら……………!」

それでも人間か! と、叫びたくなる怒りの衝動を抑え込み、賢一は思考を切り替える。問題はこの状況をいかにして切り抜けるか

……。賢一の武器は頼りない角材のみ。他にないのかと黙考し、数拍の間を置き、賢一はハツとして老爺の名を呼んだ。

「鼠入さん……！ 前に使った薬品……まだありますか？」

鼠入忠治は懐をさぐりながら答える。

「ああ……まだ幾つかのこつとる……！」

「よし……それならなんとか……！」

気持ちを強く持ち、賢一は異形と対峙。タイミングを見計らう。

AAAAAAAAAZOOOOOOOOOOBOOOOOOOO
OOOOOOOOO！

建物全体を震わしかねないほどの咆哮を上げ、異形は賢一を睥睨する。

「鼠入さん！」

動作の起こりに被せるように、賢一は素早く合図を送った。応じて鼠入忠治は、薬瓶を異形に投げつけた。

GYAAAAAAAAAAAAAAAAA！

劈くような悲鳴を上げて、異形は苦悶に身を擦る。

「今の内に……！ さあ、早く！」

賢一の号令で五人は一斉に駆け出す。異形が再び動き出す前にこの場を離れようと、必死に走った。

「きゃ……！」

「……万夜ちゃん！？」「」

猫矢鞠子に手を引かれながら走っていた亀岡万夜が足をもつれさせて転倒した。賢一たちは反射的に足を止める。

「鼠入さんは先に行ってください……ここは僕たちでなんとかします……！」

最高齢である鼠入忠治を気遣ったことだった。彼自身は助太刀したいという面持ちこそ浮かべていたが、度重なる疾走のお陰で、今や肩で息をする始末。足手纏いになると判っているからこそ、この場は立ち去るしかない。彼の表情はそう語っているようだった。

「……すまない、賢一くん。……死んではならんぞ」

「もちろん、そのつもりはありません」

短い言葉を交わし、鼠入忠治は一足先に階下へと向かって行った。
「ああああ……ああああ……！」

間近に迫ってくる異形を前に、亀岡万夜は恐怖に染まった声を漏らすばかり。猫矢鞠子はすぐにでも助けようと身構えてはいるものの、異形の手には鈍く光る大斧のプレッシャーにあてられ、思うように動けないでいた。

賢一たちが手を拱いている間も、異形は一步、また一步と、亀岡万夜へと迫る。

「ああああ……ああああ……」

必死に後退りをしようとする亀岡万夜だが、それもままならない。遂には少女が座り込んでいる床に、水溜まりが出現した。

(失………ッ！)

その水溜まりの正体に気付き、賢一は思わず顔を顰めた。あまりにも明確な恐怖の顕れに、賢一は他人事ならない危機感を覚えずにはいられなかった。

「くっ………！」

打開策が思い浮かばない現状に歯噛みしながら、賢一はただただ異形を見据えるばかり。

やがて亀岡万夜との距離が限りなくゼロになったかと思うと、異形はおもむろに大斧を振り翳した。

「万夜！」

と、不意に誰かが叫んだ。

しかし、賢一には声の主を特定している暇はなかった。最悪の事態が脳裏を過ぎった賢一は、危険を顧みずに亀岡万夜を救いだそうと、半ば無意識に床を蹴った。だが。

「な………に………！？」

予期しなかった一撃が賢一を襲った。幸い、動き出した直後だった為、辛うじて回避出来たにすぎなかった。反応が少しでも遅れていたら、脳天から真っ二つにされていたかもしれないのだ。異常な

だが、賢一の予想に反し、驚くべき現象が起こる。

Kuuuuun

今まさに大斧を振り下ろそうとしていた異形は、しかし、どこか哀しげな鳴き声を上げると、そのまま踵を返し去っていったのだ。た。

「え……？」

何が起こったのか理解出来ない賢一は、間の抜けた声を零す。

「ほんとにどっか行っちゃった……」

張り詰めていた緊張感はどこへやら……猫矢鞠子は啞然とした面持ちでそう呟いた。

「……でもまあ……とにかく助かったんだ。……今の内にみんなと合流しよう」

「うん……そうだね」

異形が去ったからといって安心してられない。そう考えた賢一は、すぐさま行動を開始した。

「万夜ちゃん、大丈夫？ 怖かったね。でももう大丈夫だよ。さ、行こう」

そつと手を差し伸べる賢一。

だが、亀岡万夜は俯いて震えたまま、一向に顔を上げようとしな

い。どうしたの、と声を掛けようとして、賢一は水溜まりの一件を思い出した。

亀岡万夜は今、恐怖で震えているのではなかった。水溜まりを作ってしまったことに対する羞恥心に震えていたのだった。そう察した賢一は、何も言わず、亀岡万夜を抱き上げた。衣服に染みこんだ水分が滴り落ちる。

「お……おにいちゃん……ダメだよ……。……万夜……汚いからあ……ふえーん」

顔を赤らめながら、消え入りそうな声で切々と訴えかける亀岡万夜。そんな少女に賢一は優しく微笑みを浮かべ、「汚くなんかない

よ」と返し、言葉を継いだ。

「よく泣かなかったね。偉いぞ、万夜ちゃん」

「でも……万夜は……万夜は……ふえーん」

何か言いたそうにしながらも、結局言えないで終わった亀岡万夜の頭を、賢一はそつと撫でてやる。

「大丈夫。大丈夫だから……ね？」

「……うん」

そこでようやく、少女に笑顔が戻った。

亀岡万夜を抱えながら、賢一は鰐淵牙楼の容態を確認する。

「牙楼くん……大丈夫かい？　ところでキミはさつき」

賢一が言い終わるより早く、鰐淵牙楼が口を開いた。

「お前……それ以上喋るなよ……！」

噛みつかんばかりの勢いで、鰐淵牙楼は賢一に釘を刺した。逆にその反応が賢一の中にあつた引つ掛かりを明確なものにすることになった。もはや確かめる必要もなくなった為、賢一はそれ以上の追及は口にしなかった。ただ、そういう事なんだなと微笑むに留まった。

「とにかく傷の手当てをしなきゃ……。みんなとの合流を急ごう……！」

賢一の号令に、それぞれが同意を示す。

四人が先を急ぐ中、賢一的首輪のランプがまたひとつ消えていることに気付く者はいなかった。

点るランプはあとひとつ……！！

〈羽鳥翔吾〉の場合。

約一六年前、青年は自衛隊養成所で日々訓練に明け暮れていた。

「おい、翔吾。お前また射撃演習でトップ獲ったんだってな！ 上げえなお前」

青年が宿舍の食堂で夕食を摂っていると、不意にそんな言葉を掛けられた。やや面倒臭そうに視線を振ると、そこには同期で入った男がいた。マサと呼ばれている男だっけど、青年は内心で呟いた。

「……なんだお前か」

にべもなく返して、青年は再び箸を動かし始める。青年の素っ気ない態度にも嫌な顔をすることなく、マサは向かいの席に腰を下ろした。

「なんだとは随分とご挨拶じゃねえの。人がわざわざこうして、お前の成績を讃えに来てやってるとこのによオ」

「そうか。それはわざわざすまなかったな。素直に受け取っておくとしよう」

「……。どうしたの、お前？ なんだか随分とテンション低いじゃねえの？ もうすぐ任期も終わるんだし、そんなしけたツラしてるど損するぜ？」

マサの気遣いに、しかし青年は聞く耳持たずといった様子で淡々と返した。

「関係ないな、そんなこと。なぜなら俺は今回の任期終了でここを辞めるつもりだからな」

「え？ お前辞めちゃうの？ どうして？ 何かやりたいことでも見つかったのか？」

「いや……そうじゃねえ。……そうじゃねえけど、ここに居るといつまで経っても試せねえ気がしてな……」

「試す？ 試すって射撃の腕をか？」

マサは半ば冗談で言ったが、まさかという思いも捨てきれない眼

差しを湛えていた。

重たい沈黙の後に、青年はおもむろに口を開いた。

「……まあ……そういうことだ」

「……お前……それ……本気で言ってるのか？ いいか？ 翔吾。

この国は基本的には平和な国なんだ。それこそ競技目的以外に射撃の腕なんて必要ないくらいにな。だが、それを試す機会を求めるということはつまり、争いを求めるといふことと一緒になんだぞ！？

オレたちは殺戮部隊じゃない……自衛隊なんだ……！ そのことを忘れるな……！」

真剣な面持ちで一気に捲くし立てるマサの言葉にも、青年はどこか他人事のような態度でいる。これにはマサも真剣に話す気も失せたのか、一笑に付して言葉を継いだ。

「またお前に嵌められたよ。お前はいつだって真面目な顔してとんでもないことを言い出すからな。……今回も冗談なんだろ？ な？」

冷や汗を浮かべ、尋ねてくる仲間を一瞥して、青年は億劫そうに答えた。

「……ああ……冗談だ」

その瞬間、マサは脱力して、机に突っ伏したのだった。

「よし、翔吾！ 射撃場へ行って自主練しようぜ！ 今日こそお前に勝ってやるよ！」

「……まあ無理だろうな」

「さすが首席。言うことが違うねえ……！」

マサ自身もある程度射撃の腕には自負があるのか、こめかみに青筋が浮かんでいる。そんなことなどお構いなしに、青年は空っぽになった食器を持って立ち上がり、返事をした。

「食後の余興だ……少しなら付き合ってやる」

「はっ！ 後で吠え面をかくなよ！」

その半年後。青年は予告通り自衛隊を辞めた。最後まで首席を保ち続けたまま……。

マサに言った通り、青年には特に目的はなかった。

ただ日々の糧を得るためにアルバイトをし、安穏な暮らしを送る毎日が続いた。

自衛隊を辞めて身近に友達らしい友達もいなくなった青年は、心のどこかで寂しさを覚えていた。そのたびに玩具屋へ行き、ガス式のエアガンを買っては、近くの空き地で空き缶を打ち倒して紛らわしていた。銃を手にしていれば自衛隊の頃の感覚が戻ってくるような気がしたのだ。だがそれも、一時の慰めにしかならなかった。

そんな刺激のない日々を一年ほど続けたある日。

青年はとあるペットショップで、一羽のカナリアを見かけたのだ。つた。キレイな声で鳴くカナリアは、荒みきっていた青年の心に優しく響き、潤いをもたらした。

その日以降、青年のカナリアと過ごす日々が始まった。

独り身の青年にとって、カナリアは日増しにかけがえのない存在になっていった。

それまで億劫で仕方なかったアルバイトにも意欲的になり、心なしか気分が弾んでいる様子であった。

最初の内はなんら問題はなかった。

だが、さらに一年が経過した頃から、雲行きは怪しくなっていた。だが、さらに一年が経過した頃から、雲行きは怪しくなっていた。「お前はいいよなあ……自由に飛べる翼があつてよオ……」

青年は頻繁にそんな独り言を口にするようになっていた。その思いは次第にエスカレートし、やがて歪んだ思考へと辿り着く。

手に入らないなら、壊してしまえばいいじゃないか

青年の中で悪魔が囁いた。

その誘惑は青年の中の欲望と強く結びつき、青年は悪魔の虜となった。

自衛隊に居た頃に入手した、裏ルートに手を染めてまで実銃を調達したのだった。

そして最初のターゲットとして選んだのは、一年以上共に暮らしてきたあのカナリアだった。

それは青年が、命の搾取という快樂の味を覚えてしまった瞬間で

あつた。

自身の腕を試す機会を得た青年は、以降十数年もの間、過ちを繰り返し続けるのだった。

処理物の再利用における試験的運用。

「扉が開いてる……」

依然として異形の影に怯えながらも賢一たちは、羽鳥翔吾たちとの合流を急ぎ《中央ホール》まで戻って来ていた。そこで西側の扉が開いていることに気付いたところだ。

「みんなもう先に行っちゃったみたいだね」

「ああ……。僕たちも急ごう」

「うん……！」

《中央ホール》を後にしようとした矢先、賢一は部屋の異変に気付いた。

「あの水槽……割れてる。僕たちがいない間に、ここで何かあったのかな？」

「水槽？ あ、ほんとだ。酷い……ぐちゃぐちゃだね」

元々水槽に満たされていたヘッドロのような液体が、床一面に広がり、取り返しよのない惨状を呈していた。しかし、この場で考えていても埒があかないと判断した賢一は、改めて扉の先へと進入することにした。

《一階・T字型廊下》

心なしに肌寒い空気で満たされた廊下は薄暗く、今にも何かが飛び出して来そうな雰囲気には漂わせていた。

入ってすぐの角を曲がり、その左手側に、離れて二つの扉が見て取れた。賢一は手近にある扉に手を掛け、すんなり開いた事に驚いた。

だがその驚きが外的外れな事に思い至る。

羽鳥翔吾たちの姿が廊下にない以上、この二つの扉のどちらから彼らは移動した事になるからだ。扉は二つ。仮にどちらかに鍵が掛かっていても、五割の確率で開く道理となる。

(相当疲れてるんだな……)

半ば自嘲気味に呟き、賢一は猫矢鞠子たちに合図をして、さらに奥へと踏み込んだ。

背後で蝶番が錆び付いた音を響かせ、愛想の欠片もない鉄扉が閉まった。

入った先もまた廊下のようだった。眼前に伸びる廊下が数メートル先で右手に折れている気がしたが、相変わらず薄暗い為、判然としなかった。

薄闇に目を凝らす賢一に、猫矢鞠子が声を掛ける。

「犬塚くん。こっちにエレベーターがあるよ」

言われるがままに賢一はエレベーターへと近付いて行く。

「ほんとだ……。二階で止まってるみたいだな」

呟いてすぐ、賢一は手元のスイッチを押して、エレベーターを呼び寄せた。

降りて来たエレベーターは、百貨店などで見かける上品なそれとは外見がまったく異なる、檻のような造りの代物だった。

「……みんなこれに乗って行ったのかな？」

猫矢鞠子もエレベーターの不気味さを感じたのか、不安げな面持ちを浮かべている。

「……多分……。としか言い様がないけどね」

警戒心を緩める事なく、賢一は答えた。

空っぽのエレベーターを見詰め、やがて言葉を継ぐ。

「昇ろう……。みんなが居なかったら戻ればいいんだから」

「そうね。早く牙楼くんの傷も手当てしないといけないし……！」

「よし……。行こう」

気持ちを強く持ち、賢一たちはエレベーターへと乗り込み、二階のボタンを押した。

無骨な駆動音を響かせて、エレベーターは賢一たちを二階へと運んだ。

間もなくエレベーターは停止。鉄柵がガチャガチャとやかましく開いた。

「あそこから出られそうだ」

賢一はエレベーターのすぐ近くにある扉を認めて、猫矢鞠子らの注意を促した。他に扉もない手狭な空間ということもあり、賢一は迷わず扉を開け放った。

《二階・食堂》

「あ……………」

部屋の光景を目にした瞬間、賢一は思わず叫びそうになった。食堂のような装いの部屋に、羽鳥翔吾たちの姿があったからだ。先刻、皆と分かれて単独《中央ホール》に残った兎沢朱音の姿も確認出来た。

賢一たちの気配に気付いた羽鳥翔吾が、白々しい声を掛けて来た。

「よオ……………無事だったか。心配してたんだぜ」

「……………」

賢一は真つ先に彼に掴み掛かり、さっきの行動を咎めてやりたい衝動に駆られたが、そんな事で溝を深めてもなんら利点はない。そう考え、齒を食いしばって怒りを抑え込んだ。

「……………羽鳥サン達こそ……………無事のようにです」

掴み掛からない代わりに、賢一はたっぷりの皮肉を込めてそう返した。

「ああ、よかったよ。マジで」

頭を掻きながら答える彼はいたって真顔だった。皮肉が伝わらなかつた様子。賢一は彼の神経の鈍さに内心で呆れ果てていた。

「賢一くん……………！ すまなかつたな。ともあれ、四人とも無事でないよりじゃ……………気分はどうじゃ？ 違和感はないかね？」

羽鳥翔吾と違い、心から心配していたと判る鼠入忠治の労いに、賢一は不意に口許を綻ばした。

「あ……………はい。何とか……………大丈夫だと思います」

短く答えて、賢一は部屋の中を見渡した。第一印象通りそこは食堂のようだった。

何気なく見上げた天井には豪華なシャンデリアが吊り下げられて

おり、その威圧感に賢一は息を飲んだ。

一見して何の変哲もない設えに、賢一は言い知れない気味悪さを感じていたのだった。

「犬塚くん……！」

猫矢鞠子の切羽詰まった声に、賢一は重要な事を思い出した。

「 兎沢さん！ 牙楼くんを手当てしてやって下さい……！ 化け物にやられて、足を怪我したんです……！」

「んー」

それまで退屈そうに指先で髪を弄んでいた兎沢朱音は、相変わらず掴み所のない微笑を浮かべ、視線だけをよこした。怪我の具合を目診でもしているのか、唇が微かに動いていた。程なくして白衣のポケットから薬瓶を取り出して言った。

「 いいわよオ。じゃア、そのテーブルに乗せてくれるかしらア」

猫矢鞠子は彼女の指示通りに鰐淵牙楼をテーブルに乗せた。

「 牙楼くん、大丈夫だからね。今、朱音お姉ちゃんが手当てしてくれるから」

「……」

鰐淵牙楼はまったく反応を示さない。俯いたまま、じつと何かに堪えている……そんな様子。ただ痛みを我慢しているのだと判断したのか、猫矢鞠子は手当てを兎沢朱音に任せ、次の用事に取り掛かった。

「 ありがとう、犬塚くん。あとはわたしがやるから……」

不意に名前を呼ばれた賢一は、彼女の意図するところが判らず、呆け顔を浮かべる。

しかし。

「……賢一お兄ちゃん……」

耳元で囁かれた恥ずかしそうな声に、賢一は文字通り飛び上がって驚いた。亀岡万夜の状態を完全に失念していたのだった。そこで猫矢鞠子が言った言葉の意味を完全に理解し、慌てて亀岡万夜を彼女に預けた。

「この部屋に洗面所みたいなのってありましたか？」

「ああ……それならあそこの部屋がそうじゃ。《洗面室》になつておる」

「判りました。ありがとうございます」

丁寧に礼を述べ、猫矢鞠子は示された部屋へと入っていく。間もなくして断続的に水の音が食堂内に響き始めた。

気恥ずかしさを誤魔化すように、賢一は鼠入忠治におおまかな事情を伺うことにした。

「もうこの部屋は全部調べ終わつたんですか？」

「今、猫矢くんが入つていった部屋しか調べておらんよ。向こうの部屋はちょうどこれから調べようとしていたところじゃ」

「そうですね。じゃあ僕も一緒に行きますので、手の開いている人で調べましょう」

今後の流れを提案して、賢一は部屋を見渡した。

鰐淵牙楼はまだ手当ての最中であり、猫矢鞠子の方も水の音が響いてきており、まだ時間が掛かりそうな雰囲気だった。

あと残っているのは賢一を含めた五人。先刻、賢一たちを出し抜いた三人と行動するのは気が引けたが、気に食わないからと言って遠ざけていても信用は生まれぬ。これはメンバー同士で殺し合うバトルロイヤルではないのだと言ひ聞かせ、賢一は覚悟を決めると、神妙な面持ちで羽鳥翔吾の元まで歩み寄った。

「羽鳥サン。向こうの部屋を調べましょう」

「ああ。俺たちもこれから調べようとしていたところだ」

そう答える羽鳥翔吾の口調はあっさりしていた。賢一たちを出し抜いた事など既に頭にないといった面持ちである。気にするなと賢一はかぶりを振り、扉をしっかりと見据えた。

賢一が行動を開始したことで、あとの四人もつられるように移動する。扉の前で立ち止まり、タイミングを窺う。

「開けます……！」

宣言と同時に、賢一は木製のドアを押し開けた。

「うっ……!!」

開けた瞬間、脂の焼けるような臭いが鼻を突き、誰もが例外なく鼻を押さえて嘔ぶ。

《二階・調理場》

「調理場か……？ それにしても酷い臭いだな……胸糞悪いぜ……」
羽鳥翔吾は部屋の設えから、ここが調理場だと推察した。大型のガス台にオーブンや冷蔵庫の類が並ぶそこは、確かに調理場そのものだった。換気扇が申し訳程度に回ってはいるが、部屋の悪臭を払拭するには微力過ぎた。

そんな中で賢一は、半ば無意識に部屋の隅々を見回している。程なくしてある物を見つけ、忌々しそうな眼差しを注ぐ。

「やつぱりあったか……」

誰にともなく呟き、見つけた物を拾い上げる。それは既に見慣れた《れんらくにつし》だった。賢一は怖々と、それでいて何かを確かめるように、《れんらくにつし》のページを捲っていった。

中でも一際目を引いたのが次の文章だった。

月×日【処理物における再利用の試験的運用について】

先日、施設長より表題に関する通達を受けた。

今までは単に処理していたペットだが、何か有益な利用法はないかとお考えの末、ひとつの方法を考え付かれたようだ。

その方法とはつまり食肉加工である。それは我々の食糧経費削減を助け、ひいては国民にも浸透すれば一石二鳥といったところである。

この方法が実用化されるかどうかは、我々調理部の腕に掛かっている。皆もありとあらゆる調理を試み、結果を報告してほしい。

以上。

「ふざけんな！」

賢一が内容を読み終えた直後、羽鳥翔吾が声を荒げた。

もしもこれが単なるペット事で済めば、彼もここまで苛立つ事はなかっただろう。しかし今は『ペット』人間』の図式が意識にある以上、彼の反応も無理からぬこと。その思いは本意ながら、賢一も同じだった。

「ではまさか……この臭いは……」

鼠入忠治は明言こそ避けたが、言わんとする事には察しがつく。

誰もがその答えを思い浮かべて顔を顰めた。

「こんなの……質の悪い冗談よ……っ！ そんな事……許されない……！ あたしや認めないよ……っ！」

虫賀奏はヒステリーを起こし、棚に並んでいる物を手当たり次第にぶちまけた。けたたましい音が鳴り響き緊張の直中にいる皆の神経を逆撫でする。

なお言い募ろうと、口を開きかけた虫賀奏だったが、不意に何かを視界に捉え、「ひいつ……！」と息を呑んだ。彼女の視線の先には夥しい数の昆虫が蠢いていたのだった。どうやらぶちまけた容器の中から出て来たようである。

様子を確認した賢一も、あまりの数に顔を顰めた。

「虫……！？ ……なんでこんなところに……！？」

周囲が不可解な光景に困惑する中、虫賀奏は「気持ち悪い！ 誰かあれを潰して！」と喚き立てた。

しかし、誰も動こうとしない。その態度に不満顔を浮かべると、今度は途端に、鼠入忠治へと食って掛かった。

「ちよつとあんた……前に使ってた薬品……あたしにおくれよ……ッ！」

「虫賀さん……少し落ち着くんじゃ……！。薬品くすりは今、あの化け物

のだった。

賢一的首輪に点るランプは遂にあとひとつ……。ランプがすべて消えるとどうなるのか……。そもそもこの施設から無事、脱出なんて出来るのか……。

そんな賢一の声なき叫びは……。心の内にある恐怖という名の闇に吞まれ……。希望という名の光に届くことはなかった……。

《虫賀奏》の場合。

約十三年前。

女は、夫が営んでいた時計業が経営不振に陥り、多額の借金を背負われる羽目になった。

何か打開策はないかと、インターネットで調べ物をしていたある日。

女は昆虫が高値で売買されている事実を知った。

昔から昆虫の類が大嫌いだった女だが、金になると思えば、と割り切って首を突っ込んだ。

先行投資としてまとまったお金を手放してまで、女はある有力なパイプを確保することに成功した。

それから間もなくして、女の思惑は見事に的中する。

仕入れた端から飛ぶように昆虫が売れ、女の懐は日に日に潤っていった。

せっかく稼いだ金を夫に取られるのを懸念した女は、躊躇いなく離婚を決断した。

すべては面白いほど、女の筋書き通りに事が運んだ。

「あくはっは。笑いがとまらないったらないよ。こんな気持ち悪い虫ごときに、こんなにも金を落としてくれるバカがいるとはね。まったく、虫様様だよ」

三年ほどで昆虫の卸売りが板につき始めた頃、虫賀奏の計画は次の段階へと進んだ。

それは品種改良だった。

様々な昆虫をかけあわせ、世にも珍しい昆虫を作り出す。

昆虫の命なんてあってないようなものだと言わんばかりの勢いで、女は研究に没頭した。

その結果。

無惨にも、罪無き数多の命の灯が消えることとなった。

だが、その負の連鎖は留まるところを知らなかった。

女の異常ともいえる行為は、日を追う事にエスカレートしていき、犠牲となる命も倍加の一途を辿った。

「こない金蔓……………頼まれたって手放すもんか……………！ むし
れるだけむしり取ってやるよ！」

もはや女は後戻りできないところまで、足を踏み入れてしまっ
ていたのだった。

それから約十年が経過した、ある日のこと。

女のもとに一通の手紙が届いた。

しかし女は、不可解な手紙をまったく気にする様子もなく、研究
に没頭していた。

そんな最中に女は倒れ、意識を失った。

そして……………世にも過酷な運命が幕を開けるのだった……………。

異形との戦い。

狂った行動を眺めていることに嫌気が差した賢一は、再び室内を調べることにした。

「うわッ……でか」

程なくして大層な取っ手が付いた扉を見つけ、感嘆の声を上げた。それは高さ七メートル、幅三メートルはあろうかという大きさを誇っていた。

「開くのかな……？」

細心の注意を払いつつ、賢一は巨大な扉の取っ手を恐る恐る引いた。

刹那。

「！？」

開いた扉の隙間から、凍てつくほどの冷気が漏れ出して来たのだ。驚いて飛び退いた拍子に、巨大な扉が完全に開き切った。ドライアイスでも保管されているのかと思うほどの冷気が漂う中、ひとりまたひとりと関心を示した者が集まり出す。

「……これは……冷凍庫のようじゃな。もつとも、冷凍室と呼ぶのが適切なようじゃが……」

「冷凍庫だと！？ こんなバカでかい冷凍庫……何に使ってんだよ……！？」

怖れを滲ませて、羽鳥翔吾が問う。しかし答える者はいない。

「……冷凍室……」

賢一はその答えに察しがついたが、あまりの恐ろしさに口を噤まざるを得なかった。

「……とにかく中を調べてみましょう」

そう提案して、扉に足を踏み入れようとした瞬間、背後で衝撃音が響いた。驚いて振り返ると、そこに虫賀奏の姿がなかった。どうやら彼女が出て行った音のようだった。魚成海斗は相変わらず部屋

の隅で頭を抱えて震えている。

「……どこ行っただらう？」

「知るかよ。どこもなにも、この施設じゃロクに動けねえよ」

「そうじゃな。それに彼女には、ひとりで動けるほどの度胸もないじやろうて。おそらく隣の食堂で大人しくしているとと思うがのう」

出会った時から他人への気遣いを怠らなかつた鼠入忠治でさえ、今となってはぞんざいな印象を受ける。やはりこの異常な状況下で、体力はもとより気力も大きく削られているのだらうと賢一は憂い顔を浮かべた。

出鼻を挫かれた形になつた賢一たちが啞然と佇んでいると、再び扉が開かれた。思わず賢一は身構えたが、現れたのは猫矢鞠子だった。

「何かあつたの？ ……虫賀さんがすごい顔で出て来たけど……」

「ああ……うん。……でも大したことじゃないから気にしなくていいよ」

「ふん……じゃあ別にいいけど……」

猫矢鞠子は訝りながらも、賢一のもとまでやってきた。魚成海斗の存在には気付いているが、敢えて触れないようにしているらしい。ちらちらと何度か気にしつつ、状況を訊ねてきた。

「何か見つかった？」

「いや……特には。それより……万夜ちゃんはどうしたんだ？」

「うん、もう大丈夫だよ。今は牙楼くんの様子を見てくれてるわ」
「そっか」

短く返し安堵の表情を浮かべた賢一は、改めて冷凍庫へと向き直る。つられるようにして、猫矢鞠子も視線を振り、その巨大な存在に瞠目した。

「何よこれ……ひよつとして冷凍庫……？」

「恐らくね。……今からここを調べようとしていたところだよ」

「そついうことね。……わたしも一緒に調べるわ……行きましょ」

「き……」

危険だから待つてる。そう言い返すつもりだった賢一だが、寸でのところでその言葉を呑み込んだ。この状況ではどこに居ても危険なことには変わりないから。それなら自分の近くにいてくれた方が、万が一の時には守ることが出来る。賢一はそう考えたのだった。

鼠入忠治以上に他人を　特に子供を気遣うことの出来る彼女の姿に、賢一は少しずつだが惹かれつつあった。

「……判った……一緒に調べよう」

「……うん。早く手掛かりを見つけて、こんな所早く抜けだそうね」

「ああ……そうだな」

常にポジティブな彼女の笑顔に、賢一は幾分心が安らいだ気がしたのだった。そんな何気ない笑顔も、賢一が彼女に惹かれるひとつの要素となっていた。

「……おい……あいつはどうするんだ？」

穏やかな心境でいる賢一の意識に、羽鳥翔吾の無骨な声が滑り込んできた。視線を振った先には魚成海斗の姿があった。賢一は少し考えてからおもむろに口を開いた。

「……見たところ相当怯えているようだし……無理強いても仕方がない。それに隣の食堂に兎沢さんたちもいるし、ここにいる分には安全だと思うけど……」

「ま、そうだな。四人いりゃあ充分か。早いところ調べようぜ」

羽鳥翔吾のその言葉を合図に、賢一たちは恐る恐る冷凍室へと侵入した。当然ながら氷点下を優に超える冷気が、賢一たちの体温を容赦なく奪っていく。

《二階・冷凍室》

入ってすぐのところから、カーテン状のビニールが垂れ下がり、通路を形作っていた。そこを抜けた先に広がる光景を見た瞬間、賢一たちは驚きに目を見張った。

「なんだよ……これ!?」

賢一たちが目撃したもの……それは天井から吊り下げられた無数の布袋だった。中に何か詰まっているらしく、ちょうどサンドバツ

グのようである。

見るからに不気味な気配が漂う布袋にはどれも、これまた不気味な文字列とバーコードが刻印されていた。

「くそがつ……！」

怒りに身を任せ、羽鳥翔吾が布袋を殴りつけた。大して強度は考慮されていないのか、布袋を吊っていた紐があっさり千切れ、鈍い音を立てて床に転がった。苛立ちついでにと、羽鳥翔吾は床に転がった布袋を掴み上げると、袋の口を乱暴に開いてみせた。

「うつ……！」

出て来た内容物を目にした羽鳥翔吾は布袋を放り出し、数歩後退した。入れ替わるようにして覗き込んだ賢一もまた、内容物を前に険しい表情を浮かべた。賢一が皆の顔色を窺うと、すでにあとの二人も確認したのか、気分が悪そうな面持ちをしていた。

布袋に詰まっていたモノは、見慣れない形と色をした肉塊だった。「~~~~~ッ!？」

その瞬間、脳裏におぞましい想像がよぎり、賢一は激しい吐き気を覚えた。

「犬塚くん大丈夫？ ……顔色悪いよ」

「……大丈夫……心配いらない……から」

これしきの事でくたばってなんていられない……。

賢一が自身に活を入れ直し、前を見据えた次の瞬間

ガゴーーーーー！！

「~~~~~ッ!？」

何の前触れもなく、冷凍室の扉の閉まる音が背後で響いたのだった。

突然の出来事にパニックに陥った賢一たちは、急いで扉へと駆け寄り、脱出を試みる。

しかし、扉のどこを探しても、内側から開けられるような装置は見当たらなかった。一瞬にして危機感が膨れ上がり、賢一たちは余計に冷静さを失っていく。

「魚成さん……魚成さん！ この扉を開けてください……！ そこにいるんでしょ！？ 魚成さん……お願いします……！ 今すぐここを開けてください……！ 魚成さん！」

だが、いくら叫んでも扉の向こうからの反応はなく、冷凍室は重苦しい沈黙に包まれた。

「……もしかして……扉が分厚すぎて聞こえないんじゃない？」

「そんな……！」

まさか、と返しながら、賢一は内心その可能性を否定しきれずにいた。

だからこそ何度も何度も、賢一は声を張り上げ続けた。それこそ食堂にいる亀岡万夜たちにまで届くほどの気持ちで……。

しかし、そんな賢一たちの願いを嘲笑うかのごとく、現実は無情だった。待てども待てども反応は皆無。結局、不安と恐怖が膨れ上がっただけで、賢一たちの抵抗は無駄に終わった。

賢一が虚無感に打ち拉がれている中、ぽつりと呟く声があった。

「あいつ……やりやがったな」

「え？」

声の主である羽鳥翔吾の表情には、敵愾心が露骨に表れていた。

賢一は彼が呟いた言葉の意味を量りかねて小首を傾げた。

「どういう意味ですか……それ」

「ああ？」

賢一の問いに、トスの利いた声で凄む羽鳥翔吾は、いかにも面倒だといった表情で説明を口にした。

「決まってるだろうが！ あのおっさんが俺たちをここに閉じ込めたってことによォ！」

「まさか……。第一そんな事をして魚成さんになんの得があるっていうんだ？ さっきだって人一倍怯えていたじゃないか……！ あの意味彼が一番、僕たちの助けを必要としている……それは明らかだ。そんな人がどうして僕たちを殺すような真似をするっていうんだ！？」

「お前……あいつがそんな真似しねえって断言出来るのか？」

抜き身の刀のような眼差しで睨まれ、賢一は言葉を詰まらせた。それでも不毛な疑心は御免だと言わんばかりに、反論する。

「……断言は出来ません」

「それみろ」

したり顔で声を弾ませる羽鳥翔吾に対し、賢一はなおも言い募る。

「……それでも僕は……魚成さんを信じたい……！」

「は？ なんだそれ。そんなものお前の願望……都合のいい理想じゃねえか。調子いいことばっか言ってるじゃねえぞ！」

激昂して賢一の胸倉に掴み掛かる羽鳥翔吾。そこに猫矢鞠子が割って入る。

「……ちよつとやめなさいよ……！ 犬塚くんはただ、信じようとしているだけでしょ……そのどが悪いつていうのよ……！ そんなの……あなたにとやかく言われる筋合いないわよ……！」

「チツ……！ いいよなアツ！ 他人を疑うことも知らねえ暢気なお子様はよオ！」

「お前さんはもう少し、他人を信じる気持ちを学ぶべきだと思うがのう」

「うつせえ！ じじいは黙ってる！」

状況が状況なだけに、羽鳥翔吾の言動は荒れる一方。やり場のない不安と恐怖が緋い交ぜになった静寂が、室内を支配する。その間にも室内の冷気が全員の生気を奪っていく。

「とにかく……ここから脱出する方法を探さないと……！ みんな、諦めるにはまだ早いよ」

誰もが意気消沈する中、真っ先に希望の声を上げたのは猫矢鞠子だった。こんな状況に陥ってもなお、持ち前の積極的な姿勢は揺るがない。その存在はさながら、寒空に輝く太陽のようだと思賢一は思った。

「そつだよね……ありがとう猫矢さん。探そう、出口を！」

やる気を漲らせる賢一に対して、羽鳥翔吾は冷淡な言葉を投げ掛

ける。

「はア？ 出口だ？ お前ここがどこだか忘れたワケじゃねえよな？ 冷凍室だぜ？ 常識的に考えて、この扉以外のどこに出口があるっていうんだよ？ ああ？」

睨みを利かせて詰め寄る羽鳥翔吾に怯むことなく、賢一は毅然とした態度で返した。

「常識？ こんな場所で常識もなにもないでしょう。現に常識外れなことが何度も起こっています……そんな考え方でいることが、そもそも非常識なんじゃないですか？」

「なんだとてめえ！ 言わせておけば……凶に乗りやがってッ！」
「凶になんか乗ってません。僕はただ、当然のことを言ったまでです」

「黙れッ！」

「……！？」

怒号と共に放たれた拳が賢一へと迫る。

殴られる！ そう思って反射的に目を瞑る。咄嗟の事に頭が追いつかず、賢一は防御することすらままならなかった。

「……………」

しかしいくら待っても、衝撃は襲って来なかった。

どういうことだと疑問を覚え、そっと目を開けた直後、別の衝撃が賢一を襲った。

「暴力は感心せんな」

「鼠入さん！？」

なんと、羽鳥翔吾が放った自衛隊仕込みの一撃を、容易く受け止めて見せたのだった。見るからに華奢な老爺の思いがけない行動に、賢一は驚きを隠せずにいた。それは羽鳥翔吾も同じのようで、受け止められた拳を振り解けずに、険しい表情を浮かべている。

「くっ……………！？」

いくら身長的には勝っているとはいえ、客観的に見ても鼠入忠治に分があるとは到底思えない。一体老爺のどこにそんな力があるの

か……賢一は考えれば考えるほど答えを見失ってしまおうだった。「このルートが……！ 今まで隠してやがったのか……！？」

「……………そういうのとはちいと事情が違うようなんじゃ……………。恐らくは」

そこまで口にして、鼠入忠治はかぶりを振り口を嚙んだ。

今の一言に、賢一は違和感を覚えた。

(どういうことだ？ 鼠入さん自身のことなのに……………？)

思考を巡らす賢一だったが、明確な答えを導き出すことが出来ず、もやもやとした疑問だけが残った。

「チツ。……………いい加減身体がかじかんできやがった。……………探すなら

さっさと探そうぜ」

「ふむ」

羽鳥翔吾が矛を収めたのを確認して、鼠入忠治は彼の手を解放した。

「……………じゃあとりあえず奥まで行ってみましょう。もしかしたら別の出入り口があるかも知れません」

「好きにしる」

にべもなく吐き捨て、羽鳥翔吾は先に歩き出す。彼に続く形で賢一たちも行動を開始した。

周囲に警戒しながら歩き、さつき殴り倒した布袋を越えてさらに奥へと進む。

やがて吊り下げられた布袋が比較的少ない空間に辿り着いた。布袋に遮られて幾分視界は悪いが、取り立てて騒ぎ立てる程でもない。

「おい……………あれじゃないのか？」

ふと、壁際に取り付けられた、直径四〇センチ程のバルブハンドルを見つけた羽鳥翔吾は、軽い足取りで近付いていく。バルブの隣には緑色のランプが三つ点灯している。

「……………」

賢一は彼の行動を見守りながら、妙な胸騒ぎがしてならなかった。そんな賢一の心配など知る由もない羽鳥翔吾は、今まさにバルブハ

ンドルを回そうとしているところだった。

「ッ！」

賢一は彼の頭上にある換気ダクトのようなモノを見た瞬間、考えるより先に叫んでいた。

「避けるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「！？」

バルブハンドルを既に回した後だったが、羽鳥翔吾は持ち前の反射神経を発揮して、賢一の言葉に反応した。至近距離で爆発物に相対した時さながらの動きで身を翻し、床に倒れ込んだ。次の瞬間、賢一が睨んだダクト部分から、白い蒸気のようなものが勢いよく噴射されたのだった。

噴射は約十秒ほど続いてから止まり、バルブの隣にある三つランブが赤色に変わった。

「羽鳥サン！ 大丈夫ですか……！？」

賢一は慌てて羽鳥翔吾のもとへと駆け寄り、具合を確認する。命に関わるほどの外傷は見られなかったが、蒸気に近かったズボンの裾が冷たく、若干凍っていることに気付いた。

少し遅れて駆けつけてきた鼠入忠治が、冷静に状況を分析し、おもむろに呟いた。

「今のは液体窒素のようじゃな……気をつけんと酷い凍傷になるぞ」「液体窒素……？ どうしてそんなモノが？」

「……恐らくはアレの為じゃろうな」

鼠入忠治が視線で示したのは、天井から吊り下げられている布袋だった。それを見て用途を察した賢一は神妙な面持ちで相槌を打った。

「……保存用……ですか」

「おぞましいことじゃがな……」

陰鬱な気分には陥る二人をよそに、羽鳥翔吾が凍ったズボンを気にしながら立ち上がった。

「……悪い。……今のは完全に俺の不注意だった。……お前のお陰で助かったぜ」

珍しく素直にお礼を述べる羽鳥翔吾の言葉に、賢一は鳩が豆鉄砲を食ったような顔で目を瞬かせた。

「え……あ……はい。……とにかく無事でよかったです」

戸惑いながら返す賢一の口調には普段、彼に接する時のような嫌悪感はなく、どこか他人行儀な感じである。

「……ねえ……ちょっとみんな……見て……あそこ……!!」

猫矢鞠子の怯えた声に、賢一たちの意識が一瞬にして張り詰めた。

「どうしたの？ 猫矢さん」

「……あれ……あれ……!!」

視線の先を指差しながら、彼女は同じ言葉を譚言のように繰り返すばかり。

「あれ？ あれって何のこと

と!？」

彼女の指差した先へと視線を向けた賢一は、？アレ？を目にした瞬間、蟻の群れが足下から上ってきているような悪寒を覚えた。あまりの衝撃に視線を外すことは叶わないが、賢一は気配だけで羽鳥翔吾や鼠入忠治が息を呑んでいることが判った。それほど異常な光景が今まさに、目の前で起こっているのだった。

「冗談………だろ？」

「なんという……。まるで悪夢じゃ……!!」

二人の慄き声に、賢一もまた同じ気持ちでいた。

四人の眼前で起こっていること。それは………。

一際巨大な布袋が、もぞもぞと独りでに動いている光景にはかならなかつた。

理解の範疇を超えた光景に、誰もが驚愕と絶望に満ちた表情を浮かべ、蠢く布袋を凝視している。

「おい………! 落ちるぞ………ッ!」

「………ッ!?」「………」

羽鳥翔吾が言葉を放ったのとほぼ同時。巨大布袋は重力に逆らえ

「い……犬塚くん……どうするの？ ……わたし、怖い……怖いよ……犬塚くん……！」

「僕だつて怖いさ……。それでもなんとかするしかないだろ……。大丈夫、誰も殺させやしないから……。！ 何としてでも守つてみせるから……。猫矢さんも協力してくれ」

「うん……。！ わたし、走ることくらいしか取り柄ないけど……。わたしに出来ることならなんでも言つてね」

「ありがとう」

穏やかに返し、賢一は異形の動きに意識を向ける。だが、天井から吊り下げられた布袋が壁の役割を果たし、思うように異形の位置を掴むことが出来ない。

「く……。どこだ……。！」

視線を巡らせて必死に異形の位置を掴もうとする。そこへ羽鳥翔吾の声が飛ぶ。

「そつち行つたぞ……。！ 走れ！ こつちだ！」

言われるがままに賢一たちは彼の方へと駆ける。後方を確認しながら走っていると、間もなくして布袋の陰から異形が姿を現した。羽鳥翔吾の誘導がなければ、逃げ遅れていたかも知れない結果に、賢一は肝が冷える思いだった。

今もなお、異形は巨大な金鎚を手に、賢一たちへと迫って来ている。

「気配がなくて厄介だが……。動きが鈍いのがせめてもの救いだな……」

「ええ……。確かに」

「奴の動きにさえ注意していれば、このまま逃げ回れなくもなさそうだが」

「でもそれじゃあ、この寒さで僕たちが先に動けなくなつてしまいますよ……。どうにかして倒さないと……。！」

「倒すだと？ あんな化け物……。どうやって倒すつもりだ？」

「……。それを考えるんですよ……。！」

賢一たちは布袋によって四つの壁に囲まれた 丁度【田】の形をした空間をぐるぐると逃げ回りながら作戦を話し合う。

「鼠入さん。……さっきの薬品はもうないんですか？」

「うむ。あいにくじゃが、さっき奪われたので最後だったんじゃ……。こつという時のために温存しておいたものを……。あやつと来たら……！」

先のやりとりを思い出してか、好好爺は忌々しげに吐き捨てた。

「そうですね……。困りましたね」

警戒と誘導を羽鳥翔吾に任せ、賢一は思案を巡らす。何か決定的なモノを見落としているような気がするのに、それが何か判らない。気持は焦る一方だった。

「おい！ 気をつける！ 奴の姿が消えた……！」

「え……！？」

羽鳥翔吾の不穏な警告に、賢一は思考を中断して辺りへと視線を巡らした。

「ほんとだ……いない……！ どこかに隠れたのか……！？」

姿の見えぬ敵を相手に、賢一たちの精神力はみるみる削られていく。前後左右としきりに視線を巡らし、異形の姿を探すが影も形もない。

否。影はあった。猫矢鞠子の足下に……！

それに気付いた賢一が咄嗟に叫ぶ。

「猫矢さん！ 上だ！」

叫ぶと同時に駆け出していた賢一はそのままダイブ。猫矢鞠子を抱え、庇う形で床を転がった。直後、二秒前まで彼女がいた位置に異形が降って来た。あと一瞬でも判断が遅れていたら、彼女は押し潰されていただろう。命の瀬戸際に賢一の心臓が狂ったように脈動する。

「だ……大丈夫……猫矢さん」

人命救助だからといって、いつまで抱き付いているワケにもいかない賢一はすぐに、彼女の背中にまで回していた手を離す。異形と

距離を置くよう促しつつ、彼女の身を案じた。

「うん……平気みたい。……ありがとう、犬塚くん。ほんとに守ってくれて」

謝意を述べる彼女だが、その表情には明確な恐怖が滲んでいた。

それを見た賢一はおどけた口調で返した。

「あれ？ ひよっとして信じてなかった？ それはちよつと心外だな」

「違つよ……！ そう言う意味じゃなくて……」

慌てて誤解を解こうとする猫矢鞠子の表情にはもう、さっきまでの恐怖は表れていない。そんな彼女の様子に賢一は、にへらと笑つて返した。

「もう怖くないでしょ？」

「へ？ ……あ。……うん……そういえば」

自分でも信じられないといった様子の猫矢鞠子に、賢一はさらに言葉を継ぐ。

「なら笑っていてよ。猫矢さんには笑顔が一番似合ってる。それが僕らに元気をくれるから」

「犬塚くん……」

猫矢鞠子は心を打つたように賢一の名前を囁く。

両の瞳に確固たる決意を湛え、とびきりの笑顔で続けた。

「うん！ 犬塚くんがそういつてくれるならわたし、頑張れる気がする」

「その意気だよ」

穏やかに微笑んで返した賢一だったが、その視界に異形の姿を捉え、戦慄に歪む。

「来た……奴だ……！ 猫矢さん、走るよ……！」

賢一はごく自然に猫矢鞠子の手を握り、異形に対して反対方向へと逃げる。

今は先の奇襲によって、鼠入忠治らとは分断されている状況。互いに助け合う為にも、賢一は合流を急ぐ。

「鼠入さん……大丈夫ですか……!?!」

呼び掛けにはすぐに応答があった。

「おお、なんとか無事じゃわい。……しかし問題はやはり、あの化け物じゃ……何か手立てを見つけんことには……! いい加減身体感覚が薄れて来よるでな……」

そう、賢一たちは今、常識外れの大きさを誇る、冷凍室の中にいるのだ。このまま異形から逃げ回れたとしても、寒さにやられるのは時間の問題……脱出口を探す為にはやはり、異形を倒す他ないのである。

追い打ちを掛けるように、鼠入忠治が訴えた症状は、次第に他のメンバーにも表れ始める。

「猫矢さん……大丈夫?」

「う……うん……ごめんね。さすがに寒すぎて……気分が悪くな………て」

「頑張つて猫矢さん……! ここで倒れたら終わりだよ………! だから……頑張つて」

「そうだよね……わたし……笑つてなきや………ダメだよね………みんなに元気を……与えなきや………だよね」

相当苦しい状態にも関わらず、猫矢鞠子は懸命に笑おうとする。その気概に賢一は、頬を強烈にはたかれたような錯覚すら覚えたのだった。

(…… そうだ……… 僕がやらなきゃ誰がやるんだ………!)

俄然、使命感に燃え出した賢一は、神経を集中させて辺りを注意深く窺う。

(? …… なんだあの光は………)
すると、霞掛かったような視界の先に、赤々と点る三つの光に気が付いた。

猫矢鞠子を気遣い、異形に注意を払いながら近付いていく。

(これは………!?!)

賢一が視界に捉えたモノ………それは。

この空間に来てすぐ、羽鳥翔吾が誤って作動させた液体窒素の噴射装置。そのバブルハンドル脇に設置されたランプだった。

（これだ！）

異形の出現にパニックに陥るあまり、賢一は単純にして重大なことを見落としていた。異形に対する解答は、すぐ近くにあったのだ。賢一はこれで何とかなると希望に震える反面、どうして今まで気付かなかったのかと、自分を責めた。

「賢一くん……！」

そこにちょうど、鼠入忠治と羽鳥翔吾が合流を果たす。賢一はたつた今思いついた作戦を、二人に説明した。

「抜かっておつたわい……。そうじゃよ……液体窒素コレがあつたんじや……！」

「すまねえ……こんな、俺が真つ先に思いつかなきゃなんねえところなのに……！」

二人は揃ってその存在に気付かなかった事を悔やみ、詫びた。濟んだ事は水に流し、賢一は作戦実行の意思を示した。

「よし、やってやろうぜ！ 見てろよ、化け物……今に目に物見せてやんぜ！」

「うむ。それが最善の方法じゃろう。時間が惜しい……早速行動開始じゃ！」

賢一が考えた作戦は至って単純だった。

液体窒素の噴射口へ異形をおびき寄せ、タイミングを見計らって装置を作動させる。

ただそれだけ。

状況的に小細工を弄する手段はなく、ましてやそんな暇がない以上、それが考え得る最善策だと判断したのだ。体調の悪化が著しい猫矢鞠子のためにも、早急に終わらせたいという思いを、誰しもが抱いているような雰囲気だった。

「バルブは……僕が回します。鼠入さん、猫矢さんをお願いします」
「それは構わんが……。しかし、賢一くんに危険な役回りをさせる

ワケにもいくまいで。ここは僕に任せてくれんか？」

鼠入忠治の献身的な申し出にも、賢一の意味は揺るぐことはなかった。

「大丈夫……ここは僕が引き受けますから……猫矢さんを……頼みます……！」

「むう………若者に危険を冒させたくはないんじやが………それほどの覚悟なら致し方あるまい………。任せたぞい」

「……犬塚………まさかお前………」

神妙な面持ちで呟く羽鳥翔吾に、賢一は軽い調子で返す。

「なんて顔してるんですか、羽鳥サン。確かに危険な役かも知れませんが、こんなところで死ぬ気は毛頭ありませんよ。羽鳥サンもその腕じゃ、急には回し辛いでしょうから、やはりここは僕が引き受けます」

淡々とした割には力強い賢一の言葉に、羽鳥翔吾もそれ以上言い募ることはなかった。ただひとこと「悪い………任せた」と、ぶつきらぼつに告げただけだった。賢一は緊張した面持ちで頷く。

「今から奴をおびき寄せるので………鼠入さんたちは避難しておいてください」

「うむ………！」

「いざとなつたら加勢するからな」

二人が避難するのを見送った賢一は、角材で壁などを叩き、わざと大きな音を立てた。さらに腹の底から大声を張り上げる。

「僕はここだ！ 出て来い化け物！」

賢一の叫び声に、異形は餓えた獣のごとき反応を示した。獣が地を這うように駆ける気配が遠くでしたかと思えば、次の瞬間には賢一の眼前、二メートルの距離にまで迫っていたのである。

「……ッ！」

異形の機動力は賢一の予想を上回っていた為、反応が僅かに遅れた。それでも何とか立て直し、紙一重のタイミングを見計らう。

異形は金鎚を振り回しながら、徐々に近付いてくる。

(あと三步……！)

賢一は頭上にあるダクトと異形の位置をしきりに確認する。

(あと二歩……！)

明確な脅威を前に、賢一の緊張感は否応なく高まっていく。

(あと一歩……！)

そして。

「今だ　　ッ！！」

これ以上ないというタイミングで、賢一はバルブハンドルを回し、即座にその場を飛び退いた。

あと数秒もすれば、液体窒素が噴射され、異形は氷像よろしく凍りつく……はずだったが。

「どうして噴射しないんだ……！？」

確かにバルブは開けた。だが、装置はうんともすんとも言わず、沈黙している。半ばパニックに陥りながらも、賢一は必死に状況を分析する。

(あ……まさか………)

極限状態の影響で神経が研ぎ澄まされているのか、賢一はある違和感に気付いた。それはバルブハンドルの脇に設置されているランプ……その色の違いだった。

(確か……羽鳥サンが回した時は緑色……だったはず。………と
いうことは、どこかに制御装置が………?)

凍結を免れた異形は、振り上げた金鎚に殺意を込め、叩き付ける運動を繰り返す。

「……くっ……！」

床を転がりながら辛うじて攻撃を回避した賢一は、一縷の望みに賭けて叫ぶ。

「羽鳥サン！　装置が動かないんです……！　近くにスイッチか何かありませんか……！？」

賢一の訴えに対し、すぐに応答があった。

「ああ！　いかにもそれっぽいスイッチがあるぜ。今切り替える……」

…！」

バチン！ という音が響くと同時に、賢一の方に変化があった。装置のランプがひとつ、緑色に変わったのだ。

しかし、一分も経たない内にランプは再び赤色に戻ってしまったのだった。

「……ダメです羽鳥サン……！ ランプは三つあるんです……！ 恐らく時間内にすべて切り替えないと……！」

「チツ……そういうことか。 待つてな。 一っ走り、ソッコで切り変えてやるよ」

「お願いし………ッ!?」

礼を述べようと視線を向けた瞬間、賢一は悍ましい光景に言葉を詰まらせた。

なんと、壁の役割を果たしていた布袋が突然落下し、中から成人男性ほどの大きさをしたモノが現れたのだった。それは異形をそのまま小さくしたような奇々怪々な生物。異形としては不完全な身体の節々には、人体のパーツらしきものが散見された。

(この化け物……元は人間なのか………!?)

遠目に様子を窺っていた賢一は内心で驚きを露わにする。その間にも小さき異形はその数を増やし、羽鳥翔吾らへと殺到する。

「なんだこいつら……!? 畜生！ 邪魔だ、どきやがれええええーッ……！」

異形の攻撃を回避しながら向ける視線の先で、羽鳥翔吾と鼠入忠治が小さき異形を蹴散らしているのが見えた。どうやらそれ程強くはないようである。だが、数が半端ない。少しでも気を抜こうものならあつという間に押し切られる……そんな危うい状況。

二人の背後に猫矢鞠子があつた。遠目に見ても衰弱の色が濃く、立っているのも辛そうであることが窺い知れた。

(くそ……何か打つ手はないのか………!?)

僅かに見えた希望さえも、敢えなくも閉ざされようとしている現状に、賢一は激しい憤りを覚え、歯噛みした。

思わず歓喜の声を上げた直後、凍結した異形は硝子のごとく砕け散った。数秒の間を置いて、甲高い金属音が響いた。

「……ん？ なんだこれ……」

音のした場所に視線を向けてみると、そこには小さな金属が落ちていた。何気なしに拾い上げてみるとそれは一本の鍵だった。

「鍵……みただけど……どこの鍵なんだろう……？」

異形との戦いで心身共に疲弊しきっていた賢一は、深く考えることなくそれをポケットへと収めた。

「おい、犬塚……！ 大丈夫か……！？」

程なくして、羽鳥翔吾たちが駆けつけ、小さき異形が突然動かなくなつたと説明した。話を聞いて安堵した賢一だったが、それよりも聞きたいことがあつた。

「ねえ……スイッチは……誰が切り替えてくれたの？」

「ん？ ああ。それなら」

そう言つて羽鳥翔吾は、猫矢鞠子へと視線を向け、事情を説明した。

スイッチを切り替えたのはなんと猫矢鞠子だった。

立っているのも辛い状態にも関わらず、部屋の三隅にあるスイッチまで走つてくれたという事実にも、賢一は驚嘆し、心から感謝したのだった。

「猫矢さん……！ なんて無茶をしたんだ……！」

鼠入忠治から彼女の介抱を委ねられた賢一は、何よりも先に注意が口に出た。

「ごめんね……犬塚くん。でもわたしもみんなの役に立ちたくて……」

……わたし……走ることに……出来ないから……やらなきや……って……思ったの。ほんと……ごめんね」

猫矢鞠子は息も絶え絶え言葉を紡ぐ。

そんな彼女の気概をありありと感じ、賢一は視界を滲ませた。

「バカヤロウ……謝るのはこっちの方だよ。……無理させてごめん……そしてありがとう……猫矢さん」

「うん……!!」

猫矢鞠子が穏やかな笑顔を浮かべたまさにその時。

ガチャン。

出入り口の方向から鍵の開く音が響いた。

途端に賢一たちの表情に安堵の色が浮かぶ。

「……どうやら扉……開いたみたいですね。とにかく、まずはここを出ましよう……。猫矢さんの体調が心配です………」

賢一の号令にふたりは無言で頷いたのだった。

《善養寺良彦》の場合。

近年、ペットを家族の一員とみなしたり、人間より手厚い葬儀を行ったりする風潮について、男は猛烈な吐き気を覚えていた。

「高が動物ごときが、人間と同列であっていいはずがない」
それが男の揺るぎない信条である。

しかしそれはあくまで裏の顔でのこと。世間から見た男の評判は？見做すべき人格者？で通っていた。

ニユースキャスターを務める傍らで、度々動物保護に関する番組にゲストとして出演する男は、その番組の中で次のような言葉を述べた事があった。

『ペットとはもはや、家族同然の時代に突入しているのです。結論から申しますと、人間とペットの命は同等の重さを持つて然るべきでしょう。私は声を高らかにして警告したい。全国……いや、世界中の動物虐待者は自らの罪の深さを恥じ、その生涯を賭して償うべきだと！』

男は明言こそ避けたが、つまるところ？動物虐待者は死んで償え？と言つてのけたのである。番組的な放送倫理を懸念する声もあったが、男の言葉は絶大な支持を集め、大反響を呼んだのだった。

その日の夜。

すべてのスケジュールをこなし、自宅に帰った男は真つ先に自室にあるパソコンを立ち上げた。上着を脱ぎ、ネクタイを緩めながら高級チエアに身を委ねる。

「ふう……今日もなかなかの好感触でした」

起動中のパソコン画面を見詰め、誰にともなく呟く。

程なくしてパソコンが立ち上がると、男は慣れた手付きであるウ

エブページを開いた。
そのトップ画面には次のようなタイトルが踊っていた。

《動物虐待支援コミュニティ管理画面》

「ふっ……何がペットは家族ですか。まったくもって反吐が出る思想です」

忌々しげに吐き捨てて、男は口角を不気味に吊り上げた。

「さて、今日もとびっきりの虐待をプロデュースして差し上げましょうかね。私の動画コレクションに加わり得る傑作が生まれる事を期待しながら　ね」

くつくつと嗤いながらキーボードを打ち込む男の容貌には、人格者で通っている彼の面影は微塵も残ってはいない。そこにはもはや、悦楽に酔い痴れ、精神を崩壊させた異常者が居るのみだった。

「動物ごときの命など、人間には遠く及ばないということを、判らせてやらねばなりませんね……！　ふふっ……ふふふ……っ！」
男がどうしてここまで動物を忌み嫌うのか。その理由は男の身体に刻まれていた。

「この傷の痛み……忘れるものですか。………決して赦しませんよ」

そう呟くと、男はおもむろにシャツを脱ぎ捨て、上半身を露わにした。

そこには大小様々な傷跡があり、中でも一番大きいのは脇腹から背中にかけて走る傷跡だった。まるで巨大な獣にでも噛み抉られたかのような大きな縫合跡が痛ましさを醸し出している。

つまりはその怨みこそが、男が動物を忌み嫌う最大の理由であった。誰の為でもなく、唯一己の為の怨恨。完全な私怨に他ならなかった。

男はいかにすれば効率よく動物を虐待出来るかを考えた。

考えた結果、自分が善人の皮を被り、闇に潜む虐待者を焼き付けることで、彼らの衝動を呼び覚ますことを思い付いたのだった。

そうして男は《動物虐待支援コミュニティ》なるものを作り、二ユースキヤスターの顔を隠して、これまでに数千、数万にも及ぶ虐待をプロデュースしてきたのである。この大成功に男の嗤いは止まらなかった。

そんなある日。

いつも通り番組のゲストとして出演し、いつも通りのコメントを述べた日の夜。

自宅に届いていた差出人不明の手紙を破り捨てた直後……………。
男の意識は途絶える事となる。

そして間も無くして男は、素性も知らない九人の人物と出会うのであった。

血まみれのメモ。

《二階・食堂》

「どうしてエレベーターが動かないんだい!？」

命からがら冷凍室から脱出した賢一たちを待ち受けていたのは、虫賀奏のヒステリーだった。

「チツ……まだやってやがんのか」

疲れ切った顔で羽鳥翔吾が毒づく。それは賢一としても同じ思いだった。鬱陶しくは思うが、そんな彼女も含め、ここにいる全員が無事に脱出できますように……賢一の願いはひとえにそれだけだった。

願いを再確認した賢一は、状況を把握するべく声を上げた。

「……あの、何がどうなってるんですか？」

賢一は猫矢鞠子をテーブルに寝かせながら訊いた。

すると、弱り切った彼女の姿に気付いた亀岡万夜が、泣きそうな顔で駆け寄って来た。容態を尋ねる幼い声が響く中、虫賀奏は横柄な態度で質問に答えた。

「どうもこうもありやしなわいよ……ッ！ 隣の部屋にや気持ち悪い虫がうじゃうじゃいるじゃないか……！ あたしゃね、こんな不快な場所には一秒足りとも居たくないんだよ。だからとりあえず中央ホールへ戻ろうと思っただよ……！ そうしたらどうだい。エレベーターが動きやしない……！」

そこまで一息に捲くし立ててから、彼女は何かに気付いたように瞠目し、賢一を睨め付けて言葉を吐いた。

「もしかして……あなたたちが止めたんじゃないの!? 隣の部屋の先でさ!」

「なっ………!？」

虫賀奏の身勝手な発言に、冷凍室メンバーは揃って呆気にとられた。言うに事欠いて他人の所為にするのか、と問い詰めたそうな面

持ちである。

しかし虫賀奏はまったく悪びれた様子もなく、疑心に満ちた冷やかな眼差しで賢一たちを睥睨している。

「ざけんじゃねえ！ こちとら冷凍室で死ぬ思いだったんだぞ！？ 証拠もなしに身勝手な憶測でモノ言ってるじゃねえよッ！」

「羽鳥サン……落ち着いてください。とにかく、まずは確認しないと……！」

「……チツ」

やり場のない怒りを抑え込み、羽鳥翔吾は辛うじて矛を収めた。

賢一たちはエレベーター前まで移動し、故障を確認すると、電子盤には確かに《Error》の文字が表示されていた。実際、昇降ボタンを押しても無反応。エレベーターが動く気配はまったくなかった。

「……本当だ……止まってる」

「くそっ……！ 一体誰がやりやがった!？」

「……………え？」

羽鳥翔吾の言葉に賢一は耳を疑い、怪訝な眼差しを向ける。そんな賢一の心情など知る由もない羽鳥翔吾は、何かに気付いたようになおも言い募る。

「……そうだ！ あいつだ……あのキャスター野郎に違いない……」

「ッ！ あいつ、俺たちを相当憎く思ってたみたいだし……奴ならやりかねない……！」

たった今、虫賀奏の言い分に反論したのにも関わらず、彼は臆面もなく他人の所為だと喚き立てた。その性根に、怒りを通り越して軽蔑の念が湧き起こる。結局は自分のことしか考えていないんだと判った途端、賢一はその心の醜さに心底嫌気が差した。

「羽鳥サン……他人の所為にするのはやめませんか……。ここは善養寺さんの安否を気遣って然るべきところですから……」

「……うっせえ！ 俺に指図してんじゃねえ！」

感情のままに吐き捨てると、羽鳥翔吾は食堂へと戻っていった。

「……あやつがもう少し大人らしい見識を備えておれば、幾らか頼りにはなるんじゃないか」

重たい沈黙をほぐすかのように、鼠入忠治は呟いた。

「ええ……まあ。……でも……羽鳥サンの気持ちも、判らなくはないです。……こんなところに居れば、誰だつて気がおかしくなりますよ。そうなれば誰かを疑いでもしないと……自分の身が持ちませんから……」

「ふむ……。やはり賢一くんの方がよっぽど大人じゃな」

感心したように相槌を打ち、鼠入忠治は神妙な面持ちで言葉を継いだ。

「じゃが、あまり責任を背負い込むんじゃないぞ？ 困難に直面したときこそ、人は人を頼るべきなのじゃからな。それを忘れてはならん」

「……はい。ありがとうございます、鼠入さん。お陰で少し……気持ちが悪くなりました」

「それはよかったですわい」

好々爺は目尻に皺を寄せて、柔和な笑みを湛えて答えた。

「では、僕らも戻るとするかの。今後の方針も立てねばなるまいて「そうですね。戻りましょう」

エレベーターが止まっている事に言い知れない胸騒ぎを覚えつつ、

賢一は鼠入忠治と共に食堂へと戻った。

「犬塚くん……」

賢一は猫矢鞠子に迎えられた事に驚き、慌てて彼女へと駆け寄った。

「猫矢さん……！ ダメじゃないか、しばらく安静にしておかないと……！」

「ううん……いいの。わたしの所為でみんなの足を引っ張るワケにはいかないわ……。それにもう気分も良くなってきてるから大丈夫よ。心配しないで……」

「猫矢さん……」

気丈に振る舞う彼女だが、その顔色は依然として優れず、疲弊しているのは明白だった。しかし、そんな状態にも関わらず彼女は「大丈夫」と言った。

どんな時でも周囲への気遣いを忘れない彼女の性格に、賢一はますます惹かれる思いだった。ある種、敬服の念を覚えるほどに。

確固たる決意を秘めた彼女の瞳に見詰められた賢一に、もはや拒否権などありはしなかった。

「……判ったよ」

不承不承ながら、そう返した。

「で？ これからどうするんだ？」

不意に苛立ちに満ちた声を上げたのは羽鳥翔吾だった。

(……！)

改めて室内を見渡した賢一は、ひとり壁際で凭り掛かって佇む、鰐淵牙楼の姿を認めた。どうやら手当ては無事終わったようである。その事に安堵しつつ、賢一は羽鳥翔吾へと向き直った。

「……とりあえずこの部屋を出て……三階への経路を探し出すべきでしょう」

「それは違うな。俺はまず、あの化け物を倒す必要があると主張するぜ。あいつがいる限り、俺たちは奴の影に怯えながら行動しなきゃなんねえ。恐怖心つてのは精神力はもとより、容人の体力すらも容易に奪っていくんだ。まずはそこを断たなきゃ、搜索もクソもねえだろ？」

「……」

いつぞやは形振り構わずに逃げたクセに、どの口がそんな事を言うのだ、と賢一は言っただけでやりたい衝動を辛うじて堪えた。溜飲を下げつつ、賢一は冷静に言葉を返す。

「あの化け物を倒す？ ……随分と簡単に言いますけど……具体的にどうするつもりなんですか？ 僕たちには武器もロクにないんですよ？」

すると羽鳥翔吾は不敵に口角を吊り上げ、予め手に持っていたら

しきそれを、勢いよくテーブルに叩き付けた。

「その問題はこれで解決できるはずだ」

羽鳥翔吾が取り出したのは施設全体の見取り図だった。前に《貯水制御室》で見つけたものより断然新しくキレイで、各部屋の詳細がはつきりと見て取れる代物だった。

その中の一点 《武器庫A》と表記された箇所を指差して、彼は勝ち誇ったような顔を浮かべて笑う。

賢一は見取り図を手に眺めながら、彼の話の耳を傾ける。

「例の？忠告文？にも書いてあっただろ？ 前の奴らもここで武器を調達したに違いないんだ！ ここで武器さえ手に入れりゃあ、あの化け物と戦うことなんて造作もないぜ」

「なるほど。けど、僕たちの目的は化け物を倒すことじゃない……ここから無事に脱出することです。遭遇すれば撃退を試みますが、こちらからわざわざ出向く危険を冒す必要はないでしょう。……それなら三階への道を探したほうがよっぽど有益だとは思いますがね？」

「ケツ！ 話になんねえよ！ そこまでいうなら俺は別行動を取らせてもらっぜ」

「……羽鳥サン。少し落ち着いて下さい。どうしてそんなに化け物を倒すことに拘るんですか？ 何事も命あってこそでしょ！？ 違いますか？」

懸命に説得を試みる賢一だったが、その努力も虚しく、徒労に終わる。

「何も拘ってるわけじゃない。俺はただ、先に安全を確保したいと言ってるだけだ」

「化け物があれ一体だけとは限りませんよ……？ それでもすべて倒すつもりなんですか！？」

「あゝ……うっせえなあ……」

賢一の言葉に聞く耳を持たない羽鳥翔吾は、強行採決に打って出た。

「俺と一緒に化け物を始末するやつはいないか!？」

全員の顔を見渡して様子を窺うが、誰一人として名乗り出ない。

その反応が意外だったのか、羽鳥翔吾は声を荒げて訴える。

「なんだ……てめえらはいいつをリーダーだと認めるのか……!？」

危険を排除しようとする方針に……賛成だともいうのかよ……!

「……!？」

やはり自分こそリーダーだと思っていたのかと、賢一が納得している、虫賀奏の食って掛かる声が上がった。

「リーダー？ あたしや別にそんなものはどうだって気にしやしないよ。ただね、あの化け物にみすみす殺されに行くような真似だけは御免だね。そんなもん……命がいくつあっても足りやしないよ……! 行くなら止めないよ。好きなように殺してきて、あたしたちの安全を確保してくれるなら万々歳さね……!」

「くそっ……! どいつもこいつも腑抜けてやがるぜ……!」

誰もが羽鳥翔吾から一步距離を置く中、彼に歩み寄る者がいた。

「ふん……。それ、面白そうじゃなア。アタシ、一緒に行つてあげてもいいわよオ？」

「へへっ……そうこなくつちな。お前とはどこか、気が合いそうな予感があつたんだ。まあよろしく頼むぜ」

どうにか兎沢朱音を引き入れた羽鳥翔吾は、突然歩き出し、亀岡万夜の手を取った。

「あと、このガキも俺のグループに入れるぜ。これで三人ずつのグループになっただろう」

「ちょ……ちょっと待」

賢一が言葉を発するより早く、猫矢鞠子が反論した。

「ちょっと待ちなさいよ! どうしてそうなるのよ!? それにいつ、三人ずつのグループなんて話になったワケ!？」

「ぎゃーぎゃー騒ぐな。グループに関しては俺が今決めた。文句は言わせねえぞ!」

「なによそれ、勝手にもほどがあるわよ! それにどうして万夜ち

「やんなの!？」

「そこまで口にした猫矢鞠子はハツとして、恐る恐る言葉を継いだ。
「あなた……ひよつとして………」

「……そんなんじゃねえ!」

「羽鳥翔吾は猫矢鞠子の言葉を真顔で遮った。その真剣な表情に猫矢鞠子は胸を撫で下ろしつつ問うた。

「……じゃなきゃなんなのよ?」

「俺はこいつを守りたい……ただそれだけだ」

「何かを思い出すように呟く彼の姿に何か深い事情を悟ったのか、猫矢鞠子は口を噤んだ。

「……その気持ちは僕たちも同じだ!」

「微妙な沈黙を破ったのは賢一だった。この施設に来て最初に抱いた気持ちを胸に、ありのままの思いをぶつける。

「だが、そんな賢一の思いを、羽鳥翔吾は一刀のもとに切り伏せた。

「……お前にこいつを守りきる力がるのか!？」

「……ツツ!？」

「鬼気迫る彼の言葉に賢一は、驚きのあまり二の句が継げなかった。前に見捨てた事を指摘して済むほど単純な話ではないことを、賢一は雰囲気から察した。それを抜きにすれば確かに、賢一よりも羽鳥翔吾の方が適任といえた。彼の強さは賢一としても充分認めているところだったから。

「しかし、それでも賢一には譲れない部分があった。ともすれば身の程を弁えないただの思い上がりかも知れない。たとえそうだとしても、表面上の強さではない、もっと内面的な想いの強さでは、彼に勝っているという自負が、賢一にはあったのである。

「だからこそ、賢一は食い下がった。守りたい者を自分自身の手で守る為に。」

「……羽鳥サンの言う通り……僕に力はありません。……けど、万夜ちゃんを守りたいという気持ちでは……僕たちも負けるつもりはありません……!」

そう言い切った賢一は猫矢鞠子と視線を交わし、力強く頷き合っ
た。

「はっ！ 気持ちでは勝ってるだと？ 寝ぼけた事言ってるじゃね
えぞ！ 気持ちだけで人が救えりゃなア……誰も苦勞はしねえんだ
よっ！」

ますます苛烈を極める両者の舌戦。誰もが口を閉ざして見守る中、
両者の会話に割って入る声があった。

「ま……万夜はどっちでもいい……から……おねえちゃんもお
にいちちゃんも……ケンカしないで……っ！」

声の主は口論の渦中にある少女 亀岡万夜だった。口を挟むだ
けでも相当勇気があったらしく、声を詰まらせて泣きながら切々と
訴えた。

これには賢一たちも頭を冷やさざるを得えず、苛烈を極めた舌戦
は幕となった。

「……決まりだな。こいつは俺のグループとする」
「くっ……！」

賢一は己の無力さを呪った。

もっと自分に力があれば、こんなことにはならなかったはずなの
に……と。

自責する賢一に、猫矢鞠子がそっと囁く。

「犬塚くんは悪くないよ……。万夜ちゃんを守ろうとあれほど頑張
ってくれたんだもの……。だから……自分を責めないで、犬塚くん
……ね？」

「ああ……。……ごめん」

猫矢鞠子の言葉に落ち着きを取り戻した賢一は、羽鳥翔吾を睨み
付けて言い放った。

「万夜ちゃん言葉に免じて今は羽鳥サンに任せますよ。……です
が、万夜ちゃんに傷の一つでもつけようものなら……。その時は
僕たちが万夜ちゃんを守りますから……！」

「ははっ！ 別にいいぜ。もっとも、そんな事にはならないだろう

けどなア！」

そうして三つのグループが出来上がった。

犬塚賢一・猫矢鞠子・鼠入忠治

羽鳥翔吾・兔沢朱音・亀岡万夜

虫賀奏・魚成海斗・鰐淵牙楼

もつとも、鰐淵牙楼は俯いたまま一言も喋ろうとしなかったため、自動的に割り振られた形である。

「じゃあ俺たちは《武器庫A》（こつち）側へ行く。ま、精々頑張つて三階への道を探してくれや、犬塚くん？ はーっはっは！」と、まさにその瞬間。

羽鳥翔吾の高笑いが合図だったかののように、突然テーブルの上にシャンデリアが落下し、食堂全体が大音響に包まれた。

「……………ツツ!?」「……………」

突然の事態に全員の驚きが重なる。

賢一が視線を振つた時には既に、テーブル一面が血の海と化していた。

どうしてシャンデリアが落ちただけで血溜まりが……………と疑問に思い、賢一はテーブルを覗き込んだ。すると。

「うっ……………！ この服装はまさか……………善養寺さん……………!?」賢一の呟きにざわめきが広がる。

頭部はシャンデリアの下敷きになっていたため判然としないが、遺体が身につけている衣服や体格は、紛れもなく善養寺良彦のものだった。

生まれて初めて見る死体を前に、賢一は猛烈な吐き気を催した。

「嘘よ……………嘘でしょ……………!? ああああ……………善養寺さん……………善養寺さん……………!」

善養寺良彦の死を目の当たりにした虫賀奏は、よろよるとおぼつ

かない足取りで歩み寄り、無惨な姿となった遺体に縋って涙した。そう言えば彼女は善養寺良彦のファンだったつけと、賢一は妙に冷めた感想を抱いていた。

「万夜ちゃん、見ちゃダメ……！」

声に反応して振り向いてみれば、猫矢鞠子が亀岡万夜の目を塞いでいた。それも当然のことだと賢一は思った。これ程までに無惨な光景を、弱冠七歳の少女が目にするにはあまりにも酷すぎた。

「ん？ 待って……手に何か持ってる……」

賢一はなるべく損傷が激しい箇所を見ないように、善養寺良彦の手からあるモノを拾い上げた。それは彼が愛用していたメモ帳だった。

メモ帳の大半が血に濡れてしまっているが、まだ渴いていない為、なんとか読み取れた。

開いた状態になっていたページには次のような単語が綴られていた。

《三階》……《怨み》……《扉》……《動物》……《鍵》……《試練》……《脱出》

「……？」

単語の意味は判然としないものの、賢一はある確信を得つつあった。それは脱出経路が三階にあるという可能性。それは？ 忠告文？ の内容とも合致し、僅かながら信憑性を帯びてきたのである。

同時にある不安が鎌首をもたげることとなった。……それは。

「……こつち側にも……化け物がいる……！」

「な……なんですって!？」

信じたくないといった面持ちで、虫賀奏が反応を示す。

それは真新しい見取り図が如実に物語っている事実他にならなかった。

今、賢一たちがいるフロアに辿り着くには、故障したエレベーターを使うか、建物の中心にある連絡通路を通らなくてはならない。しかし、肝心の連絡通路には強固な鍵が掛かっており、且つエレベ

賢一の心配など意にも介さず、鰐淵牙楼はナイフで牽制しながら
出入り口の扉へと向かう。

扉の近くにいた羽鳥翔吾でさえ、ナイフ相手には不利とみたのか、
黙って道を開けた。

「……がろーくん……いかないで……」

眼前を横切る彼に対して、亀岡万夜は寂しそうな声を零した。だが、
彼は痛みに耐えるような表情を浮かべるだけで、行動を止める
には至らなかった。

そして鰐淵牙楼は独り、廊下へと飛び出していった。その間際、
亀岡万夜の視界に、自分が付けてあげたキャラクターもののヘアバ
ンドが踊っていたのだった。

鰐淵牙楼がいなくなった食堂に、重苦しい沈黙が降りる。

「……ったく……これだから中坊は手に負えねえんだよ……。キレ
たら何し出すか判ったもんじゃねえ」

我関せずといった口調でぼやいて、羽鳥翔吾は踵を返した。

「じゃあな」

そう短く告げると、兎沢朱音と亀岡万夜を引き連れて、部屋を出
て行った。

「くそ……どうしてこんなことに……！」

悔しさを噛み締め震える賢一の手を、猫矢鞠子が優しく握り締め
る。

「大丈夫……大丈夫だから………」

「猫矢さん……」

猫矢鞠子は多くを語らなかった。

代わりに、ただ一言「大丈夫」とだけ、何度も繰り返した。

多くの言葉で慰められるよりもその一言の方が、賢一にはずっと
優しく響いた。まるで言葉にしなくても彼女の声が、心に響いてく
るようだった。

「ありがとう……もう大丈夫だから」

「うんっ」

冷静になった賢一は、善養寺良彦の遺体に縋る虫賀奏に視線を向け、口を開いた。

「虫賀さん。……僕たちは三階への道を探しに行きますが……虫賀さんはどうしますか？」

「……」

何も答えない彼女の姿に、「今はそつとしておこつ」と判断し、続けて魚成海斗の正面に屈み込み、声を掛けた。

「魚成さんはどうしますか？」

「ひいひい……ボクはもう……動きたくない……！ 勝手にやってくれ……！」

あまりに顕著な反応に賢一は沈痛な面持ちを浮かべ、諭すように返した。

「ではしばらくここに居て下さい。あの扉の鍵さえ閉めれば、比較的安全だと思いますから」

言い終わり立ち上がると、猫矢鞠子たちの方へと向き直った。

「……行こう。一分一秒でも早く、三階への道を見つけるんだ」

「うん！」

「うむ……それがよかる……ゴホツ……ガハツ……！」

「だ……大丈夫ですか！？ 鼠入さん……」

「ああ……平気じゃ。……問題ない」

「……」

どうもさつきから具合の悪そうな鼠入忠治の様子に、賢一と猫矢鞠子は顔を見合わせるのだった。

「羽鳥サンたちがこつち側へ行きましたから……僕たちは反対側」

「そうですね、とりあえずこの《事務室》を調べてみましょう」

賢一の提案により、三人は行動を開始した。

表面上は冷静を装う反面で、賢一は善養寺良彦の死体に撒かれていた首輪の映像が、脳裏から離れずにいた……。

ランプがすべて消えた……あの首輪の映像が……！

〈魚成海斗〉の場合。

約二十年前。男は働き盛りのサラリーマンだった。

仕事面はやることなすことが功を奏し、同年代と比較しても成功者の部類だった。

しかし、仕事ばかりやってきた所為か、四十を過ぎても男は独身だった。

どうにも出会いに恵まれないと悟った男は、お洒落を身につけようと熱帯魚を飼うこととした。もしかしたらこれをきっかけに、運命的な出会いが訪れるかもしれないという、淡い期待すら抱きながら、最初のうちは良かった。

まるで我が子が出来たかのように世話をし、一心に愛でる日々を送った。

熱帯魚の影響で、それまでお洒落に拘らなかった男が、身なりに拘りを持ち始めもした。

その甲斐もあって、日増しに男の出会いは増えていった。

まさにそれは、仕事とプライベート、両方の充実を体現していたほどだった。

だが、忙しくなりすぎた日々を追われるにつれ、男は熱帯魚の世話を怠るようになっていった。

「あ……また死んでる。……面倒臭いなあもう……」

水が汚れても放置していたり、水温をまったく管理しなかった所為で、魚がことごとく死んでしまったのである。

そんな事態を目の当たりにした男は、ペットである熱帯魚の死を悲しむことなく、生ゴミとして平然と捨てたのだった。そしてまた新しい熱帯魚を買ってくるというサイクルを何度か繰り返した。

「消耗品だと思えばなんてないね」

あまりの頻度に感覚が麻痺したのか、それとも正常な神経の上で言ってるのか判然としないが……いつしかそれが男の口癖となって

いた。

どんな物事にも終わりは訪れる。

取っ替え引っ替えな日々を三年ほど続けたある日、男は遂に熱帯魚を飼うことを放棄してしまった。

金の切れ目は縁の切れ目ならぬ、魚の切れ目は縁の切れ目とでも言わんばかりに、男に接触してくる女性はぱたりと居なくなつた。

すっかり精根尽き果てた男は、死骸を片付けるのも億劫なのか、水槽に蓋をしたまま庭先へ放り出す始末だつた。

それつきり男の頭から熱帯魚の存在は消え失せ、以降二十年弱の間、死に体のような日々を送ることになるのだつた。まるで、何かに追われでもしているかのように……。

そして六十を迎えたある日。

男のもとに一通の手紙が届くのだつた……………。

最初の一步を踏み出す勇氣。

《二階・事務室》

「うごあああああああああ………！」

「鼠入さん………!？」

「あ………頭が………割れそうじゃ………!」

鼠入忠治は辛うじて意識を留めているものの、賢一たちはただ手を拱いて見守っているしかなかった。

賢一たちが《事務室》を訪れたのは、ほんの数分前のことである。典型的な事務机が並ぶ手狭な空間には、様々なファイルや書類が散らばっていた。その部屋の片隅に、ケージに入れられた一匹の肥満ネズミがいた。そのネズミは錯乱状態に陥っているらしく、ケージの中で暴れ回っていた。それを見た鼠入忠治が突然、奇声を発して苦しみ出したのである。

「くそ………何かないのか………!？」

「犬塚くん………! アレは!？」

猫矢鞠子が指差した棚には赤色の十字模様が見て取れた。賢一はすぐに手にした角材でガラスを割り、棚に収められていたアルミケースを取り出した。ケースを開けると中には《精神安定剤》とラベルが貼られた、二本のアンブルが入っていた。

医学の知識の無い賢一に、鼠入忠治の身に起こっている症状は判らない。仮に《精神安定剤》が正しい薬だとしても、今手元にある薬が安全かどうかすら怪しい。なにせここは、どことも知れぬ不気味な施設なのだ。安易に信用すれば毒を食らう結果となる。

「犬塚くん………鼠入さん自身に判断してもらえないかな………？」

「そうだな………それが最善の策か………！」

賢一は鼠入忠治の精神力に賭け、《アンブル》の入ったアルミケースごと、老爺へと差し出した。

「鼠入さん………ここに薬らしい薬はこれしかありませんでした

……。これ、使っても大丈夫そうですか？」

「うがああああ……！」

薬を見詰めながらも、鼠入忠治は苦しげな声を発し続ける。

やがて、ひとしきり叫び、痛みが和らいだのか、鼠入忠治はゆっくりと口を開いた。

「それは僕にも……判らん。……判らんものは……試せば

いいんじゃないよ……！」

「え……？」

賢一には、鼠入忠治の言った言葉の意味が理解出来なかった。

戸惑う賢一をよそに、鼠入忠治はケージの中で暴れるネズミを、

おもむろに手に取った。

(まさかネズミを……！？)

賢一が鼠入忠治の行動を止めようかどうか逡巡する中、老爺は挨拶ほどの軽い口調で衝撃的な事実を打ち明けた。

「僕の身体はのう……既に改造されてるんじゃないよ……」

「え……！？ 改造……？ それは一体どういうことですか……

……！？」

賢一の疑問に対して、鼠入忠治はおもむろに首筋の痣を見せつけた。

「ッ！？」

その痣を見た瞬間、賢一には思い当たる節があった。それは、初めて出会った時、偶然視界に入ったあの注射痕のような痣だったのだ。

「……もしかここに連れて来られた全員が……僕と同じ処置を施されているやもと……心配しておったが……どうやら僕だけのようじゃな……。それが……せめてもの救いじゃて……」

「……鼠入さん……。だからあんなにも……僕に具合を訊ねてくれていたんですね？」

「ああ……そうじゃ。……賢一くんだけじゃない……他の者も……同じくじゃ……」

その言葉に賢一は猫矢鞠子の顔を見た。すると彼女は静かに頷いて見せた。

賢一の知らないところで、この老爺は一体どれほどの気遣いをしていたのか……考えただけでも、賢一は頭が上がらない思いだった。「この儂が……実験台にされる日が来るとは……まったく因果なものよ……」

老爺はその呟きを皮切りに、己の半生を滔々と語り始めた。

「儂は科学者としては成功を収めたのだと自覚してある。……来る日も来る日も実験に明け暮れる毎日じゃったが……別段それを大変だと思つたことはなかつた……。儂にはちょうど万夜ちゃんほどの……孫娘がいるんじゃよ……。その子の未来を儂の手で切り拓いているのだと思えば……。あれほど崇高な仕事もなかつたものじゃ……。しかし……。たとえ人命救助……。ひいては人類の未来のためとはいえ……。儂はあまりにも多くのモルモットや小動物を犠牲にしすぎた……。それも正義のためだと言ひ聞かせねば……。とてもやっていけなんだ……。儂の手は既に……。血塗られた手なのじゃよ」

息も絶え絶えに喘ぎながら、鼠入忠治は言葉を続けた。

「……因果応報とはよく言つたものじゃ……。己が犯した罪は己に返つて来るものなのじゃな……。最後にいい経験をしたわい……」

「鼠入さん……!?! 何を言ってるんですか……。!?! 誰一人……こんなところで死なせたりしませんよ……。!?!」

賢一の悲痛な叫びに、鼠入忠治は穏やかに微笑みを返すだけだった。

「……間もなく……。儂の身体に変化が訪れるじゃろう……。もしそうなつたら……。この《アンブル》を……。儂の身体に打つんじや……。そうすれば……。判別できよう……。!」

そこでようやく、賢一は老爺の真意に気付いた。

老爺が口にした？試す？という言葉は、自分自身を実験台にしろという意味だったことを。

喜びに打ち震える賢一の声が届いたのか、鼠入忠治は薄く瞼を開けた。

「……おお……奇跡じゃ……！ 奇跡が起こったんじゃ……！」

「ええ………！ そうです………！ 起きたんですよ………奇跡が………！ 鼠入さんの言った通りです………！」

涙を溢れさせながら言葉を重ねる賢一とは反対に、鼠入忠治はどこか浮かない表情のように見えた。次に老爺が紡いだ言葉は、賢一の懸念した通りのものだった。

「……奇跡は起こった………じゃが………儂の身体はもうダメじゃ………取り返しがつかんほどに痛んでおる………それはほかならぬ………儂自身が………一番よく判ることじゃ………」

「そ　そんな………！　せつかく助かったのに………そんなのってないよ………あんまりだ………ッ！」

「いや………儂は幸せ者じゃよ。………なんて言っただって………末期に………こうして泣いてくれる者がいるんじゃから………のう」

「鼠入さん………！」

賢一たちにはもはやどうすることも出来ず、老爺の命の灯が消えるのをただ眺めているだけかと思われた………その時。

キキィッ！

不意にケージの中のネズミが鳴いた。

「………？」

なんだろうと気になった賢一がケージを覗いた瞬間、「あ！」と驚きに満ちた声を上げた。

「鼠入さん………！　ほら………見て下さい………！」

そう言っただけ賢一はケージを下ろし、鼠入忠治へと差し出した。

「おお………っ！　おおっ………！」

ケージの中を目にした老爺は、まるで神でも見たかのような、感嘆とも畏敬ともつかぬ声を上げたのだった。

ケージの中では、十匹もの子ネズミが誕生していたのだった。
先刻、錯乱状態に陥ってたと思われたネズミは肥満などではなく、
そのお腹に子供を宿していたのであった。

死する闇の隣に生の光あり。

奇しくもそれは、自然界における縮図のような光景とも言えた。

鼠入忠治は七十年余りにも及ぶ人生の中で、初めて命の重みを痛
感したのだった。

「おおっ……………やはり子を……………宿しておったか……………。よかった……………
…立派な仔じゃ」

その言葉を最期に、鼠入忠治の身体から力が抜けた。

「……………ツ！！ 鼠入さあああああああああああああああ
ん……………！！！」

それ以降、賢一がいくら泣き叫ぼうとも、鼠入忠治の目は二度と
開くことはなかった。

「鼠入……………さん」
老爺の亡骸に縋って感傷に浸る賢一の耳に、猫矢鞠子の声が響い
た。

「犬塚くん……………見て……………首輪が……………！！」

「え……………？」

言われて顔を上げてみると、なんと鼠入忠治の首輪が眩い閃光を
放っていた。

「な……………なにが起こってるんだ……………！！？」

「わ……………わたしに聞かないでよ……………！！」

二人が戸惑う中、首輪が一本の光の鍵を形成したかと思えば、鼠
入忠治の亡骸ごと、忽然と姿を消したのだった。

「え……………消えた……………消えた…………………………？」

「消えた……………みたいだね」

理解の範疇を超えた現象に、ふたりは目を瞬かせて、しばし見詰
め合った。

だが、目の前で鼠入忠治が亡くなった事実には変わりはない。

賢一たちに立ち止まっている時間など、最早ありはしなかった。

「……………行こう。僕たちが生き残るための道を探すんだ……………！」

「うん。一步を踏み出す勇氣……………だね」

「ああ。鼠入さんのためにも何としてでも生き延びてやる……………！」

最後まで諦めるもんか」

確固たる決意を胸に、賢一たちは《事務室》を後にしたのだった。

〈鼠入忠治〉の場合。

老爺は若くして、科学者として成功を収めた。

老爺自身、その事に不満などなく、むしろ孫娘の未来を切り拓く礎となれるならと、意欲的でした。

だが、そんなある日。

老爺は動物実験のプロジェクトリーダーに任命された。実験用に作り出された命とはいえ、罪無き命を奪うのは心が痛んだ。

老爺は身の振り方に懊悩した末、プロジェクトリーダーを辞退しようとした。

しかし、老爺の才能を高く買っていた上層部の人間がそれを許さなかった。

「プロジェクトリーダーを降りるといふなら、孫娘の命はないと思え」

などという脅迫を受け、誰に相談することも出来ず日夜怯えて過ごした。

すでに老爺には対等な選択肢など残されてはいなかった。

成功者だと思っていた科学者として道自体が、巧妙に張り巡らされた罠だった事に、老爺はようやく気付いたのであった。

その時には最早、何もかもが遅過ぎた。

老爺は孫娘を守る為、プロジェクトリーダーとなり、数多の実験を繰り返した。

最初こそ、命を奪う事に抵抗を覚えていた老爺だったが、次第に感覚が麻痺し始め、やがては何も感じなくなっていた。

「あの子の為……………」
事あるごとに老爺はその言葉を呪文のように呟いていたのだった。

時は巡り。

齢七十も折り返して間もない頃。
老爺のもとに一通の手紙が届く事となる。

そして老爺は、不気味な施設で孫のような少年少女と出会ったのだ
った……。

それぞれの末路。

半ば衝動的に《食堂》を飛び出した鰐淵牙楼は、廊下のすぐ左にある扉が開いていることに気付いた。

「なんだ……ここは確か閉まっているはずじゃ……」

誰にともなく呟き、ナイフを強く握り締める。

「出て来るなら出てきやがれ……切り刻んでやるよ……!」

鰐淵牙楼は周囲に神経を張り巡らせながら、扉の奥へと進入していく。薄暗い部屋中央には、階上へと続く階段が伸びていた。

「……階段？ まさかこれが……脱出口へ繋がる階段か……？」

またしても独り言。もはや、何か喋っていないと不安で溜まらなといった様子だ。

表面上は斜に構えていても、中身は中学二年。まだまだ子供である以上、無理からぬことだった。

「くそ……足が痛いな」

異形にやられた傷が疼くのか、鰐淵牙楼は顔を顰めた。

少し休もうとナイフをしまい、階段に腰を下ろした……次の瞬間！

「~~~~ん……ッ!？」

突然背後から、何者かに動きを封じられてしまい、鰐淵牙楼は抵抗すらままならなかった。

そのまま気を失い、鰐淵牙楼の腕が力なく宙を掻いた。

そしてその何者かによって、鰐淵牙楼は階段の先……暗い闇の中へと引き摺り込まれていったのだった。

賢一たちより先に《食堂》を出た羽鳥翔吾たちは、すぐ左手にある扉に鍵が掛かっているのを確認してから、正面の扉へと進んだ。

《鳥籠のある廊下》

「つつ……! 臭せえ……! なんだこの廊下は……!？」

一步、廊下に足を踏み入れた途端、噎せ返るほどの臭気が三人を襲った。

ガシャンガシャンと断続的に響く金属音……
床に散乱したおびただしい数の羽根……

錆びた鉄のような、それでいて生臭く淀んだ空気……

そのすべてが明らかな異常性を訴えていた。

「んふ。いいわア……この二オイ。こつちに来て正解だったみたね
エ……」

唯一、兎沢朱音だけが、この状況に悦楽を感じているようだつた。

「やだよお……万夜、これ以上進みたくない。……怖い……怖い……

……怖い……怖い……！」

「チツ……！今更ガタガタ言つてんじゃねえよ。……嫌でも進む

しかないだろうが」

「やだ……やだ……やだ……！……だつて……あそこに鳥さ

んがいるんだもん……」

尋常じゃないほどの恐怖に震えながら、亀岡万夜は廊下の先を指差した。

「ああ？鳥だあ？」

少女が指差した鳥籠の中には、羽ばたいては落ちるといふ行動を繰り返す鳥が捕らえられていた。怯える少女に構わず、羽鳥翔吾は鳥籠へと近付き、中を覗き見る。

「なんだ……ただの鳥のじゃねえか。こんなもん、あの化け物に比べたらなんてねえだろ」

「あら、ほんと。かわいい鳥さんだわア……解剖してあげたいくらい
い」

兎沢朱音は相変わらず、何を考えているか判らない、妖しげな笑みを湛えている。そんな彼女に縋り付きながら、亀岡万夜は涙声で拒絶する。

「いや……ダメ……ダメなの……！」

「あゝもう！ごちゃごちゃうるせえなあ！……だつたらこつす

揺るがない彼の意思に、亀岡万夜は口を嚙むほかなかった。それでも何とか思い直させる方法はないかと考えていた最中、亀岡万夜は不意に、羽鳥翔吾のランプがひとつ消えていることに気付いた。(あれ……？ この人の明かり……いつ消えたのかな……？)

その事にまったく気付く様子がないまま、羽鳥翔吾は二つ目……三つ目と、立て続けに鳥籠を破壊していった。

最初にいくつ点いていたか判然としないが、今や羽鳥翔吾の首輪のランプはすべて沈黙している。

亀岡万夜は怖々と、羽鳥翔吾へと視線を向ける。息絶えた鳥を見下ろすその顔は、どこか愉しんでいるような表情に思えて、少女は心臓を鷲掴みにされたかのような錯覚を覚えた。

「確かここだったな。武器庫は」

やがて三人は、二つ並びになった部屋の前まで辿り着いた。《食堂》で見つけて見取図によれば、右側が《武器庫A》、左側が《観察室》と記されていた。

羽鳥翔吾は迷う事なく《武器庫A》の扉に手を掛け、ほぼ同時に顔を顰めた。

「な……！？ 鍵が掛かってやがる……だと!？」

部屋の性質を考えればそれも当然のことなのだが、武器を手に入れたという？ 忠告文？ から、彼は？ 扉は開いているはずだと、都合よく解釈していたのだった。一応《観察室》の扉にも手を掛けてみたが、当たり前のように施錠されていた。

「くそっ！ 戻るぞ」

「なアに……武器は諦めるわけエ？」

苛立ちを募らせる羽鳥翔吾を、わざとからかうような口調で、兎沢朱音は問うた。

「んなわけねえだろ。探すんだよ、ここの鍵を。入ってすぐにあった扉はまだ確かめてねえ……まずはそこからだ」

「ふん」

「……」

反対する風でも賛成する風でもなく、兎沢朱音は妖しく微笑む。亀岡万夜は羽鳥翔吾に怒鳴られまいと、恐怖に堪え必死に口を噤んでいる。

鳥の死骸が転がる廊下を戻り、程なくしてある部屋の前に辿り着いた。真っ先に施錠の有無を確認する。

「扉が……開いてる」

羽鳥翔吾は《見取図》の記憶を手繰るように、ゆっくりと口を開いた。

「ここは確か《拷問室》だと書いてあったか……」

二人からの反応はない。受け手不在の言葉は、頼りなく廊下に蔓延る空気に溶けて消えた。

立ち止まっていても埒が明かない事に気付いたのか、羽鳥翔吾は意を決して宣言した。

「……入るぞ」

もはや応答など期待しないといった口調で言い放ち、扉を開けた。羽鳥翔吾を先頭に、三人は室内へと進入した。

《二階・拷問室》

「酷い臭いだ……廊下の臭いはここからか……？」

室内は薄暗かった。

部屋の四方と天井中央に蠟燭の灯が頼りなく揺れるだけ。暗闇になが潜んでいてもおかしくない状況である。天井が妙に高いことも含め、部屋全体の何もかもが異様性を醸し出していた。

「悪趣味な部屋だぜ……まったく。チツ……これじゃあ武器庫

の鍵は期待薄だな。鬼が出ねえ内に引き返した方が

ツ！？」

頼りない光源のもと、据え付けられた拷問具の間などを隈無く調べていた羽鳥翔吾は、不意に視界の端に映った影に息を呑んだ。

彼が目にしたモノ……それは紛れもなく、人間の惨殺死体だった。死後かなりの日数が経過しているのか、腐敗が酷い。顔面には無数の穴が穿たれており、原形を留めないほどに抉られている。直径一

センチにも満たない穴は頭部だけでなく、全身に及んでいた。

「……これは銃創だな……。気の毒なこつた……」

死体をつぶさに観察していた羽鳥翔吾は、その身体の下に何か機械の様なモノがあることに気付き、慎重に引き抜いた。出て来たモノは、アサルトライフルと呼ばれる小銃だった。

「これは……！まさかこいつが……あの？忠告文？の作成者なのか……！？」

「そうねエ。その可能性は考慮に値するんじゃない？」

珍しく返ってきたまともな相槌に驚き、羽鳥翔吾は彼女の顔を見る。ニタアと貼り付くように微笑う彼女の表情に、羽鳥翔吾は思わず視線を逸らした。

「それにしても……」

意外なことに彼女の言葉はさらに続いた。

「銃殺なんて勿体ないわア……解剖したほうがもつと嬉しいのにい

「~~~~ツ！？」

狂ってやがる！

言葉には出さずとも、羽鳥翔吾の顔はそう訴えていた。なるべく兎沢朱音には触れまいと、彼は手に入れた小銃の点検に移る。

念願だった力を手にした喜びも束の間、彼は途端に落胆すると小銃を投げ捨てた。

「……ダメだ。弾切れじゃ使い物になんねえ」

短く吐き捨て、早く鍵を探そうと踵を返しかけた瞬間。

「！？」

羽鳥翔吾は何を思ったのか、突然しゃがみ込み、一心不乱に死体のポケットを漁り始めたのである。そんな彼の行動に対する答えはすぐに出た。

「あ………あつた！これだ……これに違いない………！」

半ば興奮気味に叫び、死体のポケットから血塗れの鍵を取り上げた。

これであの化け物と戦える、という思いからか、彼の表情は喜悅に歪んでいた。

さっそく《武器庫A》へ戻ろうと、立ち上がった直後。

「重たい金属を引き摺っているような音が、廊下から聞こえて来たのだった。不穏な金属音は、三人の脳裏で異形のイメージと直結する。」

「くそ……タイミング悪すぎだぜ……！」

鍵だけはしっかりと握り締めながら、羽鳥翔吾は忌々しげに吐き捨てた。

三人が扉に注意を向ける中、金属を引き摺る音が止み、ゆっくりと扉が開かれた。

「現れやがったな……！」

扉を開けて現れたのは、誰もが予想した通りの異形だった。手には見慣れた大斧を持っている。

しかし亀岡万夜の反応だけは違った。

怖がっているというよりは何かを確かめようとしているような表情を浮かべている。

「なんだこいつ……動きがおかしいぞ……！」

羽鳥翔吾の言う通り、異形は足を引き摺るように歩いている。だからといって角材一本で立ち向かうほど、彼は愚かではなかった。

慎重に相手を見定め、間合いを確保する。

D A A A A A Z Z Z Z G E E E T T T T E E E E E E

……！！

突然異形が吼えた。ビリビリと空気が震撼する。

「一カ所に集まると一撃で潰されかねえ！ 散らばれ！」

羽鳥翔吾の号令に免沢朱音は亀岡万夜の手を繋いだまま、距離を置いた。

対して異形は、室内をぐるりと睥睨すると亀岡万夜らの方へと進路をとった。

しめた、と羽鳥翔吾は色めき立った。出口を塞いでいた障害物が

無くなったからである。

タイミングを見計らい、羽鳥翔吾は扉へと駆けた。

「今、武器を取って来る……！ だからそれまで持ち堪える！」
一方的に言い放ち、部屋を飛び出して行った。兎沢朱音はそんな彼の背中を蔑むような眼差しで見詰めていた。

腰にしがみついて怯える亀岡万夜に向けて、おもむろに口を開く。
「あーゆー男は所詮口だけなのよねエ……？ 守る？ だなんて軽々しく吠えておいて、いざとなったら平気で見捨てるんだから……ほん
と、解剖してやりたいくらいだわア……！」

珍しく感情を露わにする彼女の顔を、亀岡万夜はただ見詰めていた。

D A A A A A Z Z Z Z G E E E T T T T E E E E E E

……！！

奇声を上げながら近付いて来る異形から逃れようと、数歩後ずさった時。

「あー」

亀岡万夜は何か固いものを踏んでしまい、バランスを失って転倒した。

「うう……！！」

泣きたい気持ち堪えて、踏んづけたモノを確認する……と。

「~~~~~ッ!?!」

泣き顔から一転、ともすれば気絶しかねないほどに亀岡万夜は驚愕に凍り付いた。

「ん？ どオしたのオ？ あらア、亀さんじゃない。こんなところにいるなんて不思議ねエ？ ……それにしても酷い怪我じゃない……カワイソウに」

兎沢朱音にとって異形の存在などさほど脅威に思っていないのか、呑気に喋っている。

「亀さん……ケガしてるの？」

恐怖に震え、擦れた声で少女は問う。

亀は少女にとって、もつとも暗く深い巢喰う闇である。本来なら視界に入った時点でアウト。脳裏に過ぎるは過去の苦い記憶……。ずっと燻り続けている己の罪が少女を苛むのだ。

いつもなら少女は間違いないく卒倒していただろう。

しかし今回ばかりは様子が違った。

異形と亀……ふたつの脅威に晒されながらも、何か思い悩んでいる風だった。傷つき弱り果てた亀をしつかりと見据えている。

そして、遂に意を決した亀岡万夜は傷ついた亀にそっと手を伸ばし、両手で持ち上げた。

亀を労るその眼差しは、かつて大の動物好きだった頃の少女に戻っているようであつた。それは少女は自分の力で、心に巢喰う闇に打ち克つた瞬間だった。

少女は亀を抱えたまま、涙ながらに訴えた。

「朱音お姉ちゃん……この子……治してあげて。……お姉ちゃんならできるよね……？」

「そうねエ……解剖すことなら出来るけどオ？」

「ダメだよオ……！　お願い……万夜が困になるから……お姉ちゃんはこの子を治してあげて……！　お願いだよ……朱音お姉ちゃん……！」

切々とした口調で懇願する少女の瞳に何を見たのか……。いつの間にか兔沢朱音の頬には涙が伝い流れていた。

「……！？　お姉ちゃん……どうしたの！？　どこかケガして痛い……！？」

突然の事態に、亀岡万夜は動揺しつつも、彼女を気遣う。そんな少女の言葉に兔沢朱音は静かにかぶりを振った。

「ううん……どこも怪我はしていないのよ。……痛いのは心……かな」

そう答える彼女の口調には、それまでの酷薄さは微塵も表れていない。そこにいるのはただのひとりの女の子に他ならなかった。

涙を拭くと、兔沢朱音はおもむろに口を開いた。

「あんだ……なんだかんだで動物が好きなんだね……。その瞳を見ていると判るよ……。まるで昔のアタシを見ているようでさ……」

「朱音……お姉ちゃん……？」

「アタシも昔は動物が好きだった。だからこうして医大にも入ったんだ……。けど……。ある日の事故を境に……。アタシは本当の意味で動物を好いてはいなかったんだと気付いたのさ」

「兎沢朱音は過去を思い返すように、滔々と語った。亀岡万夜は黙って耳を傾けている。」

「恐らくそれが……。本来のアタシだったんだろうね。……。動物を解剖^ラしたいという衝動……。それこそがアタシの本質だったんだよ。まったく……。我ながら救いようがないよ」

くすつ、と自嘲気味に嗤う。

「けど……。アタシもあんだくらいに小さい頃にはもしかしたら……。純粋に動物を好いていた心があつたのかも……。知れないよね。だからさ……」

一旦言葉を切った彼女は、何かを吹っ切ったような、晴れやかな表情で、亀岡万夜を見詰めて言葉を継いだ。

「あんだの勇気を買って、最初で最後の頼みを聞いてあげてもいいかなって ね」

「朱音お姉ちゃん……。！ ありがとう！」

花が咲いたように笑顔を弾けさせる少女に、兎沢朱音は優しく微笑みを返した。

「さて、問題はここをどうやって脱出するかよね……」

「やっぱり万夜が囿に……。！」

「バカね。あんだの命を引き替えに助かったって、その子は喜ばないんじゃないかしら？」

「うう……」

「いいこと？ 何が何でも二人で脱出するわよ？」

「うう……。うん……。！」

「よし。いい子ね」

方針が決まり、改めて異形と対峙する二人。そこでようやく、彼女たちは状況の不可解さに気付いた。

「そういえばあいつ……さっきから動く気配がないけど……どうしちゃったのかしら？」

彼女の言葉を受け、異形をつぶさに観察していた亀岡万夜が、あつる事に気付き声を上げた。

「朱音お姉ちゃん……見て！ 怪物さんの足が……！」

その指摘通り、異形は右足からどす黒い血を流していたのだった。その所為で思うように動けずにいたのだらうと、二人は判断した。

「……けど……通り抜けるのは簡単にはいかなさそうね……」

兎沢朱音は異形の得物を見据えながら呟く。それもすべて、威圧的な存在感を放つ、全長三メートルにも及ぼうかという大斧の所為だった。一か八かで横を通り過ぎようものなら、その瞬間に真つ二つにされかねない状況である。むしろ異形が動いてくれない分、厄介ともいえた。

D A A A A A A Z Z Z Z Z G E E E T T T T T E E E E E E

……！！

三度、異形の咆哮が轟く。

普通なら立ち竦むしかない状況の中で、亀岡万夜はまったく別のことを考えていた。

「……もしかして助けてほしいんじゃないかな……」

「ちよつとあんた……アレを普通の動物と一緒にする気？ どう考えてもそれだけはあり得ないわよ」

「……お姉ちゃん……少しだけこの子をおねがい……」

神妙に呟いて、亀を預けた。

「ちよつと……何をやる気!？」

兎沢朱音の制止も聞かず、亀岡万夜は異形へと近付いていく。怖いには変わりないらしく、小さな背中ではカタカタと震えている。

それでも気持ちを強く持ち、亀岡万夜は自らのワンピースに手を掛けた。

「……つつ！」

ありつたけの力を籠めて引き裂くと、一本の布帯 即席の包帯を作った。そしてなんと、その包帯を異形の傷ついた右足に巻いてのけたのだった。

「な……なんて子なの……！」

その行動にはさすがの兎沢朱音も驚きを隠せないといった表情である。

「ごめんね……こんな手当てしかできなくて……」

亀岡万夜がそう呟くと、異形は手にしていた大斧を取り落とし、その場にくずおれた。

「今よ……！早く走って！」

咄嗟の判断で兎沢朱音は動いた。異形の隣で佇む亀岡万夜の手を引き、扉へと駆ける。

「あ……！」

前を向こうとした刹那、亀岡万夜と異形の視線が不意に交錯した。「……」

亀岡万夜は異形の瞳に、既視感にも似た引つ掛かりを覚えた。

だが、その答えを導き出す間もなく、兎沢朱音に手を引かれ、二人は最初に訪れた《実験室》を指すのだった。

《二階・食堂》

賢一たちが部屋を出て行った後、魚成海斗は部屋の片隅に置かれていた《汚れた水槽》を無言で破壊した。

「やっと静かになったかと思えばあんた……一体なにをやってるんだい？　そういうえば《中央ホール》でも同じ事をしていたね？　単なる八つ当たりとは事情が違うんじゃないか？」

「……なんだつていいじゃないか……ボクのこととは放っておいてよ」

「はあく嫌だねえ。……あんた、もう少ししゃんと出来ないのかい。とてもあたしより年上とは思えないよ。情けない男だよ。……おや？」

そう言って虫賀奏が《食堂》の扉を開けた、次の瞬間。

「~~~~~ッ!？」

虫賀奏は視界に、正面の扉へと入っていく異形の姿を捉えたのだ。間一髪のタイミングに心臓が飛び跳ねた。恐怖のあまり声が出なかったのが唯一の救いだ。

こうなってしまった以上、羽鳥翔吾らとの合流は不可能。かといって《食堂》に留まる気にもなれない彼女は、仕方なく賢一たちと合流することにした。

《二階・鏡のある廊下》

壁に鏡が設置されている不気味な廊下を恐る恐る進む、虫賀奏と魚成海斗。廊下は数メートルで右に折れていた。

「あ……階段」

正面に下り階段を認めた魚成海斗が声を上げる。

「下りたきや下りな。あたしゃあの子らと合流するよ」

「……ボクもそうする」

階段を下りるのを諦め、魚成海斗は彼女の後続く。程なくして《事務室》に着いた。

「確かこの部屋さね……調べるって言ったのは……」
誰にもなく呟いて、扉を開けようとした瞬間。

GYAZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ!!

またしてもさっきの奇声が轟いた。しかも相当近い。

否。むしろ、目の前の部屋からだと判断した時には既に、二人とも冷静さを失っていた。

「ひiiiiiiii……!」

魚成海斗は来た道を引き返し、さっき目をつけた階段を下りていった。

「どっなつてんだい……この施設は……!？」

施設を呪いながら虫賀奏は《事務室》正面の扉を開けようとする。しかし、運の悪いことに鍵が掛かっていた。

「とことんついてないさね……!」

言いながら兎沢朱音から拝借したヘアピンを取り出し、ピッキングを試みる。不幸中の幸いともいえるべきか、扉の鍵はあっさりと開いた。

「くっ……！」

半ば転がり込むようにして、虫賀奏はその部屋に避難した。

室内は比較的明るく、書棚に机、インテリア用に花瓶まであり、どこことなく書斎のような内装になっていた。虫賀奏が室内の様子を眺めていると、床についた手の上を、何かが這い、そのまま走り抜けた。

「ひっ……！」

ソレを確認するや否や、虫賀奏は怖気を震った。手の上を這ったのは一匹の昆虫だった。

「この……っ！」

我を忘れた虫賀奏は、近くにあった花瓶を手にとると、そのまま昆虫を圧殺してのけたのだった。その瞬間に首輪のランプがすべて消えたことに気付く術もなく……。

「はあ……はあ……！」

昆虫の体液がこびりついた花瓶を床に置くと、虫賀奏は正面を見据えた。そこにはさらに奥へ続く扉があった。心理的に、少しでも奥に隠れたいという思いが彼女を突き動かした。

恐る恐る隣の部屋に足を踏み入れる。

《二階・???室》

その部屋は？書斎？と比べ、薄暗かった。何か四角い箱状のモノが壁面にならんでいるようには見えたが、ソレが何なのかは判然としなかった。

だが、やがてやがて暗闇に目が慣れ始め、箱の中身を目の当たりにした彼女は我が目を疑った。

「まさか……これは!？」

ある可能性が鎌首をもたげた刹那、背後の扉が勝手に閉まり、室内に警報が鳴り響いた。

生命反応を感知。これより作業工程に入る

「え……………？　ちよつと……………どうして閉まるのよッ！？　開けなさいよ……………！」

力任せに叩こうが、扉はビクともしなかった。

注意力の足りなかつた自分自身を呪っている内に、どこからともなく機械音が響き、その数秒後、室内に謎のガスが噴射された。

「やっぱり……………これは……………！！？」

驚愕に満ちた恐怖をその瞳に映したまま、虫賀奏は力なくその場に倒れ込んだのだつた。

《一階・動力制御室》

「ハツ……………ハツ……………ハツ……………！！……………？　ここは……………動力制御室……………なのか？」

魚成海斗が無我夢中で逃げた末に辿り着いたのは、施設の心臓とも言える《動力制御室》だつた。部屋には無数の計器類が備え付けられており、空気はどこか油っぽい感じがした。

ふと視線を巡らせてみれば、古い石油をぶち込んだかのような、《汚い水槽》が置いてあつた。反射的に壊そうかと思つた魚成海斗だつたが、中身が油ということもあり、寸でのところで衝動を堪えた。

気を取り直して計器類に視線を遣る。ところどころに赤色ランプが点り、エラー表示が出ていた。

「あのエレベーターは油圧式だつたのか……………。なるほど……………確かにエラーが出るな」

しばらくスイッチを弄つたり、キーボードを操作したりしながら、魚成海斗はエレベーター復帰の算段を立てていた。

動力図を見る限り、エレベーターが三階まで伸びている事に気付いたからだ。エレベーターさえ直れば、自分だけでも脱出出来るかもしれない……………そんな不確かな希望に縋らなければならぬほど、彼は追い詰められていた。

「問題はここじゃないな……直接動力室を見ないことには……。…
…あそこから行けそうだ」

入り口の反対側に扉を認め、魚成海斗は隣の部屋へと移った。そこには雑多な備品が山と積まれた、《備品室》だった。左右に扉がひとつずつあり、それぞれ《動力室》《武器庫B》というプレートが掲げられていた。

「……武器庫か……。ははっ……。ますます完璧だな……。！」

恐怖心を隠そうと、彼は誰もいない空間で虚勢を張る。念のため、先に武器を調達しておこうと扉に手を掛けたが、どうやら油圧制御されているらしく、扉はまったく反応しなかった。

「まあいい。どうせすぐに手に入れられるんだから……。！」

そう言っただけで諦めると、今度こそ《動力室》へと足を踏み入れた。

「あつた……。これが制御盤……。……。だよね？」

急に不安になったのか、声のトーンが低くなる。なぜなら今、彼の目の前にある制御盤は普通の構造ではなく、油を注ぐであろう注入口が妙に大きい特注品だったからに他ならない。その大きさは制御盤によじ登らないと注入口が見えない程である。

ただ油を入れるだけで、どうしてこんなにも大きな注入口が必要なのか……。その真意を魚成海斗は量りかねていたのだった。

今それを気にしていても埒が明かないことに気づき、思考を切り替える。

「……。やっぱり油が切れてる。……。確か隣が備品室だったな……。ストックがあればいいけど」

独り言を呟きつつ、一旦部屋を出て、替えの油を探し始めた。

しかし、部屋のどこを探しても油のストックは見当たらなかった。「くそ……。なんで無いんだよ……。！」

苛立ちを露わに、魚成海斗は棚の備品を床にぶちまけた。けたたましい音が鳴り響き、不意に静寂が訪れる。

「そうだ……。！」

急に思い立った魚成海斗は、《動力制御室》へと戻った。そして

部屋にあった《汚れた水槽》を抱え、《動力室》へと急いだ。

「ちよつと汚れてるけど一応油には変わりない……これで一度くらいは動くだろう……！」

祈る思いで彼は制御盤をよじ登り、注入口の横に腰掛けた。油を注ぎ込み、空になった水槽を床に投げ捨てた。床に接触した衝撃で《汚れた水槽》は粉々に砕け散った。同時に、彼の首輪に点っていた最後のランプが、静かに沈黙したのだった。

「……おかしいぞ……なんで動かないんだ……？ くそっ……！
こうなつたら機械系統を直接整備するしかないな……！」

そう考えた魚成海斗は、一旦下りようと腰を浮かした瞬間。

「わっ……！？」

知らないうちに飛び散っていた石油に足を取られ、あるうことが魚成海斗は注入口へと転落してしまつたのだった。

「痛ッ…………！」

不意に鋭い痛みが脹ら脛に走った。どうやら転落の際に、注入口の中にある歯車のような部品で切ってしまったらしかった。よく見ると歯車の先はナイフのように鋭利になっていた。さながらそれは歯車ならぬ、？刃車？といった異様さを漂わせていた。

「なんだ……この部品は……？ こんなもの……普通の制御盤にはないのに……！？」

自分で注いだ石油にまみれながら思索していると、突然、その刃車が重低音を響かせて動き出した！

「ひいひい……ッ！」

無情にも刃車が迫る中、魚成海斗は刃に映り込んだ自分の姿を見てハツとした。

「ランプが……全部消えてる……！？ そんな………いつの間に……！？」

魚成海斗の恐怖に引き攣つた叫びも虚しく、刃車の駆動音に掻き消された。

その数十秒後。

隣の《制御備品室》では《武器庫B》のロックが解除される電子音が高らかに鳴り響いたのだった。

《二階・鳥籠のある廊下》

亀岡万夜らを置き去りに《拷問室》を飛び出した羽鳥翔吾は、無事《武器庫》でショットガン・アサルトライフル・グレネードランチャーなどを入手することに成功していた。

それらを身につけ、完全武装を遂げた彼は今、彼女らが待つ《拷問室》へと戻っている最中だった。

「これで化け物の脳天に風穴を空けてやるぜ……！」

明確な力を手にしたことですっかり勇み立った羽鳥翔吾は、不敵な笑みを浮かべてひとりごちた。

一分もかからずに《拷問室》まで辿り着いた彼は、ショットガンのフォアエンドをスライドさせ、ショットシエルを装填。いつでも発砲できる態勢をとった。

深呼吸をして呼吸を整え、湧き起こる勢いのままに羽鳥翔吾は《拷問室》へと突入した。

「そこまでだ、化け物……ッ!!」

高らかに叫んではみたものの、室内の光景を目にした途端、彼の思考はフリーズした。

「な……っ!?!? いない……だと!?!?」

そう、室内には誰の姿もなかった。

異形はともかく、亀岡万夜らの姿まで忽然と消えている事実には、彼は狐につままれたような顔で立ち尽くす。

「くそ……せつかく武器を手に入れてきたっていうのに……あいつらどこ行っただよ」

射撃の腕を披露する機会を失ったとばかりに不満を口にしながら、羽鳥翔吾は何か手掛かりは残ってないかと室内に歩を進めた。

ガシャーーーーーッ!!

「……ッ!?!?」

突然、出入り口の扉に鉄格子が下りてきて、羽鳥翔吾は《拷問室》に閉じ込められてしまった。思うように事態が飲み込めない羽鳥翔吾は、ショットガンを構えたまま、前後左右へとしきりに視線を巡らせ、警戒態勢をとった。

「くそがッ……！ 上等じゃねえか……出て来やがれ……ッ……ショットガン（コイツ）でぶっ飛ばしてやつからよオ……ッ！」

恐怖心に吞まれまいと必死で吼え猛り、見えざる敵を威嚇する。

バサッ！

「……！！ そこかッ！」

背後で上がった物音に、素早く反応してショットガンを構えた。

……だが。

「あ？ なんだ廊下にいたのと同じ鳥^{やっ}じゃねえか……まだいやがったのか」

警戒を解き、いたぶるような目付きで鳥へと近付いていく。すると危険を察知したのか、鳥は決死の羽ばたきをみせ、天井へと逃れようとする。

「はっ！ 逃がすかよ！」

俄然やる気になった羽鳥翔吾は、得物をショットガンからアサルトライフルへと変更。素早くセーフティを解除して、直ちに発砲した。

タタタッ……タタタッ……！！

三点バーストで撃ち放った弾丸は狙い通り標的に命中した。翼を撃ち抜かれた鳥は揚力を失い、床へと落下した。

それを見届けた羽鳥翔吾は、数メートル離れた位置でアサルトライフルを構え、まるで射撃訓練でもしているかのようにシングルショットを幾度となく実行した。弾丸が一発放たれるたびに、鳥の身体が干切れ、鮮血が飛び散った。

「ふはは……俺様に恐怖を味わわせてくれた罰だ。ありがたく受け取りな」

身勝手な理屈を並び立てて、羽鳥翔吾の凶行はなおも続いた。

やがて命尽き果てた鳥は、突然、光となって消え失せた。

「……………あ？」

不可解な現象に羽鳥翔吾が怪訝に表情を歪めていると。

ビスッ！

「~~~~！？ ぐわっ……………！」

何の前触れもなく突然、右太腿を撃ち抜かれたのだった。激痛が走り、堪らず片膝をつく。

「だ……………誰だ……………！？」

射線方向に向かって、ドスの利いた声で叫ぶ。すると部屋の三階付近に照明が点り、そこに設けられたテラスに立つ人影が露わとなった。

現れた人影に羽鳥翔吾は思わず瞠目した。

「なんだ……………ありや……………！？」

テラスに現れた人影……………それは鳥頭のマスクを被った存在だった。あまりの不気味さに悪寒が駆け巡る。

「今撃ちやがったのはてめえか！？ 何者だ、てめえ……………！？」

しかし鳥マスクは何も答えず、スツと右手を上げた。

刹那、今度は彼の左太腿を耐えがたい激痛が襲った。

「ぐっ……………あ……………っ！」

立っているのもままならず、床に倒れ込む羽鳥翔吾。

辛うじて顔だけ上げてテラスを睨み据えると、人影がひとつ……………またひとつと増えていき、遂には鳥マスクが《拷問室》をぐるりと囲むように配置された。尋常ならざる光景に羽鳥翔吾の鼓動が早鐘を撞く。

リーダー格っぽい鳥マスクが合図を出すたびに、羽鳥翔吾の身体が穿たれ、血飛沫が舞う。

「ぐああああああ…………… ツッ！！」

苦悶の叫びを上げ、羽鳥翔吾は床をのたうち回る。集中砲火が一旦止んだ刹那、彼の優れた視力は、鳥マスクの下に隠された眼を、ハッキリと映し出していた。

(あれは……命を弄ぶ者の眼………ッ！ 絶対的強者による………
………命の搾取………！！)

不意に今の状況が、過去に自分が行っていた行為そのものだと
いうことに気付いた。

(まさか………これは………)

全身の感覚が麻痺し、痛みを忘れた羽鳥翔吾の頭には、もはや恐
怖しか残っていないかった。

そんな彼が絶望に打ち震える中、鳥マスクのリーダーはおもむろに
その頭部を外して見せた。

マスクの下にも鳥の頭があった。

「まさかこれは………怨み返しだともいうのかああアアアア
アアアアアア!?!」

悔しさと恐れのあまりに湧き起こった疑問を、羽鳥翔吾は最後の
力を振り絞って叫んだ。

その疑問に答えるかのように、鳥頭のリーダーは静かに合図を出
した。

「やめろおおおおお………この子………なんだか元気がなくなってる
………」

必死の叫びも虚しく、彼に狙いを定めていた百近い銃口が、一斉
に火を吹いたのだった。

「朱音お姉ちゃん………この子………なんだか元気がなくなってる
みたいだよ………。はやく手当してあげないと………」

「もう少しの辛抱よ。………《実験室》まで行けば………アタシが治し
てあげるからね」

「うん………!」

《拷問室》を飛び出した二人は《食堂》へと戻り、一階へと続く
エレベーター室までやってきていた。

もしかしたら故障が直っているかもしれないと期待していたが、
やはりエレベーターは《Error》表示を出したまま沈黙してお
り、その所為で足止めを食らっているところだった。

「いい加減動きなさいよ……っ……この役立たず！」

焦燥感も露わに、兎沢朱音はエレベーターの呼出ボタンを押し続ける。それでもエレベーターは一向に動き出す気配すらみせない。

「お姉ちゃん……この子……助からないの……？　もう……ダメなの……？」

「バカね……。あんたがそんな顔してたら、その子も不安になっちゃうでしょ？　……いいこと？　誰かを救う秘訣はね　最後

まで諦めないことなんだよ。判ったら顔をあげて、涙を拭きなさい」

「ありがとう……お姉ちゃん。……万夜、あきらめないからっ……！」

「いい子ね……。いつでもその気持ちを……忘れずにね……」

亀岡万夜が確固たる意思を示した直後、軽快な電子音が響き、エレベーターの《Error》表示が消え去った。突然の復旧に、二人は目を見開いて驚いた。

「見て……万夜ちゃん。どうしてか判らないけど……エレベーターが直ったよ。……運命の女神は……まだアタシたちを見放しちゃうなかつたみたいだね。これで……その子を助けられるよ……！　さ、行くよ！」

「うん！」

昇降ボタンを押してエレベーターに乗り込んだ二人は、程なくして一階へと降り立った。

そのまま脇目も振らずに《T字型廊下》……《中央ホール》……《足跡のある廊下》と走り抜け、遂に《実験室》まで辿り着いた。

「と。先に《薬品室》に寄るよ。必要な薬を揃えないと話にならないからね」

そう言っつて《薬品室》に入った兎沢朱音は程なくして、手に様々な薬瓶を抱えて戻ってきた。二人は顔を見合わせて頷き、《実験室》へと入っていった。

亀の手当ては予想以上に困難を極め、緊急手術という一大事にまで発展した。

劣悪な環境下に居たことによる栄養失調が見られ、亀は酷い衰弱状態に陥っていた。さらに腹部には数カ所の銃創が見られ、弾丸の摘出が急がれる状況だった。

「おねがい……………神さま……………亀さんを……………助けてあげて……………！」

一分一秒が永久ほどにも思える時の中で、少女は作業台の横に立ち、亀の無事を一心に祈り続けた。

それから一体どれほどの時が経っただろうか……………。

極度の疲労と緊張感が二人の心身を削る中、兎沢朱音が達成感に満ちた、軽やかな声を上げた。

「万夜ちゃん。亀さんの手当ては無事成功したわ。もう大丈夫よ」

「ほ……………ほんと！？ 朱音お姉ちゃん……………！」

「ええ。ほんとよ。これも万夜ちゃんが一生懸命お祈りしてくれていたお陰だね」

穏やかに微笑んだ兎沢朱音は、元気になった亀を少女へと手渡した。

「うう……………よかったよう……………亀さん……………元気になって……………よかったよう……………！」

少女は元気になった亀に過去の影を重ね合わせたのが、大粒の涙を流して無事を喜んだ。

そんな喜びも束の間、少女の胸に抱えられていた亀が突然、光の泡となって消失したのである。

「……………！？」

突然の事に驚く亀岡万夜にさらなる現象が起こる。

なんと亀岡万夜に嵌められていた首輪が外れ、瞬く間に一本の鍵を形成したのである。

「え……………？ え……………？」

困惑する亀岡万夜に、兎沢朱音が優しく語り掛ける。

「それはきつと、さっきの亀さんが、あなたに？ 生き延びろ？ って

言ってるんだと思うよ。目的は果たしたんだ……早くあいつらと合流するといい」

「じゃ……じゃあ朱音お姉ちゃんも一緒にいこうよ……」

少女の誘いに、しかし兎沢朱音は静かにかぶりを振って、自身の首輪を指し示した。

「どうやらアタシはお呼びじゃないみたいなのよ　ほら、首輪コルもしっかり着いてるしね」

「そ……そんな関係ないよ……！　それにお姉ちゃんは亀さんを助けてくれた……きつと神さまも許してくれるよ……！　だからお姉ちゃん……一緒にいこうよ……！」

「……万夜ちゃん……」

懸命の説得が功を奏し、兎沢朱音の気持ちも僅かに傾こうとした……次の瞬間。

プツプウ

聞き慣れない声を発したのは、一羽のウサギだった。途端、兎沢朱音は血に飢えた獣さながらの眼差しをウサギに向けていた。そして、亀岡万夜に背を向けると、消え入りそうな声でこう呟いた。

「あんたと出会えて……アタシは過去の気持ちを思い出すことが出来たわ……ありがとう」

一度言葉を切り、さらに続ける。

「……アタシはあんたと一緒にはいけない……いっちゃいけない人間なのよ」

「……お姉ちゃん？」

「それにアタシはまだここでやるべき事が残ってるの……だからあんたは先に行きなさい」

「やだ……やだよお……！　お姉ちゃんも一緒に」

駄々を捏ねる亀岡万夜に、兎沢朱音は一喝する。

「いきなさいッ！」

「ッ！？」

彼女の怒号に気圧された亀岡万夜は、瞳から涙を溢れさせた。

彼女の背中に、少女はもう一緒に行く事は叶わないのだと悟った。そして最後に兎沢朱音の姿をその瞳に焼き付けようと涙を拭い、数秒の間、ただただ見詰め続けたのだった。

「万夜……さ……先にいつてるね……用事が済んだら……お姉ちゃんも来てね……？」

それは一縷の望みを託した、心からの言葉だった。

少女の言葉を受け、兎沢朱音は震えた声で返した。

「……もちろん……よ。……すぐに……追いつくわ」

「……！」

その答えをしかと聞き留めた亀岡万夜は、目元に滴を煌めかせながら《実験室》を飛び出して行ったのだった。

独りになった部屋の中で、兎沢朱音は最後にぼつりと呟いた。

「……いきなさい。……強く……」

……生きて……！」

鼠入忠治の死を見送った後。

賢一と猫矢鞠子が《事務室》を出ると、正面の扉が半開きになっ

ていた。

気になった二人は皆との合流より先に、室内を調べることにした。書斎のような内装の部屋には、二匹の昆虫がいたが、賢一たちは特に何をするでもなく、奥の部屋へと進んだ。

そして丁度今……その部屋で恐るべきモノを発見したのだった。

「む……虫賀さん……！？」

「いやああ……ッ……！」

賢一たちが見上げるのは四角い箱の中で磔にされた虫賀奏の姿だった！

それは光景はまるで、昆虫標本ならぬ『人間標本』と呼ぶに相応しい代物。あまりにも残酷で生々しい光景に、賢一は正気を失いそうになった。虫賀奏が収められているケースを力一杯叩き、賢一は嘆く。

「くそ……！ グループなんかで分かれなきや……助けられたかも知れないのに……！ 全部……全部、僕の所為だ……！」

賢一は虫賀奏の標本を見詰めながら、己の軽率さと無力さを呪った。

ひとしきり後悔をぶちまけた賢一は、落ち着き払った表情で猫矢鞠子へと顔を向けた。

「行こう……他のみんなが心配だ……！」

「うん……みんな、無事だといけど……」

「無事さ！ ……無事に決まってる……ッ！」

猫矢鞠子に対する返答というよりは、自分自身に言い聞かせるように声を張り上げた賢一は、素早く踵を返し、《標本室》を飛び出す。《鏡のある廊下》を走り、《食堂》へと急ぐ途中で、賢一は階段の下から誰かの悲鳴が聞こえたような気がしたのだった。

「今のつて……もしかして……」

「悲鳴……に聞こえたけど……」

猫矢鞠子にも聞こえたこと判った途端、賢一は進路を変更。先に悲鳴の原因を突き止めることにした。階段を駆け下り、扉を開け放つて入った部屋は計器類が並んでいた。

《一階・動力制御室》

そこに誰の姿も無いことに安堵した賢一だったが、奥へと続く扉を認め、冷や汗が伝う。

「奥への扉が……開いてる。……ここに……誰かが来たんだ……」

……

「無事だといけど……」

「けど……さっきの悲鳴は……！」

脳裏をよぎるのは異形の存在。

まさかこの先に異形が……？ そう考えただけで足が竦む思いだった。

しかし、立ち止まっても居られない賢一は、覚悟を決めて奥へと進んだ。

《一階・動力備品室》

室内は何者かに荒らされた形跡があった。一度は抑え込んだ恐怖心が鎌首をもたげる。

「……こっちは《武器庫》……か」

賢一は先に右側の部屋を覗いた。中には映画でしか見たことのないような銃器が収められていた。願ってもなかった力を前に、しかし賢一はそれを手に取るうとは思わなかった。

異形が脅威なのは確かだが、それ以上に自分が銃ソレを撃つことの方が、よっぽど恐ろしく思えたから……。

そう考えた賢一は、静かに部屋から離れたのだった。

そして、もうひとつの扉を開け、細心の注意を払いながら一歩足を踏み入れた瞬間

《一階・動力制御室》

「……！」「……！」

賢一と猫矢鞠子は噎せ返るほどの腥さに、口元を塞ぎ、顔を顰めた。

さらに部屋の奥へと歩を進めた、まさにその時。

「きゃあぁッ！ い……犬塚くん……あれ……あれ……！」

何かを認め、慄く猫矢鞠子。その視線を辿り、賢一もそれを目の当たりにした。

「ま……まさか……これは……魚成……さん……？」

二人の目の前……。制御盤に備え付けられた注油タンクは血液で満たされていた。その中に、全身を鋭い刃物で切り刻まれた、魚成海斗の変死体が漂っていたのだった！

「そ……そんな……魚成さんまで……っ！」

「いや……いやあぁあぁっ……！」

またしても救うことの出来なかった命を前に、賢一は、やり場のない悔しさを壁にぶつけることしか出来なかった。

魚成海斗がつけていた首輪が、血溜まりの水槽に虚しく浮かんで

いた。

「……まさか……他のみんなも……!?」

「そんな……!」

「急ごう……! 一刻も早く、みんなと合流するんだ……!」

「うん!」

いつ折れてもおかしくない心を必死に繋ぎ止め、賢一たちは急いで来た道を戻った。《鏡のある廊下》を駆け抜け、《武器庫A》へと続く扉を開け放った。

《二階・鳥籠のある廊下》

「くそ……みんなはどこに行ったんだ……!」

入ってすぐの部屋 《拷問室》を調べようとした賢一だったが、扉は何かにつかかっているらしく、開けられなかった。仕方なく他を当たろうと思いを切り替えた。

次に鳥籠が散乱する廊下を進んだものの、先の扉はどちらも閉まっており、周囲に誰の姿もなかった。

残るは入り口の突き当たりにある扉だけだったが、そっちは難なく開いた。そこは細長い通路が延び、左側に牢屋のような檻が五つほど並び、殺伐とした部屋だった。檻の中には人間のものと思しき死体が放置されているだけで、これといった異変は見られなかった。

「なに……この部屋……」

一応奥まで進み、何も無いことを確認してから、賢一は言葉を返した。

「判らない……見た感じ監禁室か何かだとは思っけど……。……こ

こには誰もいないみたいだし、他を当た

そう言っ部屋を出ようとした時。

「待って」

思いがけず猫矢鞠子の制止が掛かった。

「……どうかしたの?」

賢一が訊ねるが、猫矢鞠子は檻の中の一点を見詰め、沈黙している。どうやら賢一の声にすら気付いていない様子だった。早く他の

メンバーの無事を確認したい思いの中、賢一は様子を見守ることに決めた。

賢一はふと、猫矢鞠子が見詰めているモノに視線を遣った。檻の中には年季の入ったペット用の皿が置いてあるだけだった。

(なんだ……ネームを削り消してるのか……?)

よく見るとその皿には一部、削った跡があつた。賢一は恐らくそこに、持ち主の名前が書いてあつたのだろうと推測した。

直後、猫矢鞠子が頭痛を訴え、その場にしゃがみ込んだ。

「痛っ……頭が……っ！」

「お……おい……大丈夫か？」

「うん……なんとか大丈夫みたい……」

「あの皿が……どうかしたのか？」

「ううん……判らない……。判らないけど……あれを見てるとなんだか心が痛くて……」

「困つたな……。とにかく今はみんなを探さないと……！ 気になるだろうけど皿のことは気にしない方がいいよ」

「う……うん……そうだね……」

「……」

その時、猫矢鞠子の首輪のランプがひとつ消えた事に賢一は気付いたが、咄嗟に声に出すことが出来なかった。

結局言い出すことが出来ずに、部屋を出た賢一は《食堂》へと急ごうとして、ある異変に気付いた。

「あれ……？ この扉……開いてたっけ？」

そんなはずはないと判りながらも疑問の声を上げた。

「……開いてなかったよ。ちゃんと調べたじゃない」

猫矢鞠子の答えに確信を持つと同時に、賢一は背筋に悪寒が走るのを感じた。

「……調べる……しかないよな」

「う……うん……っ！」

緊張した面持ちで扉を開け、室内を覗いた瞬間、賢一は考えるよ

り先に駆け出していた。

「羽鳥さん……………!?」

なぜなら、まるで見せしめのように、スポットライトで照らされた部屋の中央に……………全身蜂の巣にされた羽鳥翔吾の姿を認めたからであった。賢一はその場にくずおれる。

「そんな……………羽鳥さんまで……………!!」

確かに気に喰わない男だと思った……………けど死んで欲しくなんてなかった……………。

賢一はそんな悲痛な思いを心の中で叫んだのだった。

既に四人の死を目の当たりにしてきた賢一は、もはや限界に達しようとしていた。

そんな賢一の心に、猫矢鞠子の声が染み渡る。

「犬塚くん……………」

(そうだ……………ここまでできて立ち止まるワケには……………いけないんだ……………!)

初めの頃……………彼女のことを絶対に守ると決めた自分自身の決意を思い出し、賢一はしっかりとした動作で立ち上がった。

「そんな顔しないでよ……………猫矢さん。……………大丈夫……………僕がついてるから」

ありふれた言葉だと賢一は思った。そんな言葉など、気休めにもならないことも判っていた。しかし、凄惨極まるこの状況下で、出て来た言葉はそれだった。

逆に不安にさせてしまったらどうか……………。そんな賢一の不安とは裏腹に、猫矢鞠子は穏やかな笑顔を見せたのだった。

「うん！ わたし信じてるから……………犬塚くんのこと、信じてるから……………!!」

「猫矢……………さん」

「わたし、少しでも犬塚くんが元気になるように笑顔でいるから……………だから、最後まで一緒に……………諦めずに頑張ろうね……………っ!」

「ああ!」

確固たる意志を漲らせ、賢一は答えた。《拷問室》を後にする間際、賢一は羽鳥翔吾の亡骸に誓った。

万夜ちゃんは僕が必ず守りますから、安心して眠ってください。

《拷問室》を後にした賢一たちは《食堂》へと駆け込んだ。

あと調べていないのは《食堂》だけだというのに、亀岡万夜と兎沢朱音の姿が一向に見つからない。一体どこへ行ったのか……賢一は募る不安を隠せずにいた。

部屋中を隈無く搜索していた時、エレベーターに続く廊下から、猫矢鞠子の声が響いた。

「犬塚くん、こっち来て！ エレベーターが動いてるの！」

「そんな……まさか……!?!」

信じられないと思う反面で、魚成海斗の一件を思い出し、まさかあれが……とも思った。

半信半疑でエレベーター前までやってくると、眼前の光景に賢一は瞠目した。

「ほんとだ……動いてる……!」

「万夜ちゃんたちはきつと一階へ下りたのよ……それしかないわ……!」

「そうだね……。僕たちも急ごう！」

亀岡万夜と兎沢朱音の無事を祈りつつ、二人はエレベーターへと乗り込む。耳障りな音を響かせて、エレベーターは二人を一階へと運んだ。下りるとすぐに扉があるが、左にも廊下は延びていた。前回来た時は調べずに素通りした廊下だった。

「……どっちへ行ったんだ……?」

「この暗さだし……何とも言えないわね……。近い方から探すべきかしら？」

猫矢鞠子がそう問うた矢先。

「しっ………静かに」

扉を隔てた廊下の向こうから響く何者かの足音を拾い、賢一たち

はエレベーターの陰に身を隠した。足音は徐々に近付き、やがて賢一たちがいる廊下の扉が開かれた。緊張感が高まる中、進入してきた人影を捉えた瞬間、賢一は喜びの声を上げていた。

「万夜ちゃん！」

「!? あ……賢一お兄ちゃん………鞆子お姉ちゃんも………！」

「よかった、万夜ちゃん。無事だったのね」

それは紛れもなく、賢一たちがずっと安否を気遣っていた少女
亀岡万夜だった。

賢一たちの姿を視界に捉えるや否や、亀岡万夜は涙を溢れさせてふたりの胸に飛び込んだのだった。特に外傷も見られない少女の様に、賢一と猫矢鞠子は安堵に胸を撫で下ろした。

喜びに浸るのも束の間、賢一は真剣な面持ちで少女に問う。

「万夜ちゃん………兔沢さんと一緒じゃなかったの？」

「うん………それがね………朱音お姉ちゃんは………」
嗚咽を必死に堪えながら、亀岡万夜は賢一たちにこれまでの経緯を説明した。

「《実験室》にひとり残った……!? くっ………! 嫌な予感がする………急ごう!」

「う………うん………!」

事情を知った賢一は、突如として胸騒ぎに襲われた。亀岡万夜を抱きかかえ、《T字型廊下》へと飛び出す。そのまま《中央ホール》、《足跡のある廊下》と抜けて《実験室》へと辿り着いた。

「兔沢さん………! うっ………!」

「そ………そんな………兔沢さんが………!」

部屋の作業台に横たえられ、無惨にも解剖された兔沢朱音の姿を目の当たりにし、思わず顔を顰めた。

「見ちゃダメだ………!」

咄嗟に亀岡万夜の眼を塞ぐ。しかし亀岡万夜は意外な一言を口にする。

「朱音お姉ちゃん……死んじゃったの？ ……万夜、怖がらないから……最後にお姉ちゃんにお別れ……言いたい。……おねがいだよ……賢一お兄ちゃん」

「万夜……ちゃん」

最初の頃は泣き叫んでばかりだったのに……いつの間にこの少女はこんなにも強くなったのだろうか、と賢一はまるで、我が子の成長に驚く父親のような心境でその言葉を受け止めた。

「判ったよ。……お姉ちゃんに「ありがとう」って……」「ばいばいって言っただけでね」

「うん」

すっかりとした少女の声に、賢一は塞いでいた手を外した。亀岡万夜は変わり果てた兎沢朱音の姿に動じることなく、静かに言葉を紡いだ。

「朱音お姉ちゃん……亀さんを治してくれてありがとう……。万夜もね……お姉ちゃんに逢えて嬉しかったよ……。……だって、動物さんのことが好きだった気持ち……。思い出せたから……。！ だからね……。万夜、大きくなったらお姉ちゃんみたいなお医者さんになるね……。それでいっぱい……。いっっぱいの動物さんたちを治してあげるね……。！ ありがとう……。朱音お姉ちゃん……。」

「ばいばい」

その言葉を最後に、亀岡万夜は兎沢朱音の亡骸に縋って、大声で嘔び泣いた。

まるで賢一たちの分まで代わりに泣いてあげているかのように……少女はそれからしばらくの間……。悲しみの涙を流し続けた。

賢一はまたしても助けられなかったことを悔やみ、激しい憤りに震えていた。

残りの三人 猫矢鞠子、亀岡万夜……。そして鰐淵牙楼だけは絶対に守りきろうと、己の心に固く誓うのだった。

動転した気を静めるのも兼ねて、賢一たちは《中央ホール》で状

況を整理することにした。

「万夜ちゃん、ソレは何？」

「万夜にも判らないの……けど、首輪が取れて……それで鍵^{カギ}が出て来たの」

言われて初めて、賢一は亀岡万夜の首輪が外れていることに気が付いた。

首輪が外れ、しかも？鍵？まで出てくるということは、それが脱出に何らかの関係があるのだと考え、賢一は具体的な経緯を聞くことにした。

「ということなの」

「……なるほど。……万夜ちゃんの過去に、そんなことが……。これはもう、無関係とは言えないな」

亀岡万夜の過去 亀を排水口に流してしまった事故 を聞いた賢一は、今回の事態との関連付けを試みた。

亀を排水口にながしてしまった事を悔やみ、それが原因で動物恐怖症になった少女。

そして今回。恐怖症を克服し、傷付き弱った亀を救いたいと切に願った少女。

結果、少女の首輪が外れ、？鍵？が現れた。

同じような考え方で賢一は、鼠入忠治のケースも当て嵌めてみた。多くの実験用ネズミの命を奪い、命の重さを感じることもなくなつた老爺。

そして今回。薬の効力を自らの身体で試し、生まれた命の尊さを再認識した老爺。

結果。老爺の首輪が外れ？鍵？が現れた。

「同じだ……。この？鍵？は僕たちの過去……。その過ちに関係しているんだ。多分このランプはチャンスの回数……。すべて消えたら殺されるんだ。あのモニターの男みたいに……！」

そこで賢一は例の手紙を思い出す。

『己の罪を認識し、悔い改めよ』

今ならあの意味が……少しは判るような気がした。

同時に、賢一には思い当たる節があった。

かつて我が儘を言って頼み込んだ末に、飼ってもらえることになった一匹の犬のこと。

その犬は、気付いたときには賢一の傍からいなくなっていた為、今の今まで忘れていた記憶だった。

思いを巡らす賢一の耳に、不安に満ちた猫矢鞠子の声が滑り込む。

「犬塚くん……でもそれだと、わたしに当てはまらないよ……」

「え……？」

「だってわたし……今まで動物と関わったことなんて………
ないもの」

「本当に？ よく思い出してみなよ。ずっと小さかった頃とかに飼
つてたりしなかった？」

「……うん。……ないと思う。それに小さい頃の事なんてそう簡
単に思い出せないよ」

「そ……そっか。でもまだ僕の考えが絶対正しいと証明されたワケ
じゃない……もしかしたら別の可能性もあるのかも……」

「う……うん。そうだね」

「とにかく……僕たちはここで何かを成し遂げなければいけないよ
うだ……。だから探そう……！ その希望の欠片（可能性）を！」

「うん！ ?最後まで諦めない? だもんね！」

「ああ。その意気だ」

「万夜も……万夜もお手伝いするの！」

「ありがとう万夜ちゃん。何か気付いたことがあったら教えてね」

「うん！」

意識は脱出から……

己が遂げるべき？何か？を探すことに目的を変え……

賢一たちは一縷の希望を胸に、再び動き出したのだった。

「まだ調べていないところといったら エレベーター前の廊下……」

…あの先だな」

見取り図を確認しながら賢一は呟いた。

「ランプが消えなくても……いつまで時間が許されているのか判らない……だから急ごう」

考え得る可能性を考慮しつつ、賢一は《中央ホール》西側の扉を開き、先へ進もうとした。

その一方で、猫矢鞠子は反対側の扉の前に漂う、鬼火のような光を視界に捉えていた。ふよふよと漂い、まるで猫矢鞠子を誘っているかのような動きをみせる。

「痛っ……！」

不意に、《監禁室》で感じたのと同じ頭痛が猫矢鞠子を襲った。

それはさながら、思い出したくない記憶を無理に思い出そうとすれば……ちようどこんな痛みだろうか、と彼女は経験したことのない痛みを想像して笑った。

「猫矢さん？ どうかした？」

背後から掛けられる賢一の声にも気付くことなく、猫矢鞠子は鬼火に導かれるように走り出した。

「鞠子お姉ちゃん……！？」

「猫矢さ……！？」

二人が引き留めようとした刹那 《中央ホール》を縦に二分する形で、天井から異形が降ってきたのだった。予想だにしていなかった奇襲に、賢一は絶句した。

「くそ……っ！ とにかく今は逃げるしかない……！
猫矢さん……無事でいてくれ」

賢一は心の底から彼女の無事を祈り、亀岡万夜を抱きかかえ《中央ホール》から脱出したのだった。

《二階・血糊のある回廊》

「ハア……ハア……ハッ……！」

鬼火を追いかけて、猫矢鞠子は走り続けていた。鬼火は二階に上がってすぐの回廊を右に曲がり、突き当たりの扉へと吸い込まれて

いった。そこは以前、鍵が掛けられていた扉じゃなかったっけ、と不安が過ぎつつが、扉はすんなりと猫矢鞠子を受け入れた。

《二階・図書室への廊下》

《L字型》の廊下をひた進み、角を曲がった突き当たりの部屋に鬼火が入っていった。廊下左手にある《監視室》とプレートが掲げられた部屋に注意を払いつつ、猫矢鞠子も正面の部屋へと足を踏み入れた。

《二階・図書室》

「どうして……こんな場所が……？」

その部屋は小さな図書館のワンフロアに匹敵するほどの広さを兼ね備えた図書室だった。

日本語を初め、様々な言語の書物が棚に収められている。猫矢鞠子は棚の間を注意深く見て回り、やがてある棚の前で例の鬼火を見つけた。

鬼火は猫矢鞠子の姿を確認すると、一冊の本の中へと消えた。怪訝な表情を浮かべながらも、猫矢鞠子はその本を取り、ページを捲っていく。そこに綴られた内容に、彼女は心底驚いた。

「これって……!？」

なぜならそれは、『猫矢鞠子』の人生を事細かに記した本だったからである。

同姓同名なんじゃないかと疑ってはみたものの、記されている内容はどう考えても自分自身の内容……。否定する方が難しかった。

最初に開いたページは丁度、彼女が高校に入学した時期だった。

彼女は恐る恐るページを遡っていく。次に開いたのは彼女が小学校に入学した頃のページ。そこに記された内容を読んだ瞬間、彼女は激しい頭痛に見舞われた。

「そんな……わたしが……小学校の頃に……猫を……

……飼ってた……？」

信じられないといった口調で、自分自身に問い掛ける。

やがて、猫矢鞠子の封印された記憶が徐々に戻り始め、一本の記

憶として繋がった。

「……………そうだ、わたし……………入学式の途中で猫を見つけて……………飼うことにしたんだ」

しかし記憶の糸は不完全で、細部まで思い出す事は叶わない。

「確か猫の名前は……………あれ……………？ 名前が……………思い出せない……………思い出せないよ」

本に頼ろうとしても猫の名前が記されているであろう箇所は黒く塗り潰されていた。

思い出そうとすればするほど、頭が割れそうに痛み、猫矢鞠子は力なくその場にくずおれた。その際、視界の端に人影を捉えたような気がして、慌てて顔を上げた。

「……………っ!？」

視界に映ったのは顔面蒼白になった自分の姿だった。つまり、さつき感じた人影は鏡に映った自分の影だったのである。

「ああ……………っ! ランプが……………っ!？」
鏡に映る自身の首輪……………そのランプがいつの間にかあと二つになっていることに、猫矢鞠子は恐怖した。思い出されるのは賢一のあの言葉。

『多分このランプはチャンスの回数……………すべて消えたら殺される』

時間がない。

猫矢鞠子はその事を、我が身をもって痛感させられた。

「 さつきの光はどこなの……………!？」

本の中に消えたさつきり姿を見せない鬼火を探す。間もなくして入り口の扉を抜けようとする鬼火を見つけ、猫矢鞠子は無我夢中で後を追う。

来た道を戻り、再び回廊へとやってきた。そして鬼火は平然と、左側の扉を通り抜けた。そこも以前は鍵が掛かっていたが為に、通れなかった扉だった。

そんな猫矢鞠子の不安を嘲笑うかのように、扉は難なく開いた。

彼女はそこで、三階へと続く階段を見つけ、息を呑んだ。

「ひよつとして……これが脱出への……階段……？」

しかし今はそれどころではないのだと思い直し、猫矢鞠子はそのまま部屋を通り抜けた。

部屋を出ると鬼火は左の扉へと入って行った。猫矢鞠子は躊躇いなく後を追った。

《二階・鳥籠のある廊下》

鳥籠が散乱する細い廊下をひた進み、その最奥にある《観察室》へと鬼火は吸い込まれていった。そして猫矢鞠子も当然のように扉を開け、室内へと進入する。

鬼火は隣接する《検査室》を抜け、《記録室》でようやくその動きを止めた。そこで鬼火は《図書室》の時と同じように、今度は古ぼけた映写機へとその姿を溶け込ませた。

恐る恐る映写機を起動させると、間もなくしてある映像が流れ始めた。小さな女の子がダンボールに入れられた子猫を運んで歩くシーン。映し出された映像に猫矢鞠子は見覚えがあった。それは紛れもなく十二年前にあった、自分自身の記憶だったから。

だが彼女は、この先の記憶を思い出せなかった。

一体これから何が起こるのか……。

記憶を思い出せないことに、何か関係があるのか……。

そんな不安を胸に、猫矢鞠子は固唾を呑んで映像を見詰めた。やがて、映像の中の少女は抱えたダンボールを道端に置いた。別れるのが寂しいのか、少女はしばらくの間、子猫の横に屈み込んで泣き続けた。

途端に映像が乱れ、再び移った時には夜になっていた。少女はまだ泣いていた。だが、さすがに帰らないといけない時間になったのか、少女は名残惜しそうに立ち上がると、猫に向かって何度も「ばいばい」と「ごめんね」を繰り返した。にやあと、寂しげに鳴く猫から逃げるように、少女は意を決してその場から立ち去った。決して振り返ることなく横断歩道を渡り、歩道をひた走る。

だが、次の瞬間。

グチャアッ！

突然、背後でそんな生々しい音が響き渡り、少女は思わず足を止めた。やがて道路を囲むように人集りが出来始め、少女もまた、力ない足取りで人垣へと近付いていく。

そして、観衆が見詰める視線を見遣った……次の瞬間。

「あああつ……！」

少女の瞳は、身体中血塗れになって動かない、片眼片足の猫の姿を捉えたのだった。

「あああつあああああつ……！」

その時……少女の中で何かが音を立てて崩れ落ちた。

そこで映像はブツリと途切れたのだった。

「……………ッ！」

映像を観終わった猫矢鞠子は、またひとつ……思い出したくなかった記憶を思い出した。

「……………そうよ……………あの日……………わたしは……………大好きだった……………あの子を……………お母さんと一緒に見つけ……………飼うことに決めたあの子を……………捨てに行った……………んだ……………！」

大好きだった猫が轢き殺されるという現実は、弱冠六歳の少女には耐えられるはずもない衝撃だった。心の崩壊を阻止すべく、少女の本能は緊急避難として、その現実プロテクトを施したのだった。しかし、それでもまだ、彼女は猫の名前を思い出す事が出来ずにいた。

「……………」

まさかと思いなながらも彼女は、隣の《検査室》にあった鏡で、自分の姿を映してみた。するとやはり

「……………あと……………一個……………っ！」

確実に猶予はなくなっていた。

折れそうな猫矢鞠子の心に、賢一の声がリフレインする。

『最後まで諦めるもんか』

「そうだよね……犬塚くん……最後まで希望を捨てちゃ……ダメだよね……！」

きつと助かる道は残されているのだと、猫矢鞠子は自分自身を鼓舞し、再び鬼火を追って部屋を後にした。

首輪のランプがあとひとつと迫る中、鬼火が向かったのは《監禁室》だった。その最奥の檻の中にある、古びたペット用の皿の横に、鬼火は静かに揺らめいていた。

まるで、名前を呼んでくれと請うように……。

だが。
「ごめんね……やっぱりわたし……思い出せない……どうしても思い出せないの……！」

檻にしがみつき、嘆く。

「ごめんさない……お母さん……まりは……お母さんの願いも叶えてあげられ……!?!」

不意に彼女は、初めて猫を拾った頃の……母親の言葉を思い出した。

『願わくばこの子が、私たちの幸せを照らし出してくれる光になればいいわね』

「そうだ……わたし……お母さんのあの言葉をもとに……名前を考えたんだけ……！」

闇に射した一条の光に縋るように、猫矢鞠子は必死に記憶を手繰り寄せた。

「照らす……温かい……明るい……眩しい…………光……
太陽……」

記憶を頼りに言葉を連想していく。

そして遂に。

「太陽……? そうよ、これだわ……! ありがとうお母さん……やっと思い出せたよ……!」

今は亡き母に向かって、そう叫ぶ彼女の表情はこの上なく晴れやかだった。

呼吸を整え、猫矢鞠子は好きだった猫の名前を、心を籠めて呼んだ。

「……………今まで忘れててごめんね　サン……………！」

彼女の言葉に呼応するように、薄暗い室内に光が溢れた。それは瞬く間に一本の鍵が眼前に現れ、彼女の手の手の中へと収まったのだ。た。

「え……………これは……………？」

戸惑う猫矢鞠子の眼前で、鬼火がその姿をゆっくりと変えていく。「ああ……………ああっ……………！」

鬼火はみるみる内に、懐かしき姿へと変貌を遂げた。

紛れもない、サンの姿がそこにはあった。

「　　ずつと逢いたかった……………逢いたかったよ……………サン……………ごめんね……………ごめん……………！」

光に身を包んだサンを見詰め、猫矢鞠子は大粒の涙を溢れさせた。彼女が手を伸ばすと、サンはおもむろに近付いて来て、手を舐めるような仕草をした。それは彼女の中にある、温かな幸せに満ちた在りし日の情景を、鮮明に蘇らせた。

時間にしておそよ十秒。

光に包まれたサンは、名前の削られた皿にその身をゆっくりと沈め、二度と現れることはなかった。

残された皿には幼い筆跡ではつきと『サンのおさら』という文字が見て取れたのだ。た。

にああ

猫矢鞠子は最後に、サンの鳴き声を耳にしたような気がしたのだ。た。

「早く……………犬塚くんと合流しなきゃ……………！」

感傷に浸る間もなく、猫矢鞠子は再び行動を開始した。《監禁室》を抜けようと扉の前まで移動した瞬間、背後で檻の開く音がけたましく響いた。

「……ッ!?」

現れたのは《冷凍室》で見たのと同じ、人間をベースにした異形だった。その数、実に三体。とても猫矢鞠子が太刀打ち出来る相手ではなかった。

希望が見えた矢先の出来事に、彼女は腰を抜かしてその場にへたり込んだ。

刻々と異形が迫る中、彼女は死を覚悟した。

だが、そんな彼女を救い上げる希望の光があった。

「諦めるにはまだ早い……! 最後まで生きること賭けるんだ……!」

「鞠子お姉ちゃん……早く……逃げて……!」

「! 犬塚くん……! 万夜ちゃん……!」

突如として扉を開け放ち、猫矢鞠子の手を引いたのは賢一だった。猫矢鞠子を廊下へと引き込み、急いで扉を閉めた賢一は、持っていた角材をつつかえ棒に、扉を固定したのだった。

「はぁ……はぁ……! 間に合ってよかった」

「ありがとう……犬塚くん……」

息を切らしながら相槌を打ち、賢一はふと気付いた。

「……首輪……外れたみたい……だね……よかった」

「うん……! わたし……ずっと大切なことを忘れていたみたい……。これからはサンの分まで頑張って生きようと思うの……!」

「……ああ……それがいい」

賢一が安堵の表情を浮かべたのも束の間、正面の扉が荒々しく開け放たれ、犬マスクの異形が姿を現した。

「くそ……っ! もう追いついてきたのか……! 二人とも……こっちへ」

出入り口を塞がれた賢一は、やむなく鳥籠が散乱する細い廊下へと避難した。だがそれは一時的な避難でしかなく、むしろ状況は悪くなる一方……。

「賢一お兄ちゃん……うしろっ……!」

中央ホールへと進路を取った。

「……ここなら……どっちから来ても対応できる……！」

「けど犬塚くん……。早く犬塚くんの首輪を外さないと、時間がないかも知れないよ」

「ああ……判ってる……。けど、何をすればいいのか判らないんだ……っ！」

「順を追って考えましょ。最初のランプが消えたのは、この先の廊下を通ってる時だったよね？」

猫矢鞠子は冷静に、記憶の細部まで掘り起こすように話し始めた。

「多分そうだと思う」

「その次はいつだったか覚えてる？」

「……さあ……。自分では見えないものだし……。気付いた時にはあと一個になってて……」

「それはいつのこと？」

「二階の回廊で化け物に遭って……。エレベーターで二階へ辿り着いた時に、調理場の鏡を見て気付いたんだ」

「その間に何か見かけたりしなかった？」

「いや……。何も……。強いて言えばあの化け物に追い回されていたくらいで……」

そこまで考えて賢一はハツとした。

思えばあの化け物は、ずっと自分しか狙っていなかったんじゃないか……？

あの奇声も……。確か一度は「遊ぼう」って聞こえたことがなかったか……？

けど、それらが単なる偶然の一致でしかなかったとしたら……？
今度こそ確実に殺される……！

賢一が導き出した答えは、命を賭けるにはあまりにも心許ない……。細かい可能性でしかなかった。決断しかねる賢一を見透かしたかのように、西側の扉から奇声が聞こえ、間もなくして人間ベースの異形が飛び込んで来た！

「ちえっ……やっぱりあんな棒きれじゃ押さえきれなかったか……！」

賢一は二人をかばいつつ、何とか部屋の中で距離を置こうとした。だが？ベース？は、賢一の動きを先読みして回り込む機動力を兼ね備えていた。

「くっ……なんて速さだ……！このままじゃ」

捕まるのは時間の問題だった。

「《貯水制御室》まで逃げよう……！あそこなら確か……鍵が掛かるはずだ……！」

「わかったわ」

猫矢鞠子の返事に頷いて返し、賢一はタイミングを見計らい、部屋を飛び出した。だが。

「ダメ！犬塚くん……上からも来てるよ……！」

「ならこっちしかない……！」

賢一は《実験室》方面へと回避行動をとった。

しかし、敵の陣形は十重二十重に張り巡らされていた。《叫喚の間》へと繋がる扉が突如として開き、三体目の？ベース？が現れたのだった。結果、賢一たちは《足跡のある廊下》中央から延びる、細い廊下へと追い込まれてしまった。

「ちよつと……この部屋鍵が掛かってる……！行き止まりだ

よ、犬塚くん……！」

「くそおおおお……っ！」

賢一の叫びも虚しく宙に消え、じわじわと？ベース？が迫る。賢一たちはみすみす殺されるのを待つしかないという、絶体絶命の状況に陥っていた。

だが突然、？ベース？たちはその動きを止めて道を開け、廊下に跪いたのだった。

「……？」

不可解な行動に首を傾げていると、聞き慣れた奇声が廊下に響き渡った。

AAAAAAAAAZOOOOOOOOBOOOOOO
OOOOOOO!

それは紛れもなく、犬マスクの異形の声だった。その予想通り、間もなくして異形が眼前に現れた。否応なく緊張感が高まっていく。異形はしきりに叫び声をあげながら、賢一たちの方へと迫ってくる。どこかで落としたのか、大斧を持っていない事がせめてもの救いだった。とはいえ退路はなく、抗う術もない。必死の思考の末に辿り着いたのは、やはりさっき考えたあの可能性だった。一見、分の悪い賭けのようだが、賢一の心境としては違っていた。

あることを確認出来れば、一〇〇%信じられる。それが賢一に残された唯一の希望だった。

だが、それを確認するのは決死の行為でもあった。

「……犬塚くん……………大丈夫だよ。……………自分が信じることをやればいいんだから……………」

「猫矢さん……………」

「賢一お兄ちゃん。万夜も信じてるの!」

「万夜ちゃん……………。……………ありがとう二人とも。僕はもう迷わないよ。自分が守るべき者たちから励ましを受け、賢一の心を覆っていた霧は晴れたのだった。

直後、異形は一気に加速し、鋭い爪と牙を剥き出しにした。

(チャンスは一度つきり……………)

ミスれば死あるのみ……………!

極限の緊張状態の中、遂に異形は賢一をその両手に捕らえた。

「ぐああああああああああああ……………っ!」

「犬塚くん……………!?!」「賢一お兄ちゃん……………!?!」

異形の爪が容赦なく賢一の身体に食い込み、鮮血が飛び散る。気絶しそうなほどの痛みの中で、賢一は気力を振り絞り、異形的首筋へと手を伸ばした。そして賢一は目撃する。

異形的首に巻かれた白色の首輪……………そこに刻まれた?けんいち?という文字を!

確信を得た賢一は、恐怖心をすべて捨て去り、心の底からその名を呼んだ。

「お前が？けんいち？だったんだな……！　今まで気付いてやれなくてごめんな……！」

AAAAAAAAAZOOOOOOOOBOOOOOO
OOOOOOOOO！

「うん……そうだよな。……お前はずっと遊びたかっただけなんだよな……！　ごめんな」

賢一は身体を切り裂かれるのも意に介する事無く、ありったけの想いを打ち明けた。

猫矢鞠子たちが見守る中で、異形は賢一を噛み殺さんばかりの勢いで口を開いた。それを見てもなお、賢一は両腕を広げ、異形を受け入れようとしている。

賢一が己の死すら覚悟した……まさに次の瞬間！

「……………っ！」
くううん

なんと異形は、賢一の胸の中でじゃれついていたのだった。

「やっぱり？けんいち？だったんだ……！　ごめんよ……ほんとに……ごめん……！」

俄然甘えてくる愛犬に、賢一は昔のように何度も頭を撫でてやった。それから数秒もしないうちに、？けんいち？はもとの小さな犬の姿を取り、光となってすぐ傍の《霊安室》と書かれた部屋へと入って行ったのだった。

「あれ……？　鍵が開いてる……」

不可解な現象に戸惑いつつも、賢一は愛犬を追って部屋の中へと入った。

「……………！」

刹那。賢一の脳裏にある映像が流れ込んできた。それは賢一に相手にされなくなった？けんいち？が、トラックに載せられて運ばれていく映像だった。

「もしかして……お前がいなくなったのって……僕の所為だった……？」

意識して初めて賢一は理解した。
気付いたときにはいなくなっていたのではない。賢一が見捨てたのだということ。

部屋の中には棺がひとつあり、光となった？けんいち？はその中へと沈み込んだ。

恐る恐る棺を開けてみると、そこには記憶となんら変わらない？けんいち？の亡骸があった。自分の身勝手で？けんいち？を見殺しにしてしまった事実を知り、賢一は心からの涙を流した。ひとしきり泣いた頃、棺から再び光が現れ、賢一に語り掛けてきた。

ぼく、けーくんに逢えてすごく楽しかったよ。

短い間だったけどありがとうね。ぼくのこと、覚えていてくれて嬉しかったよ

その言葉を最後に光は忽然と消失した。

同時に賢一の首輪が外れ、一本の？鍵？を形作った。

「ごめんよ……ごめんよ……けんいち……！」

それからしばらくの間、賢一は棺に覆い被さったまま涙を流し続けたのだった。

《一階・中央ホール》

「ダメだ……捜せる場所はすべて探したけど……どこにもいない」

「そんな……」

「うう……がろーくん……」

賢一たち三人の首輪も外れ、一安心だと思ったのも束の間。

未だに鰐淵牙楼の姿を見かけていないことに気付き、先程から懸命の捜索を続けているところだった。

だが必死の搜索も虚しく、鰐淵牙楼の姿はどこにもなかった。三人の間に重苦しい空気が流れる。

「……生きていることを信じて……先へ進もう」

「そうね……もうそれしかないよね」

そう決断したものの、賢一は三階への道を、未だに発見出来ずにいることに思い至り、表情を曇らせた。

「三階への階段なら……ちょうどこの上だと思っわ。……さっき、光を追っている時に通ったから……」

「そうか……あの先が三階への……。……よし、すぐに向かおう」

賢一たちはそれぞれの思いを胸に、三階への階段へと急いだ。《足跡のある廊下》から階段を上り《血糊のある回廊》へ。一分もかからずに扉まで辿り着いた賢一たちだったが……。

「……そういえばここは鍵が掛かっているんだった。……くそ……あと少しだったっていうのに！」

「扉は頑丈そうだし……鍵がないと開きそうにないの。……わたしは通れたのは多分、光のお陰だから……」

「鍵なんて……今更どこを探せって言　　!?」

鍵と聞いて、賢一は慌ててポケットを漁った。取り出したのは一本の鍵。それは《冷凍室》で見つけたあの鍵だった。

「……ひよっとして……これが……!!」

二人の期待を一身に背負い、賢一は鍵穴に鍵を差し込み、ゆっくりと回した。すると軽やかな音を立てて、扉が開いたのだった。

「やった……っ……!!」

賢一の喜びに応え、猫矢鞠子と亀岡万夜の二人も歓喜の声を上げた。

「行こう、二人とも。たとえこの先に何が待ち受けていようとも……」

……この騒動の真実を突き止めるんだ……!!」

「そうだね……亡くなったみんなの為に……見届けなきゃだね」

「万夜もみとどけるの!!」

「よし……行こう！」

無惨にも死んでいった者達の為にも、絶対生き延びてやる……！
賢一はそんな思いを胸に、三階へと続く部屋の扉を開け放った。
室内の中央には確かに三階へと続く階段があった。異様な寒気が
漂う中、賢一が先導を切ろうとした……その時。

D A A A A A Z Z Z Z G E E T T T T E E E E E

……！！

「~~~~~ツ!?」「」

不意に轟いた奇声に、賢一たちは戦慄のあまりその場で硬直した。
階段の上から現れたのは、足に布を巻いた異形だった。

「くそ……まだいるのか……っ！」

咄嗟に身構える賢一。猫矢鞠子は亀岡万夜を抱きかかえ、部屋の
隅に避難する。

「……?」

だがどうにも異形の様子がおかしい。一向に襲ってくる気配がな
く、むしろ何かを訴えようとしているかのようですらあった。訝る
賢一の前で、異形の口が動いた。

「M a …………… Y

「a

紡がれた声は異形のそれではなく、どこか懐かしさすら覚える響
きだった。

それに誰より早く反応を示したのは、亀岡万夜だった。

「がろーくん!? ……がろーくんなの!?」

「なっ……!? ……なんだって!?」「そんな……まさか……!?」

驚くべき可能性に、賢一と猫矢鞠子は戸惑いを露わにする。亀岡
万夜の言葉を裏付けるように、異形の身体から何かが抜け落ちた。
警戒しながら賢一が拾い上げたそれは、柄の部分にキャラクターも
ののヘアバンドが止められている、一本のナイフだった。

「……!」

それを目にした瞬間、亀岡万夜は確信した。

異形の瞳……声……足の怪我……そしてナイフ。

すべての要因が、目の前の異形が鰐淵牙楼だと如実に物語っていることを！

「がるーくんだよ……っ！ その子……… やっぱりがるーくんだよ、お兄ちゃん！」

「どうして……。せつかく……… 会えたのに……… こんなことって……… あんまりだ！」

「酷い……。これって鼠入さんと同じ……… 牙楼くんも実験台にされたってことなの！？」

「鼠入さんと……… 同じ！？ そうだ！ 《アンブル》だ！ これを打てばもしかしたら………！」

すぐさまポケットから《アンブル》を取り出した賢一は、それを即座に異形 鰐淵牙楼の身体に打ち込んだのだった。

「……… どうだ……… っ！」

鼠入忠治の時と同じく、薬の効果はすぐに表れた。異形と化した鰐淵牙楼の身体はみるみる収縮し、元の姿へと戻ったのである。

「うっ……… ぐっ……… っ！」

「牙楼くん……… っ！」「がるーくん……… っ！」

三人が一斉に鰐淵牙楼のもとへと集まり、その身を案じる。彼の身体は素人目に見ても深刻な状態であるのは明白だった。

三人の脳裏に最悪の結末が過ぎる中、鰐淵牙楼が目を開けた。

「うっ……… いぬづかの……… にいちちゃんか……。まりこ……… ねーちゃんも……… まやも……… 無事だったんだな……… っ！」

いつ命が尽き果ててもおかしくない状態で、それでも鰐淵牙楼は話を止めなかった。賢一としても、兎沢朱音が居ない今、鰐淵牙楼を助けられないと判断したのか、彼の言葉にじつと耳を傾けた。

「オレは……… 弱いものが大嫌い……… だった……。しょーもない………

親の所為……… でな。……… その反動だったんだろうな……… ある日を境にオレは動物を痛めつけて遊ぶように……… なっていた………。

……… 自分より弱いものを認識することで……… オレはオレを守ろう………

としていたんだらうな……。……嚙った知識をもとに……。えぐい実験なんかも……。さんざん繰り返した……。……そうでもしなきゃ……。……とても生きていられなかったんだ……。……！」

息も絶え絶えに過去を語りながら、鰐淵牙楼は涙を流していた。

「ここに来て……。オレの考えは少しずつ変わっていった……。……弱いくせに……。懸命にがんばろうとする万夜……。……や……。……弱くてもいいんだと……。……言ってくれた鞠子……。……姉ちゃんたちに会えて……。……オレは救われたきぶん……。……だった……。……んだ……。……！ぐは……。……！」

既に内臓がやられているのか、鰐淵牙楼は大量の血を吐いた。それでも彼は語り続ける。「……。そんなとき……。……オレは何者かに身体
の自由を……。……奪われ……。……肉体を……。……改造されちまった……。……
……。……そこで初めて気付いたんだ……。……ああ……。……今までオレに殺されてきたやつらも……。……こんなにも痛くて……。……こんなにも寂しい思いをしたんだ……。……って」

悲しみを絞り出すかのような鰐淵牙楼の言葉に、賢一たちは沈痛な面持ちで見守ることしか出来ずにいた。なおも血を吐きながら、鰐淵牙楼は言葉を継ぐ。

「……。……けど……。……それに気付いたときにはこのザマだ……。……ぜんぶ遅すぎた……。……！無事生きて帰れたらオレ……。……今までの罪滅ぼしをしようって……。……思ってたんだぜ……。……悔しい……。……つたらねえよ……。……悔やんでも……。……悔やみきれねえんだ……。……！なあ万夜……。……オレの分までお前は生きてくれよ……。……
……。……強く……。……生きてくれよ」

「がろーくん……。……」

亀岡万夜はそつと鰐淵牙楼の涙を拭い、彼の名を囁いた。

「万夜ちゃんは強い子だよ。それは僕が保証するよ」

「賢一お兄ちゃん……。……うん。万夜、強い子になれるようにがんばるよ！」

「ははっ……。……最初の泣き虫とは……。……大違いな……。……いい瞳だ……。……」

その時点から、鰐淵牙楼の生気が、急激に低下し始めた。

「がろーくん……！」

彼女の叫びに穏やかな微笑みを浮かべた鰐淵牙楼は、最後の力を振り絞って上体を起こすと、少女の耳元でそつと囁いた。

大好きだ……万夜

「がろーく……」

鰐淵万夜の悲痛な叫びが反響する中、鰐淵牙楼は静かに息を引き取った。その刹那、鰐淵牙楼の首輪が光を放ち、一本の鍵を形作り、直後、亡骸と共に忽然と姿を消したのだった。

奇しくもそれは、鼠入忠治と同じ現象だった。

鰐淵牙楼の死を悼む暇もなく、賢一たちは立ち上がらなければならなかった。

まだやるべきことが残っているのだから……。

七人もの死を背負い、賢一たちは三階への階段を力強い足取りで上っていくのだった。

三階の間取りは極めて単純だった。廊下は一本しかなく、途中に設けられた扉は固く施錠されていた。

周囲を警戒しながら、賢一たちは廊下を進み、やがてモニターがたくさん設置された部屋へと辿り着いた。

《三階・総合監視管理室》

ただっ広い部屋を抜け、奥へと進もうとした時。

賢一はモニターに映し出された映像に怖気が走った。

《二階・隔離室》と表示されたモニターの中で、八つに区切られた小部屋がすべて開放され、中から新手の異形が続々と姿を現したのである。

居場所がバレる前に脱出しようと、賢一は先を急いだ。

モニターの部屋を抜けた先も、一本の廊下があるだけだった。迷うことなく奥へと進み、やがてふたつの部屋の前まで辿り着いた。左側の扉には鍵が掛けられていた為、賢一は右側の扉を開け放った！

《三階・施設長室》

「やあ、君たち。よくぞここまで辿り着いた」

「お前は誰だ……！？」

部屋の中央で椅子に座り、寛いでいた人物に向かって、賢一は吼えた。猫矢鞠子らは賢一の後ろで様子を見守っている。

一見どこにでもいる、いかにも施設の長を務めていそうな初老の人物は、人を食ったような口調で賢一の質問に答えた。

「私かね？ 私はこの施設の長を務めている者だよ。もともと、君たちが話しやすいようにと、今は人間の姿をしているだけだがね」

「人間の姿をしている？ 何をふざけたことを……！ お前の正体は……目的は一体何なんだ！？ どうしてこんなことを……！」

「私の正体？ 目的？ そんなことを知ったところで、君たちにはどうすることも出来ぬ。それでも知りたいと言うつもりかね？」

「ああ……そうだ！ ここまで来たんだ……！ 僕たちには知る権利があるだろう！」

「知る権利と来たか……小賢しい。……なら私たちにも生きる権利はあつたはずだがね？」

どこか噛み合っていない会話に、賢一は苛立ちを募らせる。

「話を逸らすな……！ 質問に答えろ……！」

気迫で負けてはいけないと、賢一は一層語気を強める。

「誰も話を逸らしてなどおらぬよ。今のはむしろ本質……。この施設の本質といえよう」

「本質？」

「左様。いいだろう。君たちの抵抗に免じて、質問に答えようではないか」

酷薄な笑みを湛え、施設長は冷ややかに言い放った。

「私はあらゆる惑星に存在していた、幾兆にも及ぶ動物たちの魂そのものなのだよ。そしてこの施設は、愚かな人間共に対する復讐の場……そしてこの世界は、動物が頂点に君臨する樂園なのだよ。……お解りかな？」

「な……！？ 動物の……魂……？ 復讐……？ 樂園………だと！？」

「いかにも！」

今の言葉を満足に咀嚼出来ない賢一に対し、施設長は誇らしげに返事をした。

混乱に陥る賢一たちを意に介することなく、施設長は口を開いた。「この世界では動物が人間を飼っているのだよ。君たちが自分の惑星で、動物を飼っているのと同じようにな。なぜだか解るかね？」

彼らは生前、人間共に無惨な仕打ちに遭い、命を落とした者ばかり……彼らはね、憎んでいるのだよ。愚かで身勝手な、浅ましい人間を！ そんな彼らの魂が、この世界を創り、私という存在をこの施設を作り出したのだよ」

「さつきから一体……何を言ってるんだ……！？ そんな話を……信じろっていうのか！？」

「信じる信じないは君たちの自由。しかしこれは現実だ。諦めて受け入れるしかないのだよ」

埒の明かない問答に辟易したのか、賢一は例の鍵を取り出し、施設長に突きつけた。

「僕たちは首輪を外し……ここまで来た……！ これがあれば助かるんじゃないのか！？」

賢一が祈る思いで提示した希望を、施設長は一笑に付した。

「誰がいつ、そんなことを言ったのかね？ そんなものは君たちが勝手に決め、信じ込んだ幻想。生還云々など一切関係ない！」

「う………そ………！？」

施設長の言葉に賢一たちは凍り付いた。

鍵が脱出に繋がるものだと思っていたからこそ、ここまでやって

これだ。

だが、その希望すらも打ち砕かれた今、賢一たちに縋るべき希望などありはしなかった。

「お喋りはこの辺でいいかね？ 私たちはまた次の準備で忙しいのだよ」

そう言つと施設長は指を鳴らし、合図を出した。

「……………」

すると、先程モニターで見かけた異形が部屋へと雪崩れ込み、瞬く間に賢一たちを拘束したのだった。

「連れて行きたまえ」

それが最後に聞いた施設長の言葉となった…………。

「……………」

賢一たちは施設内を連行される最中、一様に無言。亀岡万夜ですら、泣き叫ぶことはなかった。

異形たちに連れられてやってきたのは、賢一たちが最初に目覚めた《待機室》…………その隣に設けられた《処理室》だった。

賢一たちは壁際に手足を鎖で縛られ、身動きが取れない状態に晒された。

そして三人は例外なく、胸もとに施設のマークと思しき烙印を押しされたのだった。

約熱の痛みが賢一たちを襲い、誰もが声にならない悲鳴を上げた。
「犬塚くん……………」

「賢一お兄ちゃん……………」

処理が実行される間際、賢一は一人から名前を呼ばれ、顔を上げた。

「……………」

驚くことにふたりの瞳はいまだ、希望に満ち溢れているようだった。

「……………猫矢さん……………万夜ちゃん……………」

「どんな時も最後まで諦めないでしょ！ 希望を捨てちゃダメ

だよ」

「そうだよ、お兄ちゃん」

「ふたりとも……」

自分自身が散々口にしてきたことを改めて聞かされ、賢一は目が醒める思いだった。

「ああ……そうだな。最後まで諦めない……だな」

「うん！ それでこそわたしの知ってる犬塚くんだよ」

「お兄ちゃん、いい顔になったの！」

「ありがとうな……二人とも」

最後の最後まで、三人は互いを励まし合い、笑い合った。

そして無情にも馬ヅラの異形の手によって、賢一たちの処理が実行に移された。

「……！」

異形が大斧を振り下ろした直後……

賢一は光に包まれた？けんいち？の姿を眼前に見た……。

そして。。。

その光景を最後に、賢一の意識は途絶えたのだった……。

烙印を胸に。

「ん……ここは……？」

次に賢一が目覚めた時、視界に映ったのは自分の部屋だった。

「あれ……？ 僕………今までなにを……？」

あたまがぼんやりして曖昧な記憶を必死に辿り思い出す。

「……そうだ……僕………三階に辿り着いて………だけど連行されて………
………処理されたんだ」

脳裏に蘇った光景は、まさしく悪夢と呼ぶにふさわしい内容だった。心なしか酷く汗をかいている気すらした。

「処理されて………あれ………？ でも僕………生きて………あれ？」

記憶の整理がつかず、賢一は軽い混乱に陥った。

殺されたはずなのに生きているということは、やっぱり悪い夢だったのか、とぼんやりする頭を醒まそうと、洗面所へと向かった。

だがそこで、賢一は顔を洗うより早く、意識を覚醒させることになった。

「こ………これは………!？」

賢一の胸もとに、奇妙な烙印を見つけたからである。それは紛れもなく、あの悪夢の中で異形によって押された烙印だった。

「あれは現実だった………？ でも僕は生きて………？ そうだ、あの手紙は!？」

不意にあの奇妙な手紙のことを思い出し、賢一はズボンのポケットを漁った。するとやはり、その手紙はポケットに収まっていた。破った形跡などない真つ新たな状態で。

確かに破ったはずなのに、と訝りながらも、賢一は手紙を開いてみた。そこには悪夢の中でも見た一文が記されており、その手紙には続きがあった。

『なお、この手紙を受け取った者は、
年 月×日の午後 時まで
×県×市の山林まで来られたし』

「年 月×日っていつたら今日だよな。×県×市の山林まで来い
つて。なんだよ……これ」

まったく意図が読み取れない手紙を訝りながら、しかし脳裏に過
ぎる映像が気になって仕方ない賢一は、戦々恐々といった面持ちで、
指定された場所へと向かった。

「ここがその山林……だよな……。……なんだよ、誰もいないじゃ
ん」

指定の時間はとうに過ぎている。それでも一応、賢一はしばらく
待つことにした。

だが、一時間が過ぎても誰も来ないため、帰ろうかと腰を上げた
……。その時。

「ひよっとして……犬塚くん!？」

不意に、悪夢の中で何度も聞いた懐かしい声が自分の名を呼んだ。
振り返るとそこには、悪夢の中で守ると誓った少女 猫矢鞠子
の姿があった。

「猫矢さん!」

「やっぱり犬塚くんだ……! よかった……無事だったんだね……
!」

「無事って……やっぱりあの悪夢は……」

「うん……。あれは間違いなく……現実だったんだと思う」

「やっぱりそうなんだ……」

再会の感動に浸る間もなく、ふたりの間に湿っぽい雰囲気は漂い
始める。

そんな湿気を振り払うほどに明るい声が、突如として上がった。

「鞠子お姉ちゃん! 賢一お兄ちゃん!」

「万夜ちゃん!？」

現れた少女は紛れもなく、亀岡万夜……その子だった。

「よかった……万夜ちゃんも無事だったんだ……！」

「うん……！ お姉ちゃんたちにまた会えて、万夜嬉しいよ」

「わたしたちもよ、万夜ちゃん」

これであの場所にいた三人が揃った……もうこれ以上は集まらないんだ……。

賢一がそう思った矢先、亀岡万夜が意外な言葉を発した。

「そうだ！ 牙楼くんも一緒なんだよ」

「え……？」

驚く賢一をよそに、亀岡万夜は後ろを振り返ると、勢いよく手を振って呼び掛けた。

「牙楼く〜ん。早くおいでよ〜！」

賢一が半信半疑で見守る中、少女の視線の先から、ひとりの少年が現れた。徐々に距離が近付くにつれ、それが本当に鰐淵牙楼だと判り、賢一は思わず視界が滲んだ。

「……そんなに急ぐことねえって言うてるのに……」

「牙楼くん！」

「く……くるしい……鞠子ねーちゃん」

「あ……ごめんね。……でもよかった……牙楼くんも無事だったんだ」

喜びを露わにする猫矢鞠子に、少年はどこか恥ずかしそうに頬を赤らめ、小声で呟いた。

「その節は……どうも」

もはや少年の言動に、初めてあった時のような荒々しさは微塵も感じられなかった。

鰐淵牙楼の生存に涙していた賢一は、不意にあることに気付いた。

「！？ 牙楼くんが無事だったってことは……もしかして……！？」

そんな賢一の子想通り、坂の下から大手を振りながら走ってくる人影があった。

「あぁっ……！」

その姿を認めるや否や、賢一は堪らず駆け出した。

「鼠入さん！」

「おおっ、賢一くんじゃないか。また会えて嬉しいぞ」

「僕も嬉しいです……！でもどうして　ううん……とにかく無事でなによりです」

再会の喜びも冷めやらぬ中、鼠入忠治が神妙な面持ちで話の口火を切った。

「……ところで皆の者……早々に儂らの役目を果たそうではないか。再会よりもむしろ、その為に集められたのじゃろっからな」

「僕たちの……役目……？」

話が飲み込めず呆けていた賢一は、近くに立てられていた看板を見てハタと気付いた。

《動物の不法投棄禁止》

「そうか……ここは……」

「うむ。ここは近年不法投棄が相次いでいる問題の場所なのじゃ。度々ニュースでも報じられておる」

「……けど、弔うのに多額の費用がかかるとかで、未だに放置されたままなのよね……」

猫矢鞠子が悲痛な面持ちで補足を口にする。

「その通りじゃ。……じゃから今日は、せめて儂らだけでも、彼らの供養をしようではないか。そして行く行くは有志を募り、正式な慰霊碑を建てられればと考えておるんじゃよ」

鼠入忠治が描いた絵図に、賢一は心からの同意を示した。

「……そうですね。ここから始まるんですね……僕たちの償いが……」

「ああ……そうじゃな」

「わたしたちも頑張ろうね、犬塚くん！」

「万夜も牙楼くんと一緒に頑張るっ！」

「オレは、お前が無茶しないように見張る役を………嘘嘘……」

……「冗談だ」

その日、賢一たちは棄てられた動物たちのために、日が暮れるまで黙祷を捧げ続けた。

後日。

羽鳥翔吾・兎沢朱音・虫賀奏・善養寺良彦・魚成海斗の変死が、相次いで報じられた。

いずれも、施設でも死因と一致しており、賢一は改めて現実だったのだと再認識した。

その最中、テレビにノイズが走った。

その烙印は一生消えない

テレビ画面を見詰めながら、賢一は胸もとの烙印を指でなぞった。

「さて。そろそろ行かないと。今日も一日頑張らなきゃ！」

明るい笑顔の影に一生消えぬ十字架を背負い……少年たちは今日という日を生きていく。

己の罪を償いながら……一歩、また一歩と……。

歩む道の先に……輝かしき未来があると信じて

了。

烙印を胸に。(後書き)

これにて完結です。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

よろしければ、感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6246s/>

ドリームボックス～ここはヒューマンペット処理施設～

2011年4月24日20時41分発行